支え合いマップ

インストラクター教本

<２０１８年/４月版>

住民流福祉総合研究所＜木原孝久＞
〒350-0451　埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷 1476-1
電話 049-294-8284
ホームページ http://juminryu.web.fc2.com/

本冊子の趣旨と活用法

本冊子は、住民と一緒に支え合いマップづくりをする福祉関係者のためのマニュアルである。主として支え合いマップ・インストラクター・セミナーの際の講義資料として使用している。

改訂に際して、少し中身を変えることにした。これまでは聴取のあり方や聴取の内容、取り組み課題(問題と解決策)の抽出法に絞って取り上げていたが、改訂版では、マップの入門編やこれと関連している住民流福祉についても、少しだけ触れることにした。

⌘

マップ作りの技術は日々、進化している。その時点で最新の情報やノウハウを得るためには、表紙の〈〇〇年〇月版〉の最新版を求めていただきたい。今回も、マップ作りの最新の情報やノウハウをここに詰め込んだので、講義資料としてだけでなく、自習用としても活用していただきたい。

⌘

マップ作りと地域福祉の関連、あるいはマップ作りと住民流福祉の関連等については、簡単にしか取り上げていないので、本研究所のホームページからご自由に選んでお読みいただきたい。私共がこれまで作成してきた約７０種類の冊子が、すべてダウンロードできるようになっている。マップ関連の冊子だけでもかなりあるので、一度は開いてみていただきたい。

◇目次◇

＜第１章＞　**支え合いマップ入門**／５

1.支え合いマップ早わかり
2.ご近所福祉との関係は？
3.支え合いマップ作りとは？
4.マップ作りで必ず守るべきこと
5.どんなことを調べるの？
6.要援護者の見守り状況を調べる
7.要援護者の困り事を調べる
8.要介護者は地域で豊かに生きているか
9.マップ作りはご近所福祉をめざす
10.問題の解決策を抽出するコツ
11.「聴取」はこのように

＜第２章＞　**「住民流福祉」早わかり**／２６

1.あなたの考え方は住民流？
2.「住民流」の核心図
3.住民流宣言
4.業界流を示す８つの「たがる」

＜第３章＞　**聴取とは？**／４２

1.聴取とは生の人間との対決だ
2.聴取は総合力の勝負
3.目指すは強力なご近所福祉づくり

＜第４章＞　**聴取の基本的な心構え**／４８

1.聴取に５つの悪条件
2.悪条件を乗り越える５つの努力
3.聴取が成功するための基本条件
4.取り組み課題が出てくる聴取法

＜第５章＞　**住民の関わり合いさがし**/５７

＜第６章＞　**問題さがし**/６４

1.問題さがしの基本的な心構え
2.「気になる人」さがし
3.問題が出てきやすい「気になる対象」
4.こう考えたら「問題」は見えてこない
5.ダイヤグラムでその人らしさを測定
6.地域の「気になること」
7.認知症で一人暮らし－気になりますか？
8.究極の目標－「ご近所で共に豊かに」

＜第７章＞　**解決策さがし**/９４

1.これはまだ「解決」ではない
2.解決策さがしの基本的なあり方
3.解決策を住民流で練り直す
4.担い手主導・推進者主導は改める
5.「その人らしく」応援型問題解決法

＜第８章＞　**課題を圏域ごとに振り分け**/１０１

＜第９章＞　**「一般化」**/１０３

＜第１０章＞　**マップづくりのまとめ**/１０６

1.まとめの留意点
2.マップで発見した興味深い活動
3.マップで出てきた取り組み課題

＜第１１章＞　**ご近所で協働**/１１２

＜第１章＞

支え合いマップ入門

1.支え合いマップ早わかり

⑴なぜ支え合いマップ作り？

①超高齢化、認知症や単身高齢者の増。７５歳高齢者が３人に１人へ

②介護保険は行き詰り、要介護者の生活支援で地域の助け合いに期待

⇩

⑵支え合いマップづくりとは？

住民の関わり合いを線で結ぶ。要援護者に誰が関わっているか等を調べ、地域の取り組み課題を抽出する。

⇩

⑶マップづくりはご近所で

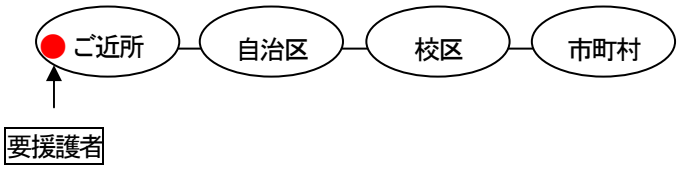
①人々は５０世帯で助け合っていた。

②ここを「ご近所」と呼ぼう。

③要援護者はご近所に住んでいる。

④ご近所さんの支えが頼り。

⑤助け合いのご近所づくりを



❶マップ作り開始 → **❷課題探し**

■目標は「要援護でも地域で自分らしく生きられるように」

■50 世帯のご近所毎にマップ作り

■ご近所から５人程度集まる

■「気になる人・こと」を探し、対策のヒントもマップで探す

気になる人

■関わり合いの線を引く

■一人暮らし、老々、デイ利用者、施設入所者、障害者、引きこもり

■安全、困り事、介護、豊かな生活

気になる事

■買い物・通学が不便。災害対応に問題。子供がいなくなった。交通安全に問題。坂が多くて不便等。

■認知症を隠す地域。デイサービス利用者が多すぎる等

⑷プライバシーの問題は？

■ご近所の人がご近所内の気になる人の情報を出し合い、解決策を考える
■助け合うには、せめてご近所内だけでも情報を共有する必要がある
■行政からの情報は持ち出さない。井戸端会議で出されている情報だけを扱う
■マップ情報はご近所内に閉じ込める

❸ここが問題 → ❹解決のヒント探し → ❺これが解決策

■当人はどんな解決努力をしている？
■周りの人はどんな支援をしている？
■解決に繋がりそうな人や活動は？
■解決行動は極力「住民」の助け合いで
■また「ご近所」の人たちの手で（関係者が上層へ持ち出さない）

2.ご近所福祉との関係は？

ここでは以下のことを説明してあります。①なぜ支え合いマップ作りが必要なのか。②なぜご近所福祉が必要なのか。③マップとご近所福祉の関係は？

福祉関係者はどうしても「ご近所」のことを忘れがちになります。しかしマップ作りはご近所で実施し、ご近所福祉の取り組み課題を抽出するわけですから、両者の関係を知っていないと困るのです。

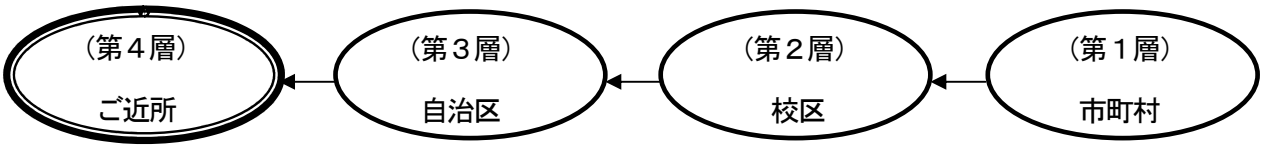
⑴地域には第４層（ご近所）もあった

❶地域は３つの圏域（層）からできている、と言われている。

❷第１層が市町村（数万世帯）、２層が校区（数千世帯）、３層が自治区（数百世帯）。

❸そのあとに第４層もあることがわかった。「ご近所」と称し、およそ５０世帯。

❹昔の日本社会の基本単位は５０世帯だった。国・郡・里の里は５０世帯。



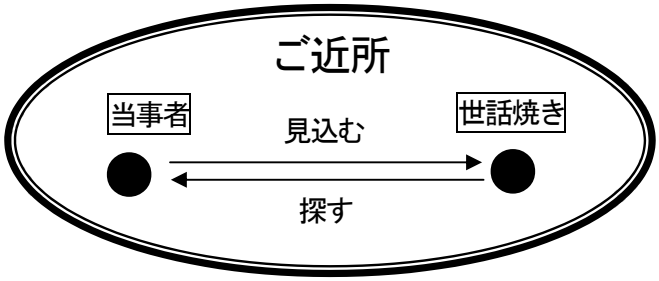
⑵当事者（要援護者）はご近所に居る

❶福祉の対象たる当事者はご近所にいて、そこからニーズを発信している。

❷その心身の状態から、ご近所から出られず、足元の人の善意に頼っている。

❸住民のサービスは大抵、第３層で行われているが、当事者はそこまでは行けない。

❹だから、まずもってご近所の福祉を充実させてほしいと願っている。



⑶ご近所には世話焼きさんがいる

❶ご近所には福祉の人材・世話焼きさんがいる。

❷第３層は広すぎて動きにくい。ご近所なら当事者が見える。ご近所は人材の宝庫。

❸当事者は世話焼きさんを見込む。両者は相思相愛。

⑷助け合いは唯一ご近所で行われている

❶ご近所（５０世帯）ならお互いの「顔が見える」。

❷だから住民は唯一ご近所で助け合っている。自治区以上での助け合いは無理。

❸住民の助け合いには独特の流儀がある。

❹当事者主導・１対１（まとめない）・双方向（お返し）・相性大切・天性主義

⑸支え合いマップを使って

❶ご近所での助け合いは周りからは見えない。

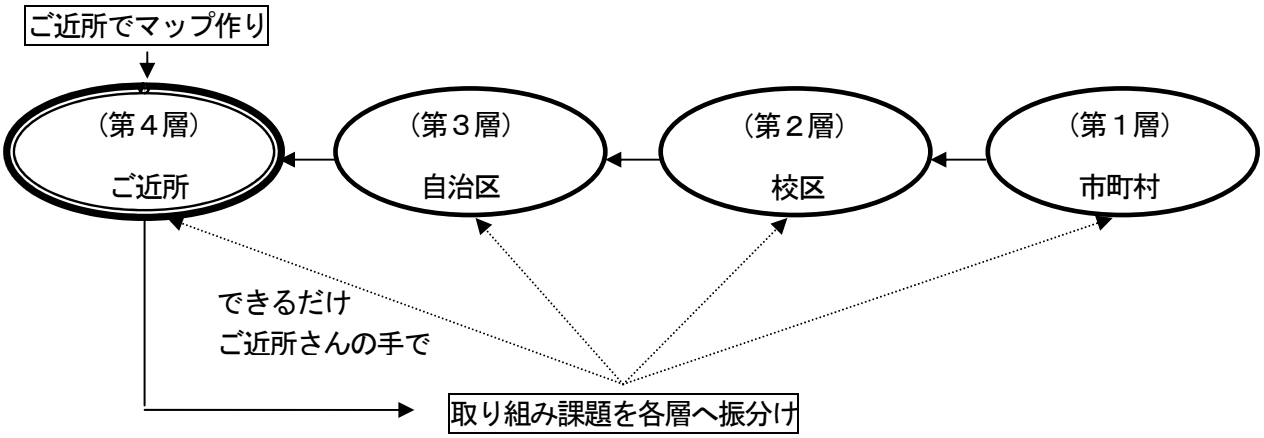
❷ご近所さんは見えないように助け合う。当事者の心を傷つけぬよう水面下で動く。

❸そこで支え合いマップを作ると見える。マップはご近所ごとに作る。

❹ご近所の住人数名の情報を集約すると、助け合いの実態が見えてくる。

❺マップでよりよきご近所への取り組み課題を抽出し、それを各層に割り振る。

❻課題の取り組みはできるだけご近所さんの手で。民生委員等は後押し役。



3.支え合いマップ作りとは？

住民のふれあいや助け合いの実態を、地元の人から聞き取り、住宅地図に記入していくことです。地域にどんな福祉課題があり、住民はどう対処しているか–その結果をもとに、これからどんなことに、どんなふうに取り組んだらいいのかを考えるのです。

■「福祉マップ」と「支え合いマップ」の違いは?

「福祉マップ」は、要援護者を地図に乗せるだけ。「支え合いマップ」は要援護者に周囲の誰がどのように関わっているかも調べます。住民の暮らしにくさの原因も、その問題に対し住民がどんな解決努力をしているかも見えてきます。それを生かすことで効率的に福祉のまちを作ることができるのです。

■地図の人名と位置で思い出す

住民のふれあいや助け合いは、水面下での営みなので、表面では見えません。住民が集まって、ＡさんはＢさんが見守っている、Ｃさんの困り事にはＤさんが関わっていると情報を出し合い、それを地図に集約することで見えてきます。地図の人名と位置関係を見ると、「そう言えばＡさん宅でＢさんの姿を見かけた」などと思い出すのです。

■目的は取り組み課題の抽出

「取り組み課題」とは、「問題」と「解決策」を合わせたもの。課題が出てくるには住民が抱えている問題を打ち明ける必要があります。それができる環境をどうつくるかが課題です。

取り組み課題 ＝ 問題 ＋ 解決策

⑴ 福祉のまちづくりのために、⑵ 住民の支え合いの⑶ 実態を

⑷ 住宅地図に記入して⑸ 取り組み課題を抽出すること。

⑷なぜマップづくり？

①地域を漠然と眺めても、人の関わり合いは見えない。

②地図上の人名と位置関係で、それが見えてくる。

③関わり合いの線の少ない人が「気になる人」。

⑸取り組み課題が出てくるには？

①マップ作りの悩みは取り組み課題が出てこないこと。

②当事者の現状に満足しては課題は出てこない。

③要援護者でも、もっと豊かに生きられるべきだと目標を高くすれば出てくる。

⑴福祉のまちづくりとは？

①要援護者になっても

②住み慣れた家や地域で

③安全かつ心豊かに生きられるよう

④住民と関係機関が協力する

⑵なぜ 支え合いを調べるの？

①要援護者が地域で生きるために、支え合いは不可欠。

②公的サービスの充実で支え合いが低調になった。

③そこで支え合いを盛んにすることが福祉のまちづくり

⑶どんなことを調べるの？

①要援護者がどこに？

②どんな問題を抱えている？

③だれが関わっている？

④福祉のまち作りの課題は？

■要介護でも豊かな生活ができるように

①要援護者になっても、とは「要介護３や４になっても」。

②できるかぎり施設でなく自宅で生きていけるようにする。

③要介護でもふれあいや趣味が楽しめること。

④そのためには、公的サービスと住民の助け合いが連携し、隙間を作らぬようにする必要があります。

■「まちづくり」より「ご近所づくり」を

人々は平均５０世帯でふれあい、助け合っています。ここを「ご近所」と名付けました。支え合いマップはこのおよそ５０世帯ごとにつくるのですが、そこで出てきた課題がそのまま「ご近所福祉」をすすめるための取り組み課題になるのです。

■公的サービスが充実して助け合いが低調に

介護保険制度が始まってから、人々はこぞってサービスを利用するようになりました。お隣さんに頼まなくなったのです。頼まれる方も、「サービスを利用したら？」と言います。こうやって住民の支え合いが段々行われなくなりました。要介護の人が地域で安全に、また生きがいをもって暮らすには、周りの人が見守ったり、仲間入りさせてあげねばならないのです。

■要援護者探しだけでなく誰が関わっているかも

要援護者がどこにいるかだけでなく、だれがその人を見守ったり、困り事を解決してあげているのかも、同時に調べます。その地域（ご近所）が住みにくくなっている問題をつきとめるとともに、住民がどのように解決努力をしているのかも調べます。当事者や住民の解決努力を生かして、彼等が納得できる解決策、彼等が取り組めそうな解決策を考え出すのです。

4.マップ作りで必ず守るべきこと

マップづくりを成功させるためには、マップづくりの基本を守ることが大切です。必要な情報や取り組み課題が出てくるためには、以下のことが必ず守られる必要があります。

❶だれが参加するのか？

◆マップは、「ご近所」ごとにつくります。「ご近所」とはおよそ５０世帯（３０～８０世帯）の圏域で、ここで人々はふれあって生活しています。数百世帯の自治会で一気につくってしまおうとしても、うまくいきません。３００世帯の自治会なら、６つぐらいに分けて、それぞれの「ご近所」ごとにつくりましょう。

◆１０世帯程度の「小ご近所」から１人ずつ集まっていただくと、うまくいきます。人々のふれあい状況について、１人の住民が知っているのは、１０世帯程度の範囲なのです。

したがって、マップづくりに集まっていただくのは５人程度になります。

◆ご近所内のふれあい、助け合いの実態をよく知っている方を選んで下さい。となると、やはり女性の方が断然有利になります。

◆集まっていただく５人は、当然、そのご近所内に住んでいる方です。

◆それに、オブザーバー役、または聴取する役として、自治会や民生委員、地区社協や市町村社協、地域包括支援センターのスタッフなどが参加すれば、出てきた課題に対し、それぞれが関わるべき部分を持ち帰ることができます。

❷だれが「聴取」するのか？

◆マップづくりの場では、聴取する人とそれに答える人という役割分担が生まれます。ではだれがその役を担うのか。

◆まず基本となるのは、ご近所の住民が自分たちのご近所の福祉に取り組むために、お互いの情報を出し合うということです。

◆といっても、マップづくりは一定の技術や知識を必要とするので、自治会や民生委員、あるいは社会福祉協議会などの人が聴取役を引き受けることもありえます。それでも、ご近所の人たちによる主体的なマップ作りなのだという基本原則は忘れないようにしましょう。

◆聴取した結果をマップに記入する役も、聴取者が務める方がいいでしょう。

❸用意する物は？

◆まず住宅地図を模造紙大に拡大したものを用意します。高齢の人もいるので、文字がよく見えるようにする必要があります。

◆太いマジックペンで書きます。色は自由です。ボールペンなどで小さく書き込むのは避けましょう。

◆付箋は使わず、直接書き込みましょう。

◆丸いシールを数色用意すると、要援護の種類毎に色分けして印をつけるのに便利です。

❹作業の時間と回数は？

◆１回あたり１時間半が適当です。これより少ないと情報が出てこないし、多いと疲労してしまいます。

◆それで終了ではなく、その後に「取り組み課題」を整理するために、同じぐらいの時間をとりましょう。

◆ただし、１回限りでは十分な情報は出てきません。別の機会に、他の問題（子どもなど）や、１回目にあまり情報が出なかった所でやりましょう。

❺プライバシーの問題にどう対処したら？

◆マップづくりは基本的に、ご近所の人が集まって、ご近所内の福祉問題を出し合い、対策を考えることです。そのためには誰がどのように要援護になっていて、それに誰が関わっているのかなどを話し合わねばなりません。

◆「自分のことは話題にしないで、放っておいて」と主張する人もいますが、それでもその人に何かあった時や災害の時には周囲の人が助けなければならないのですから、そのために必要な情報は共有する必要があります。

◆マップ作りの場で出される情報は、ご近所の人が知っていること、ご近所の井戸端会議で出ている情報だけです。行政からの情報は要りません。民生委員や自治会長も、行政からもらった情報はマップづくりの場に持ち出さないことです。これは調査ではありません。

◆一見「井戸端会議」ですが、実質はご近所の住民によるケア会議という、重要な営みなのです。

◆出来上がったマップとその情報は、あくまでご近所で助け合いを進めるためのものです。従って、それはご近所内に閉じ込めましょう。ご近所外には出さないということです。

◆本当に助け合いをするには、ご近所内のあらゆる福祉情報（要援護者等の）がオープンにならねばならないのです。「プライバシー」や「個人情報保護」などと言っていては助け合いはできません。助け合いをしたいのか、それともプライバシーを守りたいのか、二者択一になります。

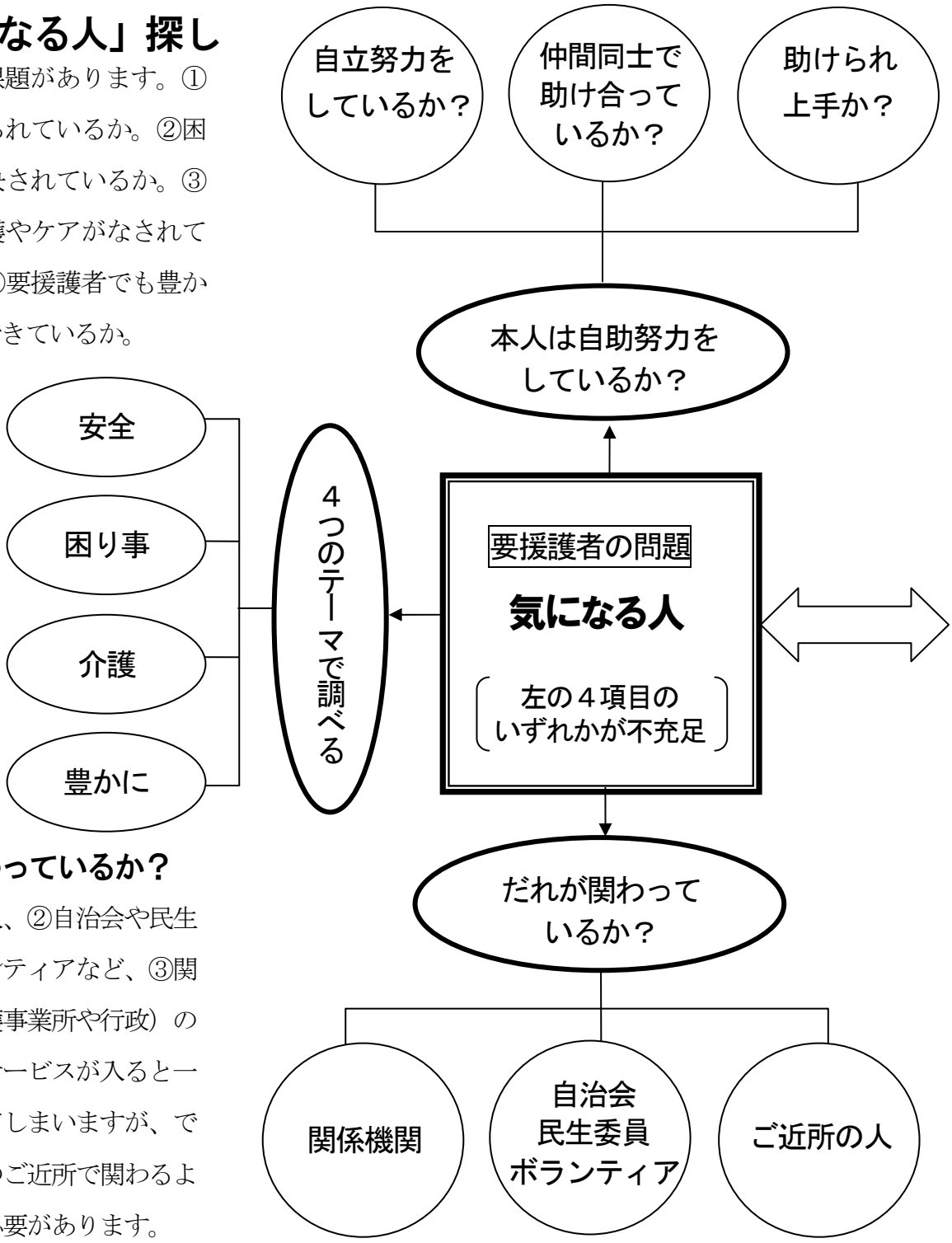
5.どんなことを調べるの？

大きく分けると「気になる人」と「気になること」。前者は要援護者で、住民が気になっている人。後者は住民が住みづらさを感じている問題を取り上げます。

「気になる人」では、その要援護者にだれが関わっているのか、またその要援護者自身が自分の安全確保や問題解決のためにどんな努力をしているか（自助努力）を調べます。

■「気になる人」探し

４つの課題があります。①安全が守られているか。②困り事が解決されているか。③必要な介護やケアがなされているか。④要援護者でも豊かな生活ができているか。



■誰が関わっているか？

①ご近所の人、②自治会や民生委員、ボランティアなど、③関係機関（介護事業所や行政）の３者。③のサービスが入ると一件落着と見てしまいますが、できるだけ①のご近所で関わるよう仕向ける必要があります。

■「気になること」探し

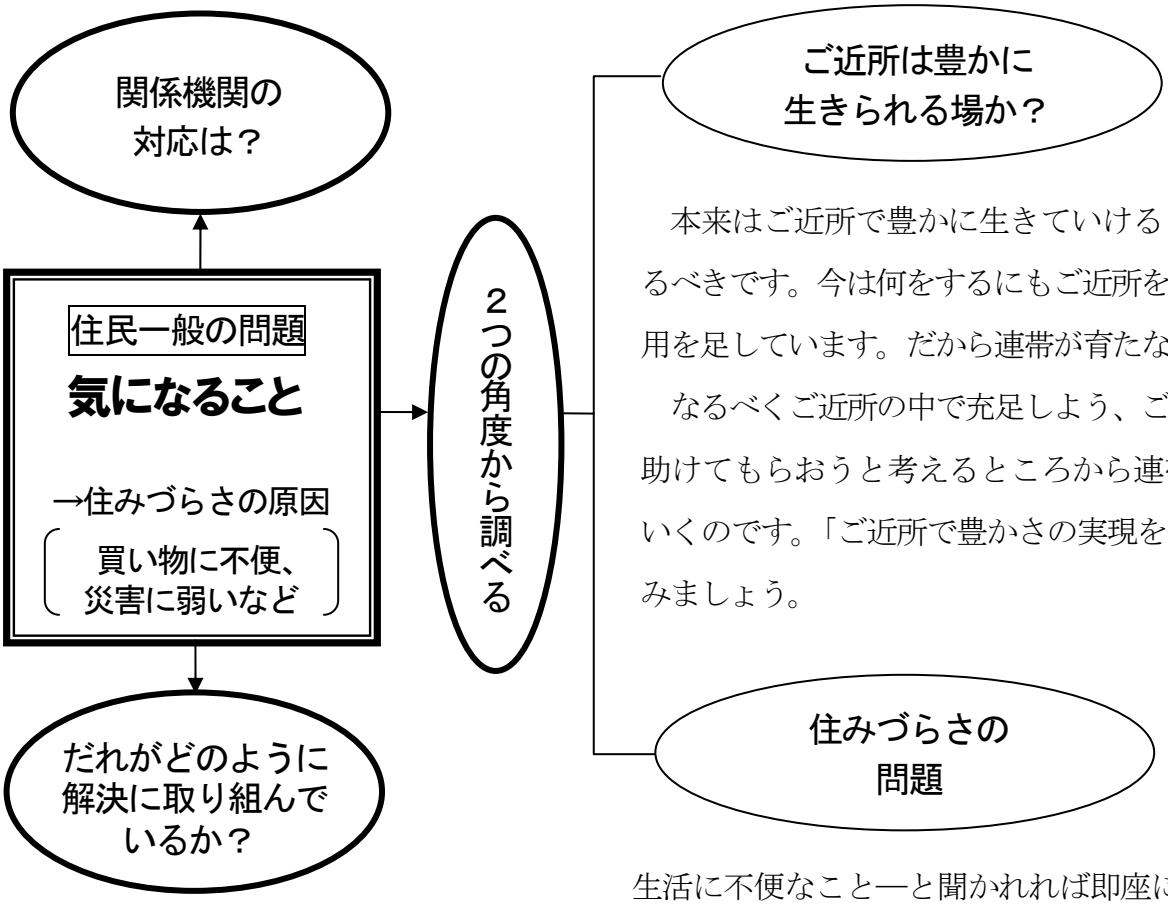
「気になる」理由は２つあります。１つは、実際に住みづらい原因が存在する場合（買い物に不便など）。もう１つは、ご近所で住民は豊かに生きているかです。

「気になること」では、まずその問題に住民のだれがどのような解決努力をしているかを調べます。一方で関係機関はどのように動いているかも調べます。

■誰がどのように取り組んでいるか？

おもしろいもので、地域で問題が生じると、それを解決するための行動をだれかが取り始めます。新旧住民の交流が不足していると、両者が入り混じってのパーティやガレージセールを開くとか。

こうした、ご近所で実際に実践されている解決行動を上手に生かして本格的な企画を立てるようにすれば、うまくいくはずです。



本来はご近所で豊かに生きていけるように努めるべきです。今は何をするにもご近所を出て、他で用を足しています。だから連帯が育たないのです。

なるべくご近所の中で充足しよう、ご近所の人に助けてもらおうと考えるところから連帯が育っていくのです。「ご近所で豊かさの実現を」と考えてみましょう。

生活に不便なこと―と聞かれれば即座にいくつかの問題が出されるはずなのに、そうはなりません。私たちは不便なことに慣れれば、それを意識しなくなるのです。「あきらめ」の気持を捨てないと、「問題」は出てきません。

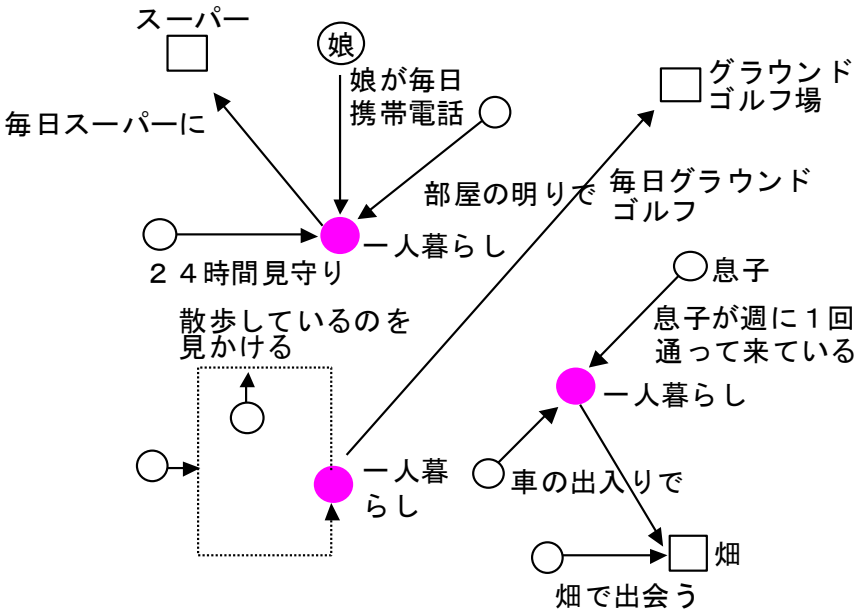
6.要援護者の見守り状況を調べる

一人暮らし高齢者の見守り状況を聞くと、「私が週一回訪問しているから大丈夫」と言う人がいます。孤立死を防ぐには、もっと丁寧に見守り状況を調べましょう。

■本人と地域のあらゆる接点をマップで探る

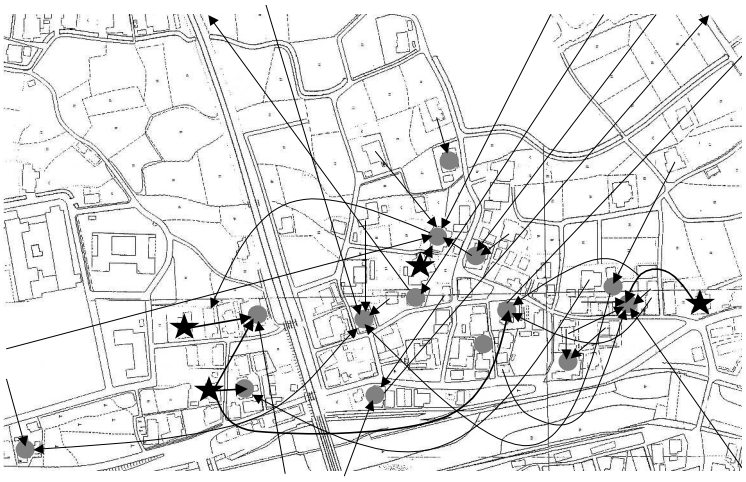
下のマップを見てください。一人暮らしの人へのさまざまな見守り方を示しています。こう見ると、見守っている人は意外にたくさんいるものです。これらを全部合わせると、ほぼ毎日誰かが見守っていることになり、孤立死が防げる可能性が高まります。

隣の人が明りや車の出入りで見守る以外にも①本人の散歩途中に見守る人はいないか、②畑に出かけた時に隣り合った畑の人が見ていないか、③グラウンドゴルフなどに参加した時に見守られていないかなど、本人と地域の様々な接点を洗い出すのです。



■見守りの線を引けば、「気になる人」が浮かび上がる

下のマップは、ある地区での一人暮らし高齢者等への見守りの線を引いたものです。周りから５本も線が入っている人がいますが、この人はとりあえず安全。一方、線の少ない人や、全くない人がいて、この人が「見守りが足りない人」ということになります。



●…要援護者・気になる人　★…世話焼きさん

7.要援護者の困り事を調べる

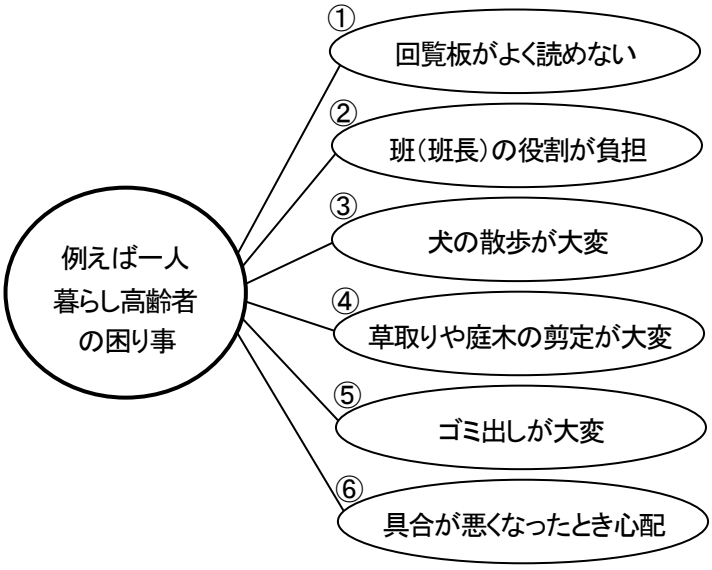
要援護者の安全確認だけでなく、その人がどんな困り事を抱えているのかも調べなければなりません。しかしマップ作りの場ではなかなか出てきません。工夫が必要です。

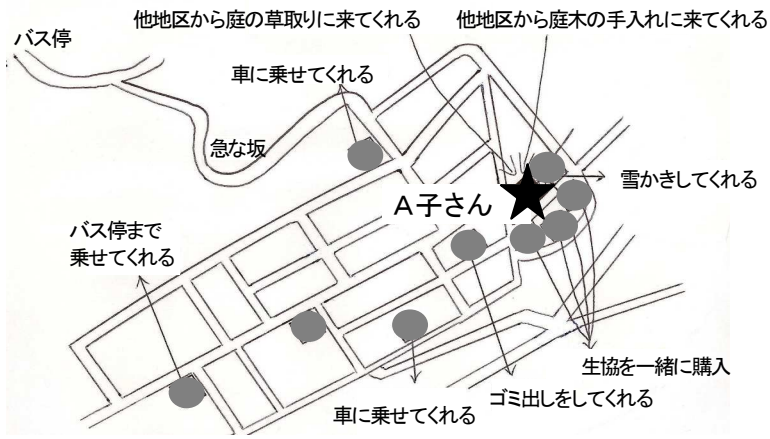
■一人暮らし高齢者は日々，五指に余る困り事を抱えている。

一人暮らしの高齢者は、右に並べたように、様々な困り事を抱えています。それがマップ作りの場で全く出てこないのはなぜか。普段私たちは困り事は表に出さないようにしているためです。

マップ作りの場に世話焼きさんがいれば、自分が周囲の要援護者の困り事にどう対応しているか話してくれます。

助けられ上手の要援護者がいれば、周りの人に自分の困り事をどう解決してもらっているかを話してくれます。





■助けられ上手さんの凄腕

左のマップでは、要介護の主婦が自身で周りから助け手を上手に引き寄せています。マップを作ると、こういう助けられ上手さんが見つかります。これが本来のあり方なのですが、現実には助けられ下手さんが多いようです。

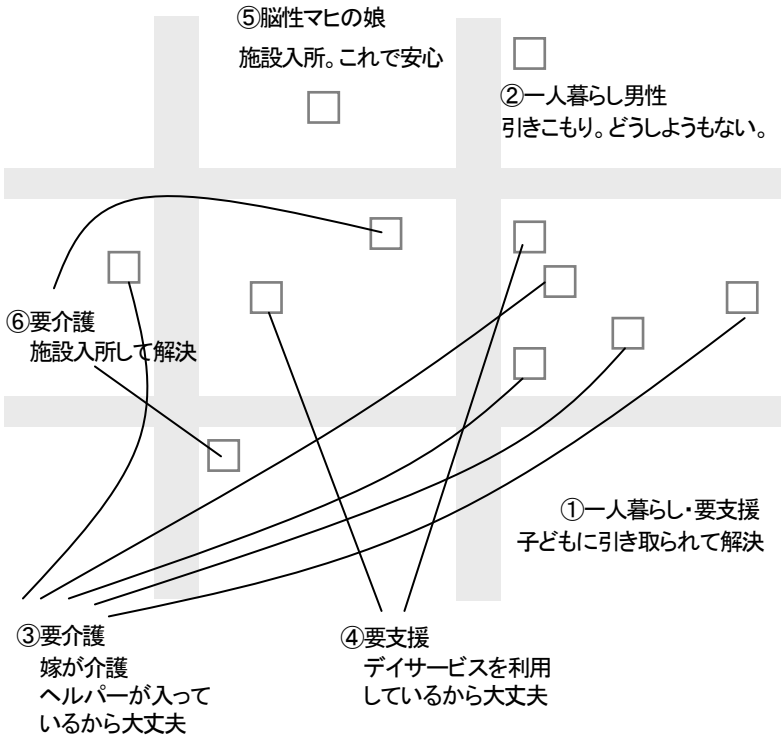
8.要介護者は地域で豊かに生きているか

要介護者が施設に入所したり、ヘルパーを受け入れると「一件落着」とみなすようですが、福祉が目指すのは、要介護でも地域で豊かに暮らせることなのです。

■こう考えたら課題は出てこない

要介護者本人は、地域で心豊かに生きたいと願っています。本人のそうした意向を無視して施設入所などが行われないこと、入所しても地域の趣味グループやふれあいの輪に迎え入れてあげることが大切です。このようなあるべき姿をイメージしながら聴取する必要があります。

右のマップは、それぞれの要介護者について、こう考えたら、いずれも「問題なし」となり、取り組み課題が出てこなくなるということを示しています。



■障害児者の問題で聴取すること

1	家族は障害をオープンにしているか。
2	ご近所の人と交流できているか。
3	地域のグループに受け入れているか。
4	ご近所は家族を支援しているか。

障害者がいる家庭も、そのことを隠す傾向があります。小さい頃から地域とは離れて別の学校や施設に通って来たため交流の機会が少ないのです。それでも地域のふれあいやお楽しみ活動の輪に入っているか調べましょう。

■デイサービス利用者の問題で聴取すること

1	サロンや趣味等に加わっているか。
2	施設で自立を目指しているか。
3	利用は本人の意向か家族の都合か。

デイサービスを利用すると、ふれあいの輪からはずれていく傾向があります。「地域がつまらないから」とデイを選択する人もいますが、これでは本末転倒です。

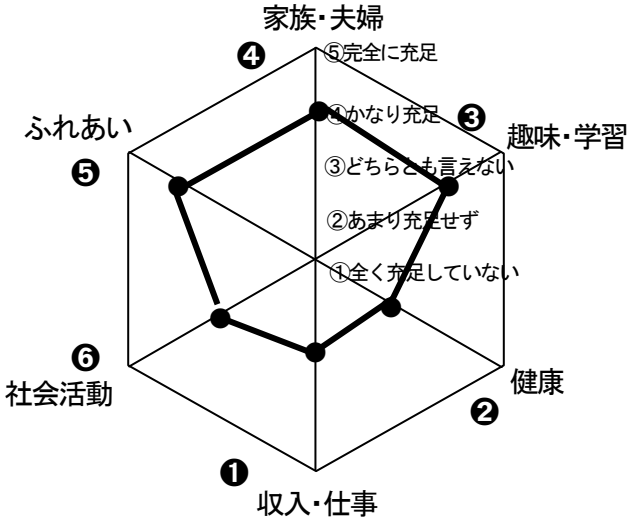
■要介護でも生きがいある生活を

本人の生活状況を点検するための「ダイヤグラム」で本人の豊かさを考えてみましょう。

例えば、８４歳で認知症の一人暮らし女性について住民に聞いてみました。

④家族はどうか？ 妹が近くに住んでいて、毎日、通って来ている。娘も週に１回は来る。では何か楽しみはないのか。はじめは「ない」と言いましたが、自分の畑に毎日行っていることがわかりました。これも立派な趣味です。

⑤ふれあいはどうか。畑友だちが３人いました。⑥何か人の役に立っていることは？ 彼女はおしんこ作りがうまいという。ならばそれを皆におすそわけすればいい。①おしんこを売ったり、作り方を教えて、おこづかい程度の収入になればいい―というように、本人の生活を生かして、より豊かに生きられる方法を考えていけばいいのです。



■ダイヤグラムの測り方

人間が豊かに生きるのに不可欠なのがこの６項目。項目ごとに５段階評価。「完全に充足」が５。「かなり充足」が４。趣味を社会に生かし、収入にもつながる。その過程で友達も増やすというように、６つの充足度を効率よくアップさせるコツがあります。

■要介護者の家族の問題で聴取すること

1	在宅サービスを過剰に利用していないか。
2	息子や、夫が介護するケースはあるか。
3	地域は介護者を支援しているか。
4	ご近所の介護者同士助け合っているか。

要介護者に住民が関わる事例はなかなかありません。「おヨメさんが介護しているから大丈夫」と思うからです。家族のストレス対策や、要介護者の豊かな生活支援などやるべきこともあるのです。

■施設入所者の問題で聴取すること

1	時々里帰りしているか。
2	地域サロンや趣味活動に参加しているか。
3	友達などが施設訪問しているか。
4	実家に近いところに入所しているか。

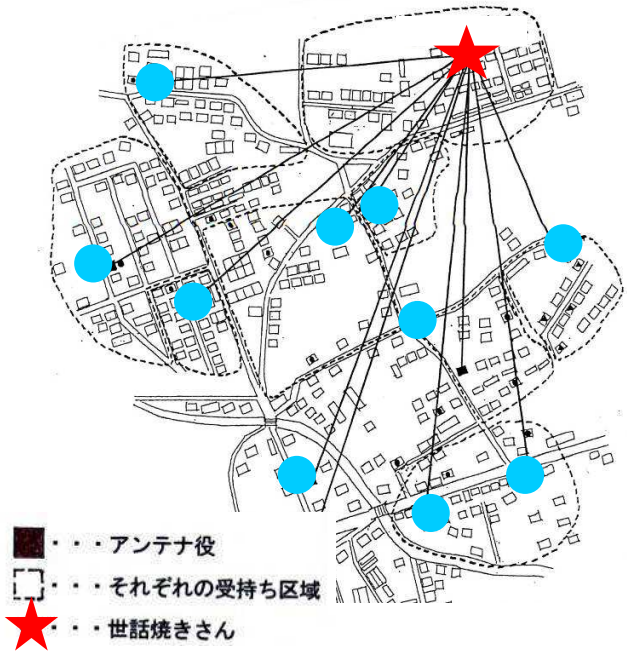
最近は施設に入所しても、ときどき里帰りしたり、昼間だけ地域のサロン等に入れてもらっている人も出てきています。それを地域も、施設側も応援すべきです。

9.マップ作りはご近所福祉をめざす

マップづくりは約５０世帯の「ご近所」ごとに実施します。この範囲でないとお互いが見えないのです。ところがこの「ご近所」は、マップづくりだけでなく、住民が助け合うのにも最適の圏域だと分かってきました。

■自治区も広すぎて見えない

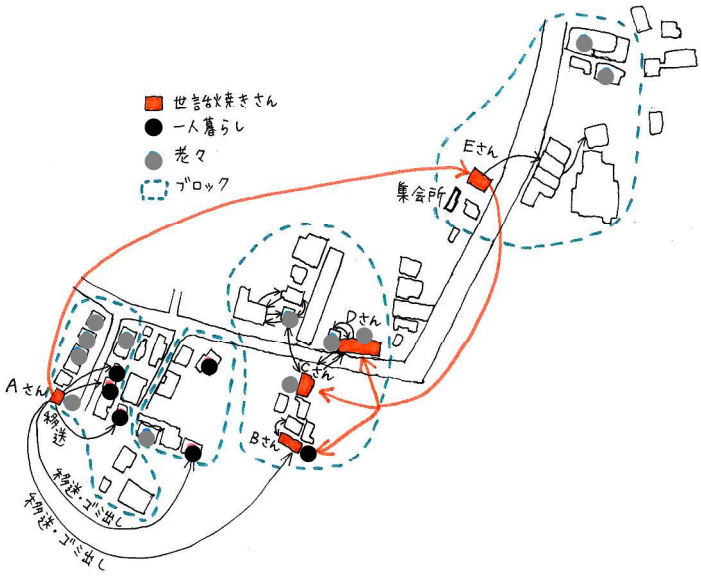
地域では、①市町村に、または②校区にも社会福祉協議会が置かれています。熱心なところでは③自治会ごとに福祉をすすめています。しかし住民は、自治区圏域（数百世帯）でも助け合うには広すぎると言います。平均５０世帯のご近所ならお互いが見えるし、助け合いも容易だというのです。



この地区（数百世帯）を仕切っている女性がいました。しかし彼女が把握しているのは足元の５０世帯だけで、その他の地区はご近所ごとに世話焼きさんを見つけて、その人から情報をもらっていました。

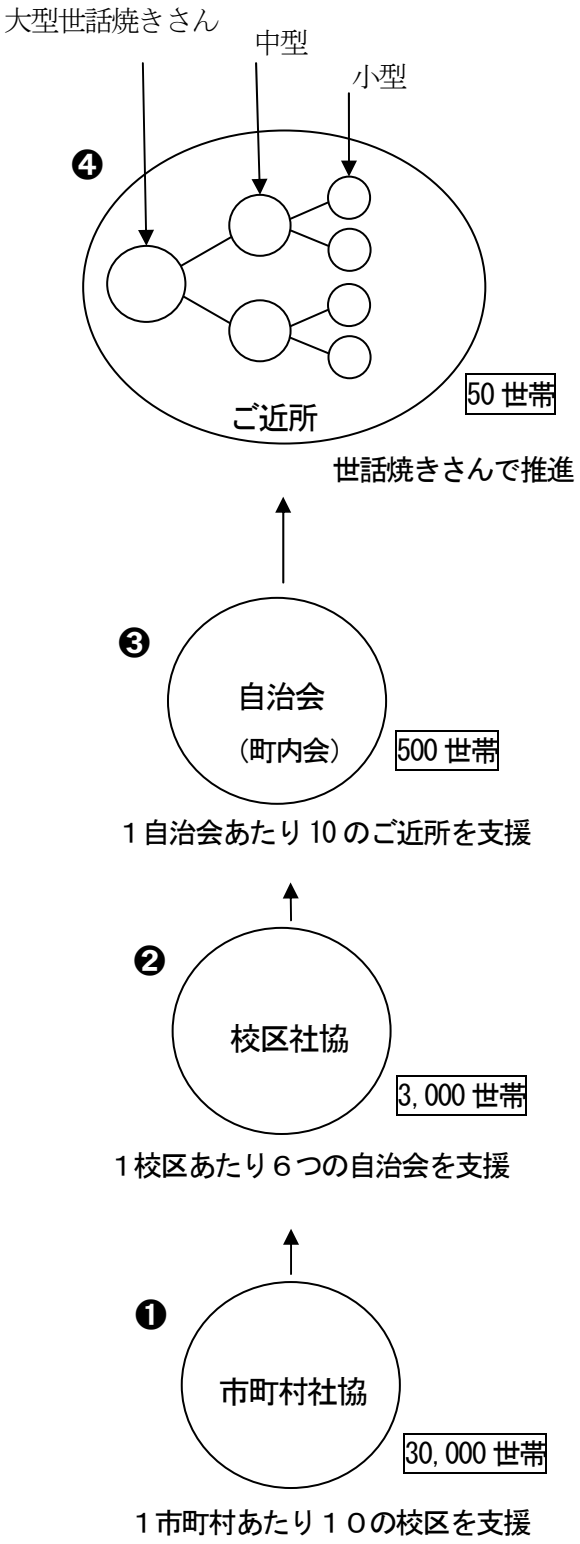
■マップでご近所福祉の取組み課題を抽出

「ご近所福祉」は主にご近所内の有志（世話焼き等）ですすめればいいことで、自治会や地区社協などは、その後方支援役を引き受ければいいのです。だからマップづくりとは住民主体で「ご近所福祉」をすすめるための「取り組み課題」を抽出することということになります。なります。



■大中の世話焼きさんが連携していた

左のマップを丁寧に見ると、４つの小ご近所に分かれており、それぞれに中型世話焼きさん(5,6 人の面倒を見る)がいます。そしてご近所全体を仕切っているのが左端のＡさん（大型世話焼きさん。10 人程度の面倒を見る）です。Ａさんは毎日、各小ご近所の中型世話焼きさんを訪問して、近況を聞いていました。だから、自治会や民生委員は、定期的にＡさんを訪問し、彼が困っている難問への取り組みをサポートすればいいのです。



〈注〉ご近所圏域でマップ作りをする際に、❶❷❸のスタッフも参加し、出てきた取り組み課題の中の、各自自分たちの担うべき部分を引き取って帰る。

■ご近所福祉活動のメリットは？

❶人々の困り事が見えやすいし、わずか５０世帯だから困り事の数も少ない。

❷問題がまだ小さく、芽のうちに解決できる。

❸それだけ住民個々の負担が少ない。

❹世話焼きさんなら容易に解決できる。

❺足元に人材がいるから緊急事態にも即応できる。

■ご近所福祉は住民流で

「ご近所」という小さな圏域で福祉をすすめるには、住民独特の助け合いのあり方に従う必要があります。「住民流」というものがあるのです。

❶住民にとって「地域」とは「ご近所」のこと。

❷そこでは天性の資質を備えた世話焼きさんが中心になって活動している。ご近所福祉の人材は、教育養成をするだけでは機能できない。

❸ご近所では当事者が、助けてほしい相手を選ぶもの。勝手にボランティアを派遣しない。

❹だれが関わってもいいというものではない。相性の合う者同士が関わり合うもの。

❺「ただ一方的に助けてもらうのは困る。私もお返しがしたい」。ご近所は双方向である。

❻意図的なサービスやボランティア活動はダメ。生活の接点でさりげなく関わるもの。

❼地域では一対一の関係が大切。大人数の会食会よりお茶飲みやおすそわけが喜ばれる。

❽ただ安全を守ったり、困り事を解決してあげるだけでなく、「豊かな生活がしたい」という願いに応える必要がある。

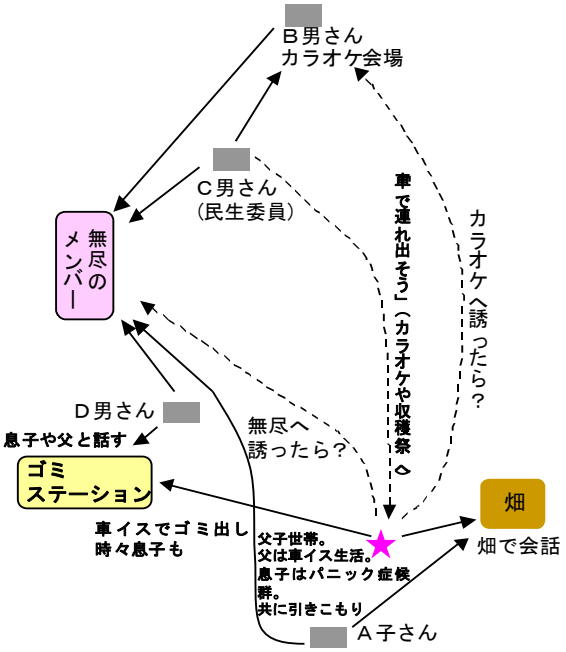
10.問題の解決策を抽出するコツ

マップ作りの最終目的はご近所の問題の解決策を考え出すことです。その際、問題を抱えた当人や周りの人がどのように解決しようとし、また行動しているかを見極め、それを手がかりに解決策を練ることが大切です。

■引きこもり父子をどう開かせる?

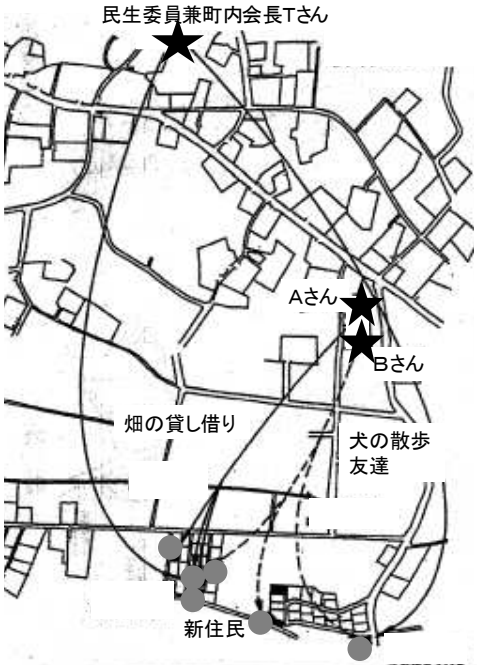
下の表の事例で、右が実際に作ったマップです。

父子共に引きこもり。父は車いす生活で、息子はパニック症候群なので、放置するわけにもいきません。初めは接触の手がかりが見つからなかったのですが、その後、意外な事実が見つかりました。②が本人の行為、③が住民の関わり。これだけでは心もとないのですが、⑤にあるように接触できる可能性が、意外なほどたくさんあることが分かってきたのです。これらに一つ一つチャレンジすれば、どれかが「当たり!」となるはずです。



地域の気になる人	❶生活状況・気になること	❷本人（家族）の対策行動
父親と息子の世帯。共に引きこもり。息子はパニック症候群。	父親は車椅子生活。 頑固で誰とも交流しようとしない。 息子はパニック症候群でコンビニの職も失い、家に引きこもっている。	・畑を持っている。そのルートに坂があるので、綱を張って上っている。 ・畑で隣り合わせたA子さんには話をする。おしんこを作ってプレゼントしてくれる。

❸住民の対策行動	❹解決のヒントになる人・行動	❺解決案
・息子がゴミステーションに来た時に、近くのＤ男さんが声をかけるようにしている。 ・畑が隣り合わせのＡ子さんもできるだけ話しかけるようにしている。自分の死後、息子のことが心配だとＡ子さんに言った。	・以前はもっとオープンで、カラオケにも行っていたし、地区で開かれている「無尽」（頼母子講）にも参加していたという。 ・今もカラオケグループがあるし、「無尽」も行われている。	・思い切って、カラオケや無尽に引っ張り出そう。 ・畑へ行く途中の坂をバリアフリーにしてあげる。 ・彼が作ったおしんこをごちそうになる。 ・息子の仕事をみんなで探してあげる。



■新旧住民の交流をどう実現する?

こちらは下の表の解説。農家主体の地域に新住民が移り住みましたが、両者が溶け合わず、町内会長は対策に苦慮していました。マップを作ってみると、初めは交流の手がかりが見つからなかったのですが、個人的には交流しているのではと質問を変えたら、犬の散歩友達とか、畑の貸し借りで交流が行われていたことがわかりました。会長自身、彼らが子ども会には加入しているのを思い出したのです。それらを生かして、本格的な交流イベントをすれば、うまくいくはずです。

地域の気になること	❶気になる内容	❷住民が取っている対策行動
旧住民と新住民の交流がない。	・農家中心の地域に公営アパートができて、若い住民が住み着いたが、両者の交流がない。彼等は自治会にも加入しないと自治会長が嘆いている。	・個々レベルでは交流していることがわかった。 ・Ａさん（男性）は、アパートの３軒の人に畑を貸していた。 ・Ｂさん（一人暮らし女性）は、アパートの３軒の人と犬の散歩友だちになった。

❸解決のヒントになる人・行動	❹解決案
・前記のように個人的なつながりをもっと探ってみたら、参考になる事例が出てくるかもしれない。 ・「交流がない」と嘆いていた自治会長も、「考えてみたら私は子ども会の役員をやっていて、子ども会には彼等も加入していることがわかった」	・当面は①犬の散歩友だち、②畑の貸し借り、③自治会に子ども会の関係―これらのつながりを他の人についても調べた上で、これらを生かした交流イベントを企画したらどうか。

[表の項目立ての解説]

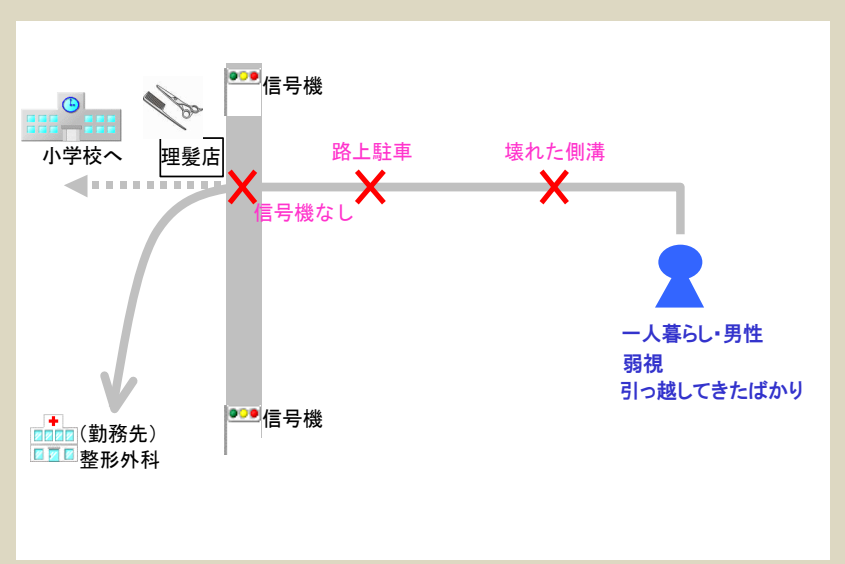
ご近所の問題は２種類あります。１つ目の事例が「個人の問題」、２つ目の事例が「地域の問題」です。それぞれの表に、解決策を編み出すための欄が設定してあります。個人の問題の表では、②は本人がどんな解決努力をしているのか、③は周りの人たちがどんな支援をしているか、④はその人の問題解決には直接つながらないけど、解決のヒントにはなりそうな人材や活動をご近所内から探し出すという意味です。地域の問題もほぼ同様で、②は住民がどんな解決努力をしているか、③は解決のヒントになる人材や活動です。

11.「聴取」はこのように

ご近所の住民にどのように聴取するのか。聴取の模様の一部をフローチャートで簡単に紹介しましょう。ゴシックの部分が聴取者の発言です。

■こんな事例は?と先取り

下の聴取例を見るとわかるように、こちらが「こんな事例はないか?」と具体的な問題や解決策のヒントを提示しないと、なかなか取り組み課題は出てきません。事態を深く読み、ならばこんな活動があるはずと先回りし、相手にぶつけることでようやく反応が返って来るのです。



この辺りで障害を抱えた人は？ → この人は弱視。５０歳で独居。最近引っ越してきた。 → **どこで働いているの？** → ここの整形外科で。 → **どうやって通っているの？**

自宅から、この通りを歩いている。 → **危ない所があるのではないか？** → ここに壊れた側溝がある。ここの路上駐車に衝突している。 → **何とかしてあげようよ。この広い通りは？**

信号機がないので危ない。 → **信号機をつけられないか？** → すぐ近くに２か所、付けてあるのでダメらし → **近くに小学校があるけど、皆さん、パトロールなんかしていないかな？**

している。２班に分かれ，１班は学校まで送り、２班は途中で戻ってくる。 → **２班が大通りに戻ってくる時間と、彼がここに到着する時間の差は？** → 我々の方が１５分早く着く。

皆さんがここで１５分、待ってあげられないかな。 → まあ、できないことはない。 → **それと、危ない道路ではよく、付近の店の人が注意して見ていたりするけど…？**

ここの理容店の主人が、仕事中に窓から外を見ている。 → **その人がどの程度意識的に見ているか、調べてみよう。それに、職場の同僚が、彼と合流できる可能性もある。これも調べてみるといいね。**

＜第２章＞

「住民流福祉」早わかり

1.あなたの考え方は住民流？

以下に、地域の福祉活動に関する問題と解決策を９項目並べてあります。あなたはこの考え方に賛成ですか、それとも反対ですか？

❶**引きこもり**の人が見つかった。サロンに誘ったらどうか？

❷一人暮らしの人の安否が気になる。**見守り隊**を作って訪問しよう。

❸**認知症**なのに一人暮らしの女性がいる。危ないので施設の入所を勧めよう。

❹担当の**民生委員**の訪問を拒否する要援護者がいる。根気強く訪問しよう。

❺家族は**デイサービス**を勧めるが本人は畑に行くと言う。よく説得しよう。

❻認知症になっても**サロン**に来るので困る。家族に説得してもらおう。

❼施設に入所したのに、家に帰りたいと泣いている。家族が訪問すればどうか。

❽校区会館で**認知症カフェ**を始めたが参加者が少ない。意識啓発が必要だ。

❾民生委員や老人会、福祉委員等でご近所毎に**福祉推進体制**を作ろう。

●これらは推進者主導・担い手主導の考え方。住民流は住民主導・当事者主導

９項目は、いずれも福祉の推進者側、または担い手側から問題を捉え、解決策を提示したものです。福祉に携わる人（プロも住民活動家も）の多くはこの方式で行動しています。一方の住民流は、住民側または当事者側から考える方式です。以下はその解説です。

●住民流ならこう考える

❶引きこもりの人がサロンに来たいと思うでしょうか？サロンだけがふれあいではありません。引きこもりの人なりにふれあいをしているはずで、それを探して応援すればいいことです（当事者主導）。

❷高齢者一人ひとり、「私はあの人に見守られたい」という人がいるものです（当事者主導）。見守りにも相性があるのです。その人こそが見守りに最適な人材と言えるでしょう。

❸自分らしく生きたいと思えば、認知症でも、一人でも、在宅生活を願うのは自然なことです。たしかに「危ない」ですが、だから安全な施設に入れるのではなく、だからこそ皆で支える必要があるのです。本当の当事者主導とは、たとえ危なくても、その人の生き方をできる限り尊重することです。

❹民生委員の訪問は社会的な活動なのだから、それを受け入れるべきだと思われがちですが、当事者にとって自宅は私的で個人的な営みの場であり、訪問者を受け入れるかどうかは私が決めるのだと考えます（当事者主導）。私的な営みの場だからこそ、住民は相性の合う人同士、一対一で助け合っているのです（住民主導）。

❺福祉サービス自体、住民には違和感があります。人によっては、デイサービスに行くより、畑の方がよほど楽しいし介護予防の効果もある。畑作業が実質的なデイだと住民は考えるのです（住民主導）。

❻「重い要介護でも住み慣れた地域でその人らしく生きられるように」と国は言います。自分らしい生き方に必要と本人が思えば、サロンにも趣味活動にも受け入れるべきです（住民主導・当事者主導）。

❼施設に入所し、施設の中だけで「その人らしい生き方」をするのは難しい。自宅復帰が難しいなら、時々里帰りできるべきです。友達の家やサロンに里帰りするという事例も。（当事者主導・住民主導）。

❽ご近所から遠い校区の会館を拠点に活動を組み立て、「こちらへどうぞ」と言っても、当事者は簡単に行けません。まずどうすれば当事者が参加しやすいかを考えるのが住民流です。（当事者主導）。

❾「ご近所」とは地域の末端－５０世帯程度の圏域で、住民の助け合いの場であり、実際に活動の中心になっているのは天性の人助けの資質を持った世話焼きさんです。ご近所で推進体制を作るのなら、主役は世話焼きさんにすべきでしょう（住民主導）。

2.「住民流」の核心図

住民流福祉の発想が広がってきましたが、そもそも「住民流」の本質とは何なのか？ これが住民流の核心図です。５つのキーワードはすべて「ご近所」を中心につながっているのです。この中の一つが欠けただけで、住民流から離れていきます。

マップはご近所で作る。これで住民流助け合いの実態が明らかになる。

支え合いマップ

ご近所では住民流の助け合いが最も純粋に実践されている。

住民流助け合い

当事者発

ご近所は当事者主導で助け合っている。（上層へ行くほど担い手主導になっていく。）
福祉の目標や取り組み方、要援護者への関わり方などの大部分は当事者主導に基づいてつくられている。

ご近所

ボトムアップ

地域福祉の中核圏域はご近所。福祉の主役である当事者がここにいるから。ここで対応できない問題は上層へ上げていく。

住民発

住民流の「住民」とは、純粋にご近所の住人のこと。ご近所での助け合いの主役はこの「住民」だ。上層へ行くほど、住民も「関係者」に近くなっていく。

●解説●

●支え合いマップ（「要援護者マップ」ではない）

①マップはおよそ５０世帯のご近所で作る。

②住民は水面下で動いているので助け合いは見えない。マップ作りで助け合いが見えてくる。

③マップ作りで当事者発が見えてくる。当事者が担い手を掘り起こし、活用していることがわかる。

④マップを作ると、ご近所では住民主導で助け合っていることがわかる。しかも住民の流儀で。

⑤マップで出てきた取り組み課題は、その内容によって４つの層に振り分けられる。

●住民流助け合い（住民なりの流儀がある）

①助け合いは唯一、顔が見える圏域である第４層のご近所で行われている。

②住民流助け合いはご近所で最も純粋に行われている。上層へ行くほど住民流は薄れていく。

③住民流の柱は当事者主導である。ここから住民流のその他の特性が派生していく。

●当事者発（当事者が主役）

①ご近所を地域福祉の中核と位置付けるのは、ここに当事者がいるからである。

②当事者主導を実践するなら、ご近所まで足を運ばなければならない。

●ボトムアップ（「トップダウン」の反対）

①地域福祉は当事者がいるご近所から始まる。

②ご近所の実態をマップで調べ、取り組み課題を抽出。ご近所で対応できないものは上層へ上げる。

③マップ作りに各層の関係者が参加して、それぞれが担うべき課題を持ち帰ればいい。ボトムアップでなく「振り分け」。

●住民発（住民が主役。「住民流で活動している人」）

①この場合の「住民」とは、ご近所で、住民流（当事者主導）で助け合っている人々のこと。

②第２層以上で活動している人の多くは、ここで言う「住民」には含まれない。

③上層へいくほど、人々は担い手主導、推進者主導で行動しているので、「福祉関係者」に近い。

④ご近所では住民流で動いている人も、上層へいくほど「関係者」になっていく。

●ご近所（「第４層」のこと）

①一般的な意味での「ご近所」ではない。助け合いの最適範囲（およそ５０世帯）のこと。

②古代の地方行政組織「国郡里」の「里」は５０世帯だった。

③人間の「顔が見える範囲」は昔も今も５０世帯。

④ご近所を第４層というが、当事者主導なら、正しくはここが第１層なのだ。市町村が第４層。

3.住民流宣言

＜１＞主役は住民

住民は宣言するー「福祉の主役は私たちだ」。
まずは住民の「支え合い」があり、
それを補充する「サービス」がある。
何が福祉問題かは住民が決める。
誰が何に取り組むかは住民が決める。
勝手に問題や活動のやり方を押し付けるな。

＜2＞持ちつ持たれつ

善意の一方通行は認めない。
一方的サービスは、
サービスの「受け慣れ」を助長し、自立を妨げる。
見返りを求めない「ボランティア」は、住民には不自然。
すべては「持ちつ持たれつ」。
明らかな対象者にも、活動の機会を与えよ。
どんな対象者も、何か活動している。それを探し出し、認めよう。
明らかな活動者も、助けられの機会を探せ。
助け上手と助けられ上手の「両刀遣い」で免許皆伝。

＜３＞助けられも「活動」だ

「助け」はもちろん「福祉活動」。
「助けられ」もまた立派な「福祉活動」。
助けと助けられの協働で、ベストの福祉ができ上がる。
助け行為に評価や研修、手当が必要なように、
助けられ行為にも評価や研修、手当の支給を。

＜４＞寝たきりだからこそ「ボランティアしたい」

当事者の立場なら、「できれば助けられたくない」。
私が助けられるたびに、私の誇りは危機に瀕する。
だから、要介護の人ほど、「ボランティアしたい」。
弱ってきたら「そろそろボランティア」
認知症になったら「本格的にボランティア」
寝たきりになったら「絶対、ボランティア」。

＜５＞セルフヘルプ

だれにも助けられたくないが、
同じ悩みを抱えた人ならＯＫだ。
私にも相手を助ける機会が巡ってくる。
セルフヘルプグループで、助けたり助けられたり。
ついでに他の仲間にも「おすそわけ」。
福祉はもともと「セルフ」だった。

＜６＞「私」から発する

福祉の主役は当事者だ。
何が私の「問題」かは、当事者の「私」が決める。
どうやって解決するかも「私」が考える。
誰に何を頼むのかも「私」が決める。
必要な資源は「私」が発掘し育成し活用する。
ケアマネジメントは「私」の役割。
ネットワークは、「私」がキーマン。
ケアプラン作りは「丸投げ」しない。
「ケアプラン」でなく、「ライフプラン」。
福祉サービス作りに「私」も入れて！
サービスの評価も「私」が主導。

＜７＞「自分らしい人生を」

住民にとって、めざす「福祉」は、
「困り事の解決」より「自分らしい人生を」。
要するに「自己実現」だ。
「問題の対処」より、「問題を生まぬよう」。
「問題が深刻化してから」でなく、「問題の芽を摘む」。
先手必勝、予防優先。

＜８＞「福祉」を隠せ！

福祉サービスをミエミエでするな。
建物や組織のカタチにするな。
担い手の都合なら「活動をみんなに知ってほしい」。
受け手の都合なら「隠し味にして欲しい」。
福祉施設は「ミエミエ福祉」の極致。
「まち」に「福祉」という特別なものを持ち込むな！
「福祉」の名も活動も見えないが、皆、幸せに生きている
ーそんな福祉を住民は求めている。
福祉は成熟するほど、表面から消えていく。

＜９＞分別せず

住民を分別するな。
人を担い手と受け手に分けるのが今の福祉。
まるで「対象者」という人種がいるように。
子どもや老人を「対象者」と決めつけて、
子どもは児童館や保育園へ、
老人はデイサービスや老人福祉センターへ。
人は分別されるほど、本当に「対象者」に馴染んでしまう、
子どもと老人が出会えば、相互に資源になり得るのに。
「まち」は、いろいろな人が混じり合い、

互いに担い手にも受け手にもなることで、
豊かな福祉の現場になっていく。
施設と地域を分けるな。
施設をそのまま地域にしてしまおう。地域をまるごと施設とみなそう。

＜１０＞相性主義

住民を勝手に集めるな、勝手に動かすな。
住民は自分の気に入った所へ行っている。
気の合った人とふれあっている。
ふれあいやサロンづくりは相性主義。
ヘルパー派遣だって「相性の合う人を」

＜１１＞天性主義

活動の適性は「資格」にあらず。
「まち」のルールは天性主義、生まれ持っての資質が絶対だ。
「地域活動はむずかしい」という人はむずかしい。
むずかしくない人は、むずかしくない。
一口に世話焼きさんといっても、十人十色。
みんなをまとめる「仕切り屋」さん、
「お誘い屋」さんに、「代弁屋」さん、
「口利き屋」さんに「こじあけ屋」さん、などなど。

＜１２＞生活主義

住民は「生活」を崩したくない。
わざわざグループをつくり、どこかへ出かけて、
「さあ、やるぞ！」は、ご免です。
生活の中で、本業の中で、
なんとなくできてしまう「活動」なら、いいですよ。

＜１３＞計画せず組織せず

「まち」は、見えないネットワークの世界。
住民は組織せず、それぞれやりたいことをやって、辻褄が合う。
計画せず、行き当たりばったりで、足元の課題に対処する。
会議を開かず、「あうんの呼吸」で連携する。
広報せず、口コミで伝え合う。

＜１４＞つくらずに、乗る

活動を勝手に「つくりだす」な。
住民はそれなりの活動をしている。
自分達の悩みに、自分達なりの対応策を講じている。
それを見つけ出し、側面後方から援護しよう。
住民の活動に乗り、ちょっとだけ補強しよう。
住民を教育するな、講座を開くな。
住民の普段の営みに「学習」をふりかけよう。

＜１５＞「モチはモチ屋」の腕

住民資源とは、誰のこと？
要介護者だって、赤ちゃんだって大事な資源。
消防署も、公民館も、警察署も、
スーパーも、パチンコ店も、理髪店も、
ヘルパーも、看護師も、保健師も、ケアマネジャーも、
みんな、家へ帰れば「住民」だ。
それぞれが「本業の腕」を生かせば、大資源。
家も、木も花も、犬も猫も、みんな資源。
「地域に住む」とは、溢れる資源の中で生きること。

＜１６＞住民に返せ

サービスの対象者を、住民に返していこう。

当事者同士の助け合いに返せ、近隣の支え合いに返せ。
対象者をサービスに引き取れば、住民は手を引いてしまう。
サービスと住民の支え合いは「車の両輪」にあらず。

＜１７＞そうとわからない支援

住民の支え合いには、後押しが必要。
しかし、ミエミエの支援は嫌われる。
補助金も、そうとわからない支給に、
人材も、そうとわからない派遣に。
福祉施設は当事者宅、推進拠点は世話焼きさん宅、
児童館は子どもが見込んだおばさんの家、
そこに、そうとわからぬ物心の支援を。
「近隣」の場ですべての施策が住民流に変質する。

＜１８＞５０世帯の福祉コミュニティ

福祉の圏域を勝手に決めるな。
住民は、住民なりの福祉圏をつくっている。
住民の支え合いマップで、それを見つけ出すのが先決だ。
小学校区どころか、町内会どころか、
およそ５０世帯の「ご近所」でまとまっている。
それぞれの「ご近所」を、福祉のコミュニティにするのだ。
当事者はその心身の事情から、ご近所から出られない。
足元の人に「ゴミ出しを」「送迎を」お願いしている。
だから、「ご近所を理想の福祉圏にしてほしい」。
幸いなことに、ご近所には世話焼きさんがいる。
世話焼きさんも、もっと広い圏域では、お世話の相手を見つけにくい。
だから、ご近所で当事者と世話焼きさんが相思相愛。

＜１９＞マップで浮き彫りに

まずは住民の支え合いを、ご近所毎に住宅地図に乗せよう。
マップ作りの主役はご近所さんだ。
地図上で一軒一軒、住民の顔を思い浮かべ、
「ああ、あの人は」「そういえばこの人は」と、
記憶の中から蘇らせる。
気になる要援護者はいるか、誰を見込んでいるか、
どんな世話焼きさんがいるか、どんな世話を焼いているか。
どんな生活課題があるのか、住民はどんな対策を講じているか、
掴んだ素材で、さてどんな理想のご近所をつくろうか。

＜２０＞総合プロデュース

住民のニーズを残らず拾い出し、
住民資源を残らず掘り起こし、
そうと気づかれぬようプロデュース。
これで、一人も見逃さない、一人も不参加のない、
困り事の解決だけでなく、その人らしい生活をも保障する、
本物の「福祉コミュニティ」ができ上がる。

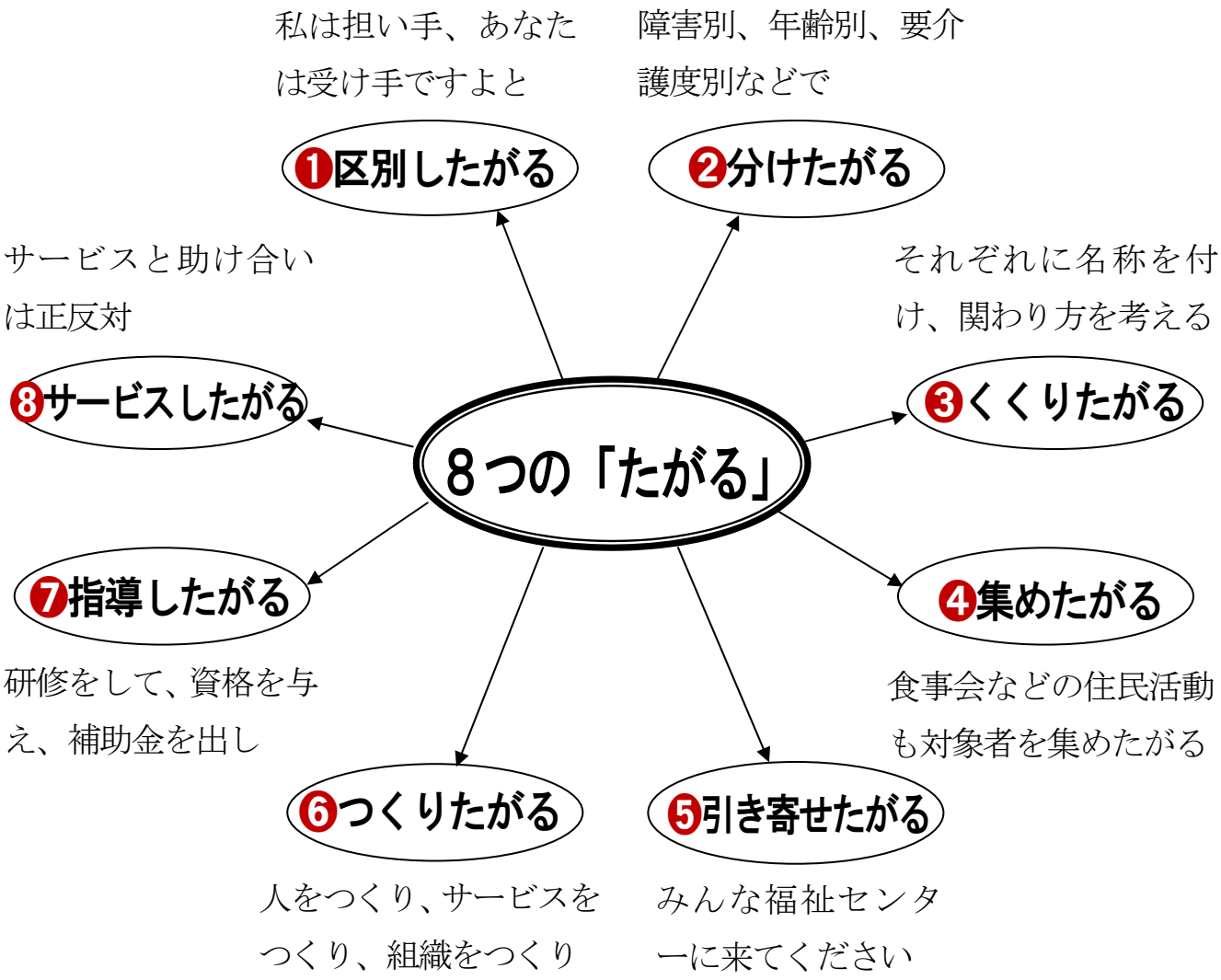
＜２１＞福祉は芸術だ

住民は、限られた力を極大にするために、
いろいろな知恵を使っている。
公的に作られた福祉のなんと単純なことか！
住民の作る福祉のなんと複雑なことか！
彼らの知恵の結晶は、ほとんど芸術品。
福祉は芸術だ。活動は美しい！

4.業界流を示す８つの「たがる」

福祉の対象者を要介護度で分け、一ヵ所に集め、サービスを提供することが当たり前になっていますが、このすべてが住民流に反します。

福祉業界で働く人は、下の８つの「たがる」傾向があります。これらは典型的な推進者主導、担い手主導の行動で、住民流とはまさに正反対になるのです。



●解説●

❶区別したがる

福祉関係者は、人を担い手と受け手に分けることから始める。そして担い手が受け手にサービスを提供することを福祉と呼んでいる。だが住民流では、担い手と受け手を区別しない。

❷分けたがる

対象者を要介護度や障害の重さなどで分けて、一ヵ所に集めて、サービスを提供することが当たり前になっているが、これでは本人が持っている可能性の芽を摘むことにもなる。いろいろな障害や要介護の人が入り混じることで、意外な福祉効果が生まれるのだ。

❸くくりたがる

人はそれぞれ、いろいろな面で異なっている。ひとまとめにすること自体、担い手の都合で福祉をやっている証拠だ。本来なら、人の数だけ関わり方を考えねばならない。これが当事者主体のあり方だ。

❹集めたがる

食事会なども、要援護者を集めて、一定のサービスを提供するのが一般的になっている。関係者だけでなく、住民にもこれらの「たがる」癖ができてしまった。業界流が住民活動家にも広がった。

❺引き寄せたがる

要援護者のところまでサービスを持っていくのは大変だ。だから、こちらが用意した場所まで引き寄せようとする。担い手もまた、センターまで来て活動するよう求められる。推進者の都合優先だ。

❻つくりたがる

サービスや活動、そのための活動組織などは、自分たちで作り出すものだと考えている人が多い。だがマップを作れば、住民はそれなりの活動をしていることがわかる。それを掘り起こし、支援するのが先だ。

❼指導したがる

住民は指導・教育をする対象だと考えられている。だから福祉講座を開き、グループを作り、活動の仕方を教える。それよりも、住民がご近所で始めている活動をマップで掘り起し、支援をすればいい。

❽サービスしたがる

サービスは助け合いと両極端にある。サービスは、担い手と受け手を峻別することから始まり、受け手は受け手一方の立場に立たされる。だが助け合いは、双方向をめざす。

＜第３章＞

聴取とは？

1.聴取とは生の人間との対決だ

■「人に援助をされる者は、もっとしおらしくせよ」？

マップ作りで住民に集まってもらい、いろいろご近所の事情を聴き出すのであるが、それは想像されるほど「穏やか」なものではない。そこに来ているのは「住民」であるが、住民が普段、福祉をどう考えていると思われるか。

ちょっと気になる人が見つかったとする。例えばそれが「引きこもりの男性」の場合、その人にどう関わればいいのかを問うと、まず飛び出すのがこんな言葉である。「あの人は、ヘンにプライドが高い」。プライドが高いのが、なぜいけないのか。人間はだれでも一定のプライドを持っているものである。それが要援護者になると、許されない。「ヘンに」という表現に、そういう気持ちが込められている。はっきり言えば、住民の関わりの対象になっているにしては「頭が高い」という意味である。もっとしおらしくすべきだということだろう。

■「だいたいあの人は性格が悪い」

３０代の精神障害の女性がマップで見つかった。母も同様の障害を抱えている。女性は、ご近所にある一本道を毎日のように散歩している。声をかけても返事をしない。そこでこんな言葉が飛び出した。「だいたいあの人は性格が悪い」。

普通、このような場で、誰かのことを「性格が悪い」と表現することは、まずないだろう。誰が考えても失礼だからだ。しかしこういう言葉が、「福祉の対象者」には容赦なく使われる。

そこで、障害を持つということはどういうことなのかを、時間をかけて説明した後で、今度出会ったら「こんにちは」程度でもいいから声をかけてあげて下さいよ

と言ったら、「あの人は返事もしない」。それでもいいじゃないですかと食い下がった。

そのとき救われたのは、私の脇に座っていた一人暮らし女性が私にこうささやいたことだ。「今日は一つ、宿題をいただきました。彼女と出会ったら、こんにちはと声をかけることにします」。

■「そこまでやらねばならないの？」

ある引きこもりの父子について、どうやって関わったらいいかと切り出したら、皆さん、「あの二人は、どうしようもないよ」と、初めから匙を投げていた。

そんなに難しい相手なのかと、私はいろいろな角度から質問をぶつけてみたら、そうでもないことがわかってきた。父は車いすで毎日、自分の畑まで出かける。彼と畑が隣り合わせだという女性がマップ作りの場にいた。「挨拶ぐらい、かわすのでは？」と水を向けると、「向こうから声をかけてくる。収穫した野菜で作ったおしんこもくれる」という。なんだ、普通の人ではないか。

息子がパニック症候群らしく、コンビニで働いていたが、最近、解雇されたという。父親は心配しているのではと女性に聞いたら、「このままでは死ぬに死にきれない」とつぶやいていたらしい。それならみんなで息子の心配をしてあげればいいではないかと私は言った。すると１人の男性が、「ああいう病気を持ったあの子をコンビニで働かせること自体に無理がある」ともっともなことを言った。「そういえば、俺の家の近くにゴミステーションがあるけど、そこで俺には挨拶をするよ」。

先ほどの女性はまた、父親は畑で歌を聞かせてくれるとも言った。これを受けて、別の男性が、「そういえば、昔はカラオケにも来ていた」。そのカラオケは、今でもみんなでやっているらしい。「それなら、もう一度強引に引っ張り出してみたら？」とけしかけた。いろいろ聴き出しているうちに、父親は地域の「頼母子講」にも参加していたことも分かった。

父子と住民との接点がいろいろ見つかり、そこから接触できる可能性が見えてきたなと参加者も思い始めた時、女性が私にこう尋ねた。「私たち、そこまでやらねばならないの？」。そうだ、と私が言ったら、黙っていた。父子に関わるのが嫌だというのではなく、自分たちがそこまでやらねばならないとは思ってもみなかった、

というのだ。

父の状況や気持を汲んで、どうかこの息子さんを皆さんの子どもだと思って、面倒を見てあげて下さいよと私は懇願するように言った。すると、リーダーらしい男性がこれを受けて、「じゃあ、やるか！」

ここまで来るのに、３０分はかかっている。マップ作りには、こういう「福祉教育」の時間も必要になる。普通の住民は、地域の気になる人について心配し、その人に何をしてあげたらいいのかなどと考えるチャンスがあまりないのだ。支え合いマップ作りの場には、それなりの心構えで来てくれると思うと、期待外れになる。普段の生活そのままの、生の人間との対峙になること―「３０分」の予定外の時間が加わることも、覚悟しておく必要がある。

2.聴取は総合力の勝負

聴取とは、住宅地図を広げて、住民から様々なことを聴き出し、それを地図上に記入していくことである。この聴取という作業には、福祉に関わる総合的な知識と能力が求められる。

マップ作りで、自分の福祉に関する総合力が試されるのだ。だから聴取に成功するには、また進歩するには、一つや二つの側面ではなく、さまざまな面からの進歩が求められる。以下にいくつか並べてみよう。

❶福祉に関する一般的な、幅広い知識

今の福祉の動向。公私の機関の事業・サービスに関する知識。住民やボランティア等の活動の実態。話題になっている問題。これからの動き。

❷マップを作る地域の福祉を含めた各種状況に関する知識

できればマップを作るご近所周辺に関する知識も。

❸福祉のあり方に対する自分なりの考え方

一般的知識と共に、自分なりの考え方を持つ。それも福祉の幅広い分野の持論を。

❹住民とのコミュニケーション能力

様々な住民と臆せず、腹蔵なく話し合いができる資質。考えの違う住民とも率直な議論ができる資質。相手の関心をこちらの方へ向けさせる力。

❺住民を説得、教育する能力

偏見など間違った考えを持つ住民、福祉に理解のない住民を説得、教育する力。

❻住民を掌握する能力

あちこちで井戸端会議を始める住民を統率し、こちらの手順・方針に従わせる力。

❼住民から問題を引き出し、解決策も考えさせる力。

自分たちが抱える問題を考えたがらない住民を説得して、問題や解決策を抽出させる力。

❽住民から得たヒントを基に、課題と解決策を抽出する構想力。
その課題と解決策を住民に納得させる力も。しかも一時間半という時間内に。

❾出てきた課題に積極的に取り組もうと思わせる力。
マップ作りで終わりではなく、その課題に取り組もうという姿勢にさせる力。

3.めざすは強力なご近所福祉づくり

■マップ作りが目的化してしまった

　では、何のために取り組み課題を抽出するのか。ここが今、一番の課題だ。

　ただ一定の範囲を切り取って、その中の人々のふれあいや関わり合いを探して線を引く。要援護者を特定し、関わりの状況を調べる。それでマップ作りは終わり、と思っている人が多い。マップ作りが目的化してしまった。マップを何のために作るのかが、ぼやけてしまった。

■ご近所福祉を進めるための課題を抽出すること

　マップ作りとは、ご近所福祉を進めるための課題を抽出することである。目的はご近所福祉づくりなのだ。

　地域は四つの層からできている。その中の第一層、第二層、第三層への関心は高いが、そのあとに第四層があることが、今の関係者には意識化されていない。

　第四層が重要なのは、ここに当事者がいるからである。彼らはここから出られない。自立生活をするために、ここ（ご近所）の福祉を充実させてほしいと言っている。しかもここには世話焼きさんなどの人材が豊富である。ならばその人材をうまく生かして、ご近所福祉を充実させていけばいい。これが当事者を第一に据えた地域福祉のあり方ではないか。

　そのためにはまず、ご近所でどこまで助け合いが行われているかを探らねばなら

ない。しかし住民の助け合いは見えない。見えないように活動しているからだ。そこで支え合いマップの出番になる。マップを作れば、助け合いが見える化する。その結果をフルに生かして、効率的にご近所福祉を作っていけばいい。

　というわけで、マップ作りとご近所福祉づくりは密接に結びついている。しかも最近は、介護保険制度が行き詰って、住民の助け合いに対する期待が高まっている。今のような自然発生的な助け合いだけでは心もとない。もっと強力なご近所福祉を作っていかねばならない。どうやったら強力なご近所福祉を作ることができるのか、これが喫緊の課題になっているのだ。

＜第４章＞

聴取の基本的な心構え

1.聴取に５つの悪条件

マップ作りの聴取には、様々な悪条件が待ち構えている。いずれもかなり厳しい条件で、その一つ一つを克服していく努力をしなければマップ作りはうまくいかない。

①聴取の時間はわずかに１時間半

–これ以上長いと疲れる。だから一刻も早く相手の懐に飛び込まないと…

②住民と聴取者は初対面

–親しくなるには時間が短すぎる。でも仕方がない

③引き出したいのは、住民がしゃべりたがらない情報

–ある程度強引にでも聞き出す努力をする必要がある

④住民は必ずしも真剣に地域のことを考えてはいない

–こちらが真剣になっていることをまず理解してもらわねば

⑤日本人の“助け合い拒否型”おつき合いの伝統

－自分のことは知られたくない、相手のことは知ってはならない

聴取は極めて難しいということである。ただ淡々と質問をしていけば、素直に答えてもらえるなどというものではないし、相手はそれほど真剣にこちらの質問には

答えてくれない。マップ作りは真剣勝負。聴取する側とされる側の「闘い」でもある。

■あなたの「おつき合い」の流儀は？

まず自分のおつき合いの流儀を確認するテストをやってみてください。以下の項目で「私もそう思う」というものに〇印を、「そうは思わない」に×印をつけます。ここでは〇か×かのどちらかに決めてください。さて、あなたは〇がいくつ、つきますか。

- ❶自分や自分の家族のことは隠しておきたい …… □
- ❷自分のことがご近所で噂されるのはイヤ …… □
- ❸人に助けを求めるのは苦手だ …… □
- ❹人に迷惑をかけることだけは絶対にしたくない …… □
- ❺人のことはなるべく詮索（せんさく）しないようにしている …… □
- ❻誰かが認知症だと気づいても、誰にも言わないようにしている …… □
- ❼困っている人にはお節介と言われない程度に関わる …… □
- ❽引きこもるのにも事情があるから、無理にこじあけるべきでない …… □
- ❾お互いのプライバシーは十分に尊重し合うべきだと思う …… □
- ❿隣人とはあまり深入りせず、ほどほどのおつき合いを心がけている …… □

2.悪条件を乗り越える５つの努力

このような悪条件のもとでも、何とか聞きたいことを引き出すには、よほどの努力が必要だ。尋常な聴取では、こちらが聞きたいと思うことは引き出せない。

①住民のフトコロ深く入り込む

ーいかにも長い付き合いのような顔をして、相手にぶつかっていく

②「この人は、このご近所のことを本気で考えている！」

ー真剣な姿勢を態度で見せる

③聴取の主導権を握り続ける

ーこちらの聞きたいことに答えてもらう。無駄な時間を作らない。スピード感をもって。情報を持っている人を早めに把握し、質問を集中させる

④攻撃的聴取

ー住民が語りたがらないことも、かまわず質問

⑤教育的聴取

ー福祉の目指すものを住民に納得させる。福祉教育をする気持ちで。

⑤の教育的聴取とは何か。地域福祉とは、どんなに要援護状態になっても、住み慣れた家や地域で安全、かつその人らしく生きていけるように、関係者と住民で協働すること。このことを徹底して頭に入れておくのだ。聴取の間にこのことを忘れてしまったら、とたんに聴取の目標を失うことになる。

住民との話し合いの中で、そうした高い目標を提示したら「そんなのは非現実的だ」という声が出てくる。それでもぐらつかない。福祉の理想をレベルダウンさせるわけにはいかないと毅然としていなければならない。同時に、なぜそんなに高い目標を設定しているのかについて、住民に理解させ、納得させる努力も欠かせない。

3.聴取が成功するための基本条件

①ご近所ごとにマップ作りをする
ー数百世帯の町内を一挙に作るのは厳禁

②ご近所から最低５人は集まってもらう
ーご近所に在住の人に限る

③できればこちらが求める人材を
ーご近所の人間関係をよく知っている人。プライバシーにこだわらない人。
世話焼きさん。オープンな要援護者。福祉問題がよく見える人。

④住民の少数精鋭とケア会議というやり方も
ー多人数が集まると、住民は周りの人を気にして情報を出さない

⑤「プライバシー」問題では毅然とした姿勢で
ー「その人を助けるか、プライバシーを尊重するか」の選択

特に①と②は絶対守る。②ご近所外の人で、そのご近所のこともよく知っている人もいることはいるが、「知っている」というのは、要援護者の所在であって、その要援護者にだれが関わっているかは近くの人でないとわからないのだ。

④の問題。たくさんの住民に集まってもらったのはいいが、お互いが牽制し合って、認知症の人などについて全員が口をつぐんでしまう、ということが起こる。こういう場合、マップ作りで見えてきたそのご近所の世話焼きさん数名を呼び集めて、関係者と一緒に再度マップ作りをするのだ。これなら情報は何でも出てくる。マップ作りの場は秘密会の性格を持っている。ケア会議の場でもある。そこに住民がだれでも自由に参加してもいい、とはいかない。だから、そういう重要な情報が出しにくい状況になったら、今述べたやり方に切り替えるのも一つの方法だ。

　実際にマップ作りの場ではどんなことが生じているか。
■クレームを出す人がいたら、「とにかくマップ作りをやってみましょう。終わった後で議論に応じますから」と言うと、最終的には何も言わずに帰っていく。
■「助け合いをしたいのか、それともプライバシーを守りたいのか」の二者択一になる。**これはじつは「二者択一」になりえない。人は助けなければならないからだ。だから、クレームが出て来てもそれを情熱で押し返す「強さ」が必要。現に、「町民を絶対に助けるのだ」という情熱を持った自治会長は、そんなクレームは難なく蹴散らしている。人助けには強引さも必要なのだ。**
■マップ作りの場で、ある高年男性がこんなことを言った。「俺の足元に鬱の人がいる。しかし俺はそのことを周りの誰にも言わない。『言わない』ことが、俺のその人に対する福祉活動だと思うよ」。私はその男性にこう問いかけてみた。「もしその鬱の人が、鬱が原因で何か困ったことが生じたら、誰が助けるのでしょうか？」。その人が鬱であることをだれも知らないのだから、助けようがないのだ。すると彼は目をじっとつぶったままで、結局は何も答えなかった。
「プライバシーを尊重しようという人は、人を助ける気はない」。極論に見えるが、そう理解してほぼ間違いないと思う。プライバシー尊重と助け合いは「対決概念」と考えた方がいい。

■関係者の中にも、マップ作りの場で住民の問題をあれこれ話し合うことに、後ろめたさを感じる人もいる。民生委員から、よくそんな悩みを聞かされる。あるテレビ番組でマップを紹介してもらった時、その場に参加していた社会福祉協議会の職員が、「マップ作りの場で自分のことが話し合われるのは気持ちが悪い」と発言した。「後ろから弾が飛んできた」ことに、私はショックを隠せなかったものである。
　福祉とは、当人は知られたくないし、言いたくないことを敢えてさぐり出し、社会にさらけ出して、時には当人の意思に反して、強引に助けの手を伸ばしてしまうことでもある。「きれいな営み」とは言えない。自分のことがマップ作りの場で俎上に載せられて話し合いをされるというのは、できれば避けたいことだろう。しかし、それをやらねば救えないのだ。その救いの実践者であり推進者が福祉関係者なのである。関係者本人が「気持ちが悪い」と言ってしまったら、おしまいだ。

■マップづくりは、ご近所の人たちの普段の私的な営みを把握する作業である。だから、ご近所さんに聴取する場合、いかにも公的な営みのようにするのはうまくない。**私的な営みの把握には、聴取のやり方も私的なやり方を取る必要がある。ベストのやり方は、ご近所さんたちで井戸端会議を開く中でマップができてしまうということだろう。**自治会役員や民生委員、社会福祉協議会のスタッフなどは、その後方支援、協力者役でいい。そこまで引くのだ。

ご近所の人たちが井戸端会議を開き、その成果を住宅地図に乗せることが、「個人情報」の問題になるだろうか。マップ作り自体が私的な営みであれば、井戸端会議の中身を誰かに公表する必要はない。「会議」をひらいた人たちの胸の中に収め、その後の福祉活動の題材として生かしていけばいいのだ。ご近所の人たちにも、あるいは他のご近所の人たちにも伝える必要はない。

マップを作ること自体を自治会長に報告、ないしはお伺いを立てる必要も、本来はないのだ。「今日はだれとだれで井戸端会議を開きます」と報告する人はいないのと同じだ。

現実には、マップを作ろうとしても自治会長の理解を得られずに断念しているケースがあまりに多い。だからマップづくりを公的な営みから引き離して、ご近所での私的な井戸端会議という営みにしてしまうという手もあるのだ。現に民生委員は、自分の担当地区内で住民と一緒にマップづくりをしている。自分の活動のヒントにするのだから、誰からも文句を言われる理由はない。それと同列にあると考えたらどうか。

■「ここだけの話ですが」バウムクーヘン型プライバシー論

「ここだけの話ですがね」ー内緒話をする時の枕詞である。「ここだけ」に限って話します、それより外の人たちには聞かせない、ということだろう。

「ここだけ」の「ここ」にはいろいろな範囲がある。その会場に集まった人たちとか、家族や親族だけとか、クラスの中だけとか、班内、町内など、いろいろある。その場合、そこで話される話は、その中の人たちだけのプライバシーということが

できる。大抵の場合のプライバシーとは、家族だけしか知らないことで、よその人には聞かせない、知らせない、知られては困る、という話である。

■班ごとマップはなぜうまくいっている？

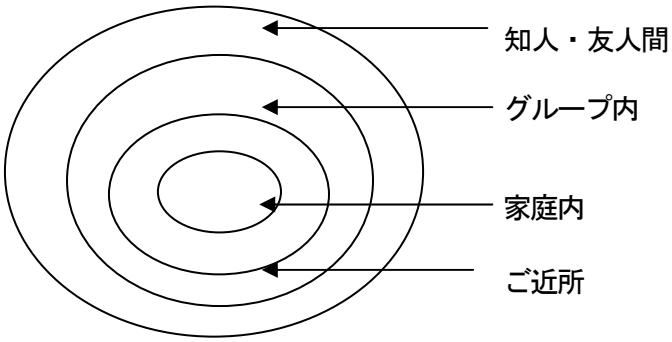
しかしプライバシーはそれだけではない。その組（班）だけのプライバシーというのもある。組の人たちには知られても仕方がない、防ぎようがない、しかも知っておいてもらわないことには、いざという時に困る。しかし組の外の人には知られたくない。知られても、助けてくれるわけではない。

そこで私たちは「班ごとマップ」を提案している。町内単位でマップを作ると、自分のプライバシーが侵される心配があるということで、なかなかマップづくりができない。だからそれはあきらめる。その代り、班ごとにマップを作るのなら構うまい。知られては困るという人もいるが、この範囲では既にプライバシーは知られてしまっているし、だからこそ、いざ困ったとき助けてもらえるのだ。というわけで、班ごとマップはうまくいっている。

■二階幹事長の怒りに一理あるとすれば…

さて、話はまだ続く。どうやら、プライバシーというのは、バウムクーヘンのように層になっているのではないか。一番真ん中が家族・親族のプライバシー。次が向こう三軒両隣のプライバシー。お隣さんには、どうせ知られてしまっているし、まあ仕方がないかという範囲。その次がご近所。ちょっと範囲が曖昧になるが、家から数十軒の範囲。次が友人・知人の間のプライバシー。これはしょっちゅう使われている「俺たちだけしか知らないこと」で「他の人には言わない」という暗黙のルールがある。それからグループ内のプライバシー。今回起きたのがこのレベルのプライバシーの問題だ。

東日本大震災を巡る失言で、今村雅弘氏が復興相を辞任した。この件で、彼の親分の二階幹事長が「政治家が何か話したらマスコミが余すところなく記録を取って、一行でも悪い所があったらすぐ首を取れとはなんちゅうことか」と述べたという（読売新聞）。そして彼はこう付け加えた。「そんな人は初めから排除して（会場に）入れないようにしなきゃダメだ」



人によっては、反省の色も見せない、部下をただかばうだけの二階氏に不可解さを感じた人もいるのではないか。

■「部外秘」の会合にすべきだったかも

彼にも言い分がある（と本人は思っている）。今村氏が語ったのは、グループ内の仲間に対してであって、それ以外の人たちに聞かせる意図はなかった。つまり二階氏の派閥内のプライバシーだった。そこで「ここだけの話」がゾロゾロと出てきた。その内緒話を外部の者たち（マスコミ）が、「聞いちゃった」とばかりに報道してしまった。ルール違反だと二階氏は憤慨しているのだ。

マスコミの言い分もあるだろう。公職にある者は、どの場であろうと、その発言には責任が伴うものだと。そんなバウムクーヘン型のプライバシー論なんか知ったことではない。

そう言われれば、ひとたまりもないが、凡人の私たちは、「ここだけの話」を喋りまくっている。特に家庭内では、お互いにかなりやばい話をしているのではないか。深く考えずに差別的な言葉を使うこともあるだろう。

二階氏の言っていることを、彼の側から読み直してみたら、彼の言うとおりに、「部外秘」の会合にすべきだったかもしれない。部外者は入れない。そこでは派閥内の仲間だけに語っていい、やばい話も出てくるが、誰はばかることなく語れる。「派閥の仲間だけのプライバシー」という主張を、きちんと実行すべきだったかもしれない。例えば首相番記者と本人との懇談会があるそうだが、ルール作りがしっかりできているからか、そこで出てきた首相のやばい発言は絶対に表沙汰にはなっていない。ルールが守られている。

4.取り組み課題が出てくる聴取法

①その地域で「ありうる問題」をこちらからぶつける。
ーその中のいずれかに住民が反応する。

②「ありうる問題」の具体例をいくつか披露する。
ー住民にその問題のイメージが湧きにくい場合に。

③「ありうる問題」への対応策も具体的な実践例で紹介する。
ーこういう対応活動例がありますよ、とか。

④呼び水で住民から活動例が出たら、すかさず反応する。
ー住民の実践を生かした取り組みを提案する。

聴取によって問題と取り組み課題が出てくるために求められるのは、聴取者の徹底した主導性である。聴取者が「ありうる問題」をぶつけてみる。それをなるべく具体的な事例で紹介する。同時にその解決策も具体的な事例で示していく。

そうした聴取者からの圧倒的な攻勢で、住民も反応せざるを得なくなり、思い当たる問題や具体的な事例をしゃべり始める。

解決策も同様に、聴取者が「こんな解決行動がある」という事例を次々とぶつけていくことで、住民も「そういうことなら、こんな活動がある」と言い出す。

そこまでいけば、あとはその住民の活動を最大限に生かした取り組み課題を考えればいい。住民は終始受け身だから、聴取の成否はこちら次第なのだ。

＜第５章＞

住民の関わり合いさがし

マップづくりで、福祉問題や解決方策を抽出するためにとりあえずやることは、住民の関わり合いの実態を線で結ぶ作業である。誰と誰が交流しているか、誰に誰が関わっているかなど。その線引きの中から問題や解決のヒントが見えてくる。

①住民の支え合いを第一義と考えること
－要援護者にはまず住民が関わるべきだと説く

②「あまりない」は「少しはある」ということ
－そのかすかな関わりを徹底的に追及していこう

③引きこもりの人も、２、３人との関わりはあるはず
－どんなに引きこもりでも、誰かには門戸を開けているものだ

④身内と思って真剣に考えてもらう
－相手を他人事と考えていては、大事な情報は引き出せない

⑤線が引けなかったら、再度隣人に聴取
－住民同士の関わり合いはごく近くの人しか見えない

■「見守りネットは既にできている」？

そのご近所に既に見守りネットワークができているケースがある。あるご近所でのマップ作りで、一人暮らし高齢者の一人ひとりについて見守りの状況を聞き始め

たら、ここでは既にネットワークができていると民生委員が言い出した。そして、「ここからここまでは私が見ている」と、〇〇活動員と称する女性が。また「ここからここまでは私が」と、別の活動員も。そして何かあれば、民生委員に伝える。民生委員はそれを関係機関に伝える。だからこの地区では個々の見守りについて検討する必要はないというのである。

このやり方に問題があるとすれば、その活動員でない隣人たちは、足元の人の安否を確認するといったことをやらなくなるという点だ。日本人は特にそういう性向が強い。きちんとしたお役目の人が入れば、部外者の私は入るべきではないと。

もう一つは、要援護者の異変は、その人のすぐ近くにいる人しかわからないということである。要援護者の隣人なら、相手の異常にすぐ気づくはずだ。この利点を無にしてしまったのではないかと気がかりである。

さらにもう一つ、気になることを言うならば、相手の異常に気が付くのは、誰でもできることではなく、やはり独特のセンスが求められるということで、〇〇活動員たちがそのセンスを持っているかどうかも気になる。マップを作るとそういうセンスの持ち主がだれであるが見えてくる。実際に関わりの線を引いていくことで、その人材が見えてくるはずだ。マップ作りはまさにそのためのものなのである。

■どれだけ引けたか－福祉の線

支え合いマップづくりで最も重要なのは、住民のふれあいや助け合いの営みを、線で結んでいくことである。ＡさんとＢさんが日常的に交流しているのであれば、相互交流を意味する往復の線で２人を結ぶ。Ｃさん宅にＤさんとＥさんとＦさんがしょっちゅう集まって井戸端会議を開いているとか、一人暮らしのＧさんに隣のＨさんがよくおすそわけをしている、といった情報も、線を引きながらのせていく。

■たくさん線が引ければいいのか？

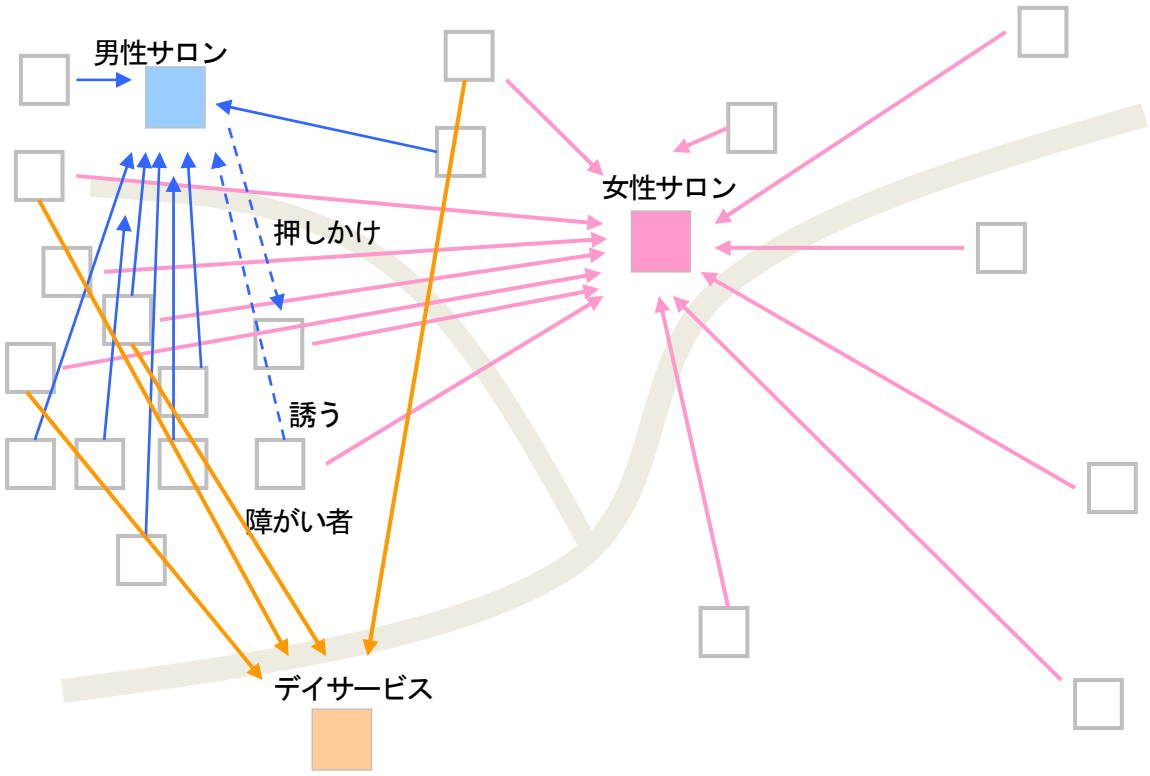
それはいいのだが、実際にそういう関係の線を引いてもらうと、それこそ、むやみやたらに線が引かれていって、マップは線だらけとなる場合もある。ではそれだけたくさんの線が引けたのだから、さぞかし助け合い盛んなご近所なのだろうと想

像するが、どうもそういう感じではない。何かが足りない。

■公民館に向けてたくさんの線が引けても…

初心者が作ったマップを見て、一体どういう線を引いているのかを点検すると、最も多いのが「ふれあいサロン」に参加する、あるいはカラオケの会に参加する、ラジオ体操に参加する、趣味の会に参加するといったものだ。そういう集まりは、大抵はご近所の近くの公民館や公会堂で開かれているから、その公会堂へ向けて、ご近所内の多くの家からそこへ向かって線が引ける。

ではそれらの線が、福祉的に見てどういう意味があるのかと考えてみると、率直に言って、それほど評価すべきものとは言えない。



■では、「意味のある線」とは？

福祉関係者の一般的な傾向として、「ふれあい」というものに高い価値を置いている。だからふれあいサロンや居場所づくり、世代交流のようなふれあいイベントに力を入れていて、それがうまくいくと、福祉がうまくできたという評価がされる。

だがこれが、正確には「ふれあい」がうまくいったのであって、福祉がうまくいったとは必ずしも言えないのである。

先日、宮崎県小林市で住民と一緒に作ったのが、ここで紹介するマップである。ここではどういう「関わり合いの線」が引けただろうか。この中で意味のある線はどれだろうか。

■男女別々にふれあいサロン

マップの中の２つの場に線が集中している。真ん中が女性を中心としたふれあいサロン。左上では、この男性宅の離れに男性が集まっている。カラオケのセットもあるが、中心は飲み会ということらしい。女性と男性が別々に開いているのも面白い。

この中の男性のサロンは、福祉的に言っても意味がある。男性の場合、こういう飲み会の場さえできていないご近所が多いのだから、立派なものである。主催者は、いかにも世話焼きさんという感じである。男性の世話焼きさんは珍しい。

■サロンに参加させてもいい人がいる

ところで、この男性向けのサロンに、もっと来ていい男性はいないのかと調べると、２人いた。

❶要介護の男性宅へ「押しかけサロン」はいかが？

１人は要介護の男性。主催者の男性も含めて、彼をサロンに誘おうという考えは持っていなかった。この人を誘うことはできまいかと聞いたら、「体力的にちょっと無理かな」という。ならば、その家に「押しかけサロン」を開きにいったらどうかと言ったら「それは無理」という言い方はしなかった。大体こういう引っ込み思案の男性も、押しかけられれば受け入れるということがわかっている。相当偏屈と言われる男性も、なぜか押し掛けた人は受け入れる。そんな話をしたら、みんな「いや」とは言わなかった。ここでサロンから彼の家へ向かって線が一本引ける。これが「福祉の線」だ。

❷身障者をサロンへ誘ってみたら？

もう１人は、身体障害者の男性。彼については、「誘えば来るかもしれない」という話が出た。「いや」ではないということらしい。これが第二の「福祉の線」だ。

問題はだれがどのようにして運んであげるかだが、そんなに遠い距離でもないのだから、難しくはないだろう。

❸農業を引退したばかりの人に異変が多い

前述の要介護の男性について、農業を引退してから気力がなくなったという話が出た。「それならこの人もそう」と名前があがった男性は、やはり農業を引退してから異変が見られ、認知症の疑いが出始めているという。「農業を引退した時が危険」という、重要な問題が出てきた。

認知症の疑いが出てきた男性は、両方のサロンに参加している。両方のサロンで見守られているのだから、この２本の線も福祉的な意味があるわけだ。

❹デイ利用者も全員受け入れるサロン

女性のサロンで意味があると思われるのは、このご近所でデイサービスを利用している人はすべてこの女性サロンに受け入れられていた点だ。こういうサロンは、私が全国でマップづくりをしていて、初めて発見した。そういう話をしても、女性たちは別段珍しいことをしているわけではないといった顔をしていた。

このサロンの特徴は、体操、歌、踊り、旅行など、様々なお楽しみをしている点だろう。そこに要支援の人も受け入れているのだから、これ自体、介護予防効果が見込める。立派な福祉である。サロンの日には誰かが相乗りをさせてあげているらしい。送迎もやっていたのだ。

■防災マップの前に支え合いマップ作りが必要な理由

先日、ある町で防災マップ作りを頼まれた。二か所で作ることになり、一つは社会福祉協議会のスタッフが担当した。

すると、社協スタッフの担当した分は、割合簡単にできてしまった。気になる人

と言えば、ご近所ではわずかな人数しかいない。その人に誰が関わったらいいのかは、ご近所の人たちはすぐにわかってしまう。

■避難誘導すべき人は老人クラブやサロンから排除されていた

然し私の方は、方針を変更して、防災と支え合いの二つのマップを同時に作ってみることにした。重点は支え合いマップの方だ。そこで驚くべきことがわかってきた。私も、今まで迂闊にも、このことに気づいていなかった。

他の地区で作ってみても同じだが、この地区でも老人クラブやサロンといった住民グループに要援護者を仲間入りさせていない。デイサービスを利用している人も同じ。一人暮らし高齢者もそういうグループにはほとんど加入していない。つまり、災害時に避難誘導が必要な人は、普段、地域グループの仲間に入っていない。

■「誰かれ構わず駆けつける」ご近所にするには…

そのことに全く気付かないままに、防災マップでは、近くの誰が避難誘導するかを、機械的に決めていく。しかし、いざ災害が起きた時に、その人が在宅であるかどうかの保証はない。となると、その時、その場にいた人が駆けつけなければならない。つまり、災害時には結局、「誰かれ構わず」駆けつける必要があるのだ。その時に問われるのは、普段その要援護者は周りの人たちと日常的に交流しているかどうか、である。

もし地域のさまざまなグループが要援護者を仲間に入れていれば、その人の周りの、複数の人が「グループの仲間」として駆けつけることができる。老人クラブやサロン、趣味グループなどに所属していれば、ご近所のグループ仲間の誰かが駆けつけることができる。しかし今は、そういう関係ができていないから、専ら、決められた人のみが駆けつけることになり、あまり当てにならない避難誘導体制になってしまうのだ。

■「誰かれ構わず駆けつける」範囲とは？

ところで「誰かれ構わずに駆けつける」範囲とは、どれぐらいなのか。当事者を中心にして、そこから何軒程度なのか。ある地区で、その地区を熟知している町内

会長と一緒にその範囲を探ってみたら、大体数軒の範囲とわかった。極めて小さな範囲なのだ。民生委員に、「自宅の周りの何軒ぐらいまでが『良く見えて』いるか？」と聞いたら、みんな５本の指を広げた。５軒程度しかわからないということだ。

■効果的な防災をしたければ、まず要援護者を地域の仲間に

もし地域のさまざまなグループが要援護者を仲間に入れていたら、当人の周辺に、数名は必ず「グループ仲間」がいることになり、その人たちがいざという時に「誰かれ構わず駆けつける」人材候補になる。こんなに心強いことはないだろう。

だから本当に効果的な防災活動をしたいのなら、避難誘導すべき要援護者を普段、地域グループに仲間入りさせるのが先決だということになるのだ。

＜第６章＞

問題さがし

1.問題さがしの基本的な心構え

聴取を終えて、「問題は見つからなかった」ではいけない。何としても何らかの問題は見つけるのだという強い姿勢が必要だ。

①「問題」さがしのために、聴取をリードする
ー聴取は始めから終わりまで「問題さがし」に徹底を

②問題を予測して質問をぶつける
ー「地域ではこんな問題があるはずだ」ー引き出しを持っていること

③本人は何が問題だと思っているのか
ー本人の困り事は何か。どうしたいのか、願いは何か

④福祉の理想を始終意識する
ー福祉のめざすものを見失ったら、聴くことがなくなる

⑤ご近所の本質的な問題は？
ー個々の要援護者のことだけでなく、地域としての問題も

■聴取は「あら探し」なのだ

聴取の役割は、そのご近所が抱えている問題を探し出すことである。としたら、この役割をきちんと果たすためには、なんとしても、どんな方法を取ってでも、問

題を浮き彫りにしなければならない。一見、問題がなさそうに見えても、それでもあきらめずに問題を探そうとする。これがマップ作りの基本的な心構えなのだ。

福祉問題が何もないご近所など、あり得ない。そして福祉問題というのは、表層からは見えにくい。だからそのご近所に潜んでいる問題を浮き上がらせるためには、最初から最後の一秒まで、「ちょっと気になること」も見逃さずに、様々な角度から質問を繰り出す。聴取はある意味、「あら探し」だと言ってもいい。

■「この地区には問題がない」、と思いたい？

マップ作りに際して私は、その目的は取り組み課題を見つけることだと、必ず言うことにしている。ところが、マップ作りが終わって、改めて振り返ってみたら、住民は「この地区には問題がない」のだと思いたいし、だから問題があっても、それを胸の中にしまってしまうということに気が付いた。

つまり問題を探そうという気がもともとないのだ。参加者は、この地区はいい所だということを再確認したいのである。だから、今日はマップ作りで特別、気にかかる問題は出て来なかったとなれば、満足する。それに負けてしまっては、問題は何も出てこない。

■マップ作りの場で福祉を考えることに気乗り薄？

変な話だが、マップ作りの場は必ずしも福祉を考える場にはなっていないということに気付いた。参加者は、「今日は福祉を語る場だ」とは強く言われていないので、そんな意識はないままにマップに向かう。住民が集まる場合、これが常である。だから福祉の問題が出てきそうな場合も、住民の側はなるべくその話を避けようとするのが普通だ。

サロンの話では、ただ誰が参加しているといったことは口にするのだが、要援護者をサロンに誘おう、一人暮らし老人も誘おうといったことは、あまり話に出てこない。こちらは話をそちらに誘導しようとするが、いまいち関心がそちらに向かわない。一人暮らしの人や老々世帯がサロンに来ていないか、確かめても、参加者は

あまり関心がない。

「ただのサロンは公民館で言えば生涯学習、文化活動です。そのサロンに要援護者を仲間入りさせると福祉活動になるのです」と私は言うことにしている。ただの文化活動でなく、またはただのふれあい活動でなく、それが福祉の営みになるには、どういう要件が具備されなければならないのか、どういう活動を加えたらいいのかについて、予め住民にレクチャーしておいた方がいいのかもしれない。

「デイサービス利用者もサロンへ」という考え方を理解してもらうには、もう少し突っ込んだ説明が必要だ。一般的な住民の認識では、そんなことは非常識だとなっているはずだ。もう弱ったのだから、デイを利用すればいいというのが住民の常識なのだ。「いや、要介護になってもサロンに参加できるようにすべきなのだ」ということ、これをどうやって住民に納得させたらいいのか、意外に難しい課題である。

やはりマップ作りをする前に（できれば直前に）、助け合いの大切さやそのやり方、福祉の基本精神などについて、一定の理解をしてもらうための教育活動が必要だ。

■「ここは何も問題がない」？

ある市の社会福祉協議会から支え合いマップづくりを頼まれたが、どうしてこの地区のマップを作る必要があるのか、気になっていた。一度社協でマップを作ったが、特別問題が見つからなかったようだ。

マップづくりには約５０世帯のご近所の世話焼きさんたちが数名参加してくれた。その中に飛び切り優秀な人も混じっていた。その人が中心になって、「気になる人」を探し、誰が関わっているかといったことを聴取し始めた。

そこで見えてきたのは、たしかに問題がない地区だということだ。一人暮らしもいることはいるが、それも数名で、しかも５０代の人ばかりで、「この人たちはまだ元気で働いているよ」というから「気になる人」の中には入らない。老々世帯は若干多いが、その中には例えば老々介護といったケースはほとんどない。世話焼きさんは言った。「ここは問題がないんですよ」。

■デイ利用者と施設入所者が合計１６人も

しかし、それにしても「気になる人」がいなさすぎる。別にたくさんいる必要はないのだが、なんとなく異様ではある。

そこで、介護保険サービスを受けている人はどれぐらいいるのか、聞いてみることにした。

まずはデイサービス利用者。ご覧の通り、６名いる。次いで老人ホームに入所した人。マップの外に「入所」と書いたところへ向かって線を引き始めたら、次々と出てきて、結局１０名もいた。わずか５０世帯のこのご近所の中の、１６名がデイサービスを利用したり、施設に入所していた。

何のことはない、「気になる人」はすべてこれらの施設へ行ってしまっていたのだ。残された人に「気になる人」はほとんどいないのも当たり前であった。

地元の人たちは、この１６名は自分たちの関わりの対象から外れた人だと考えていた。「このご近所は何も問題がないんですよ」と言ったのは、そういう意味だったのだ。

■１６名でサロン参加者はたったの１人

本当にそうなのか。では「問題の人」がいないこの地区で、世話焼きさんたち活動家は何をしているのか。今流行のふれあいサロンを開いていた。参加者はマップにある通りで、かなりの人が参加しているから、「盛況」と言ってもいい。

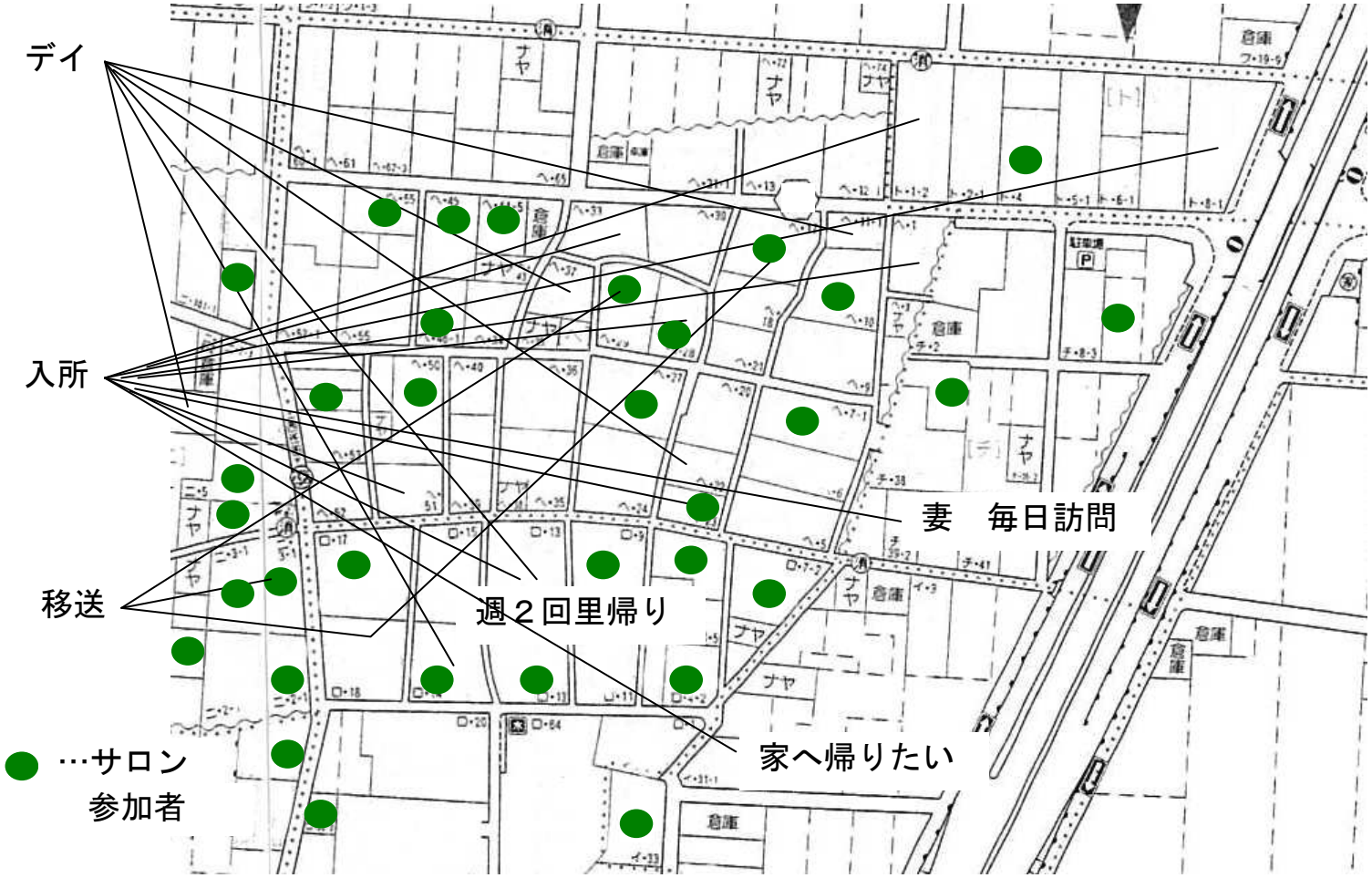
ここからクロス集計を試みてみた。サロン参加者と、施設入所者やデイサービス利用者が重なっているケースは何人か。２人いたが、その中の１人は、サロンに参加しているのは実は子どもで、親は入所していて、サロンに参加しているわけではなかった。つまり、結局サロンに参加していたのはたったの１人。この人は要支援だが、かなり積極的にふれあいを求めていく人で、その元気でサロンにも来ていた。

デイ利用者をサロンの仲間に加えること、これがサロンを開いている人たちの大事な「活動」ではないのか？

もっと言えば、施設に入所していても、サロンに里帰りさせることだってできる。それもまた課題になる。

■週２回里帰りしている人も

施設入所者１０人の中で里帰りをしている人を探したら、１人いた。それも、週に２回里帰りをさせているというから、ずいぶん熱心な家族である。


デイ
入所
移送
…サロン
参加者
妻　毎日訪問
週２回里帰り
家へ帰りたい

ではこの人が里帰りした時、地元の人が受け皿になってくれているかと言えば、そうではなかった。せめて里帰りした時に皆で訪問してあげればいいのだが。

聞くところによると、施設はここからそう遠くない。一番遠い施設でも３キロ程度というから、施設を訪問することも、また里帰りをすることもそう難しくない。要するにこの人たちは自宅の「離れ」に住んでいると考えればいいのだ。だから週に２回も里帰りをさせる家族もあるわけだ。

こういう場合に、誰かが送迎サービスをしてあげればいい。ちなみに送迎サービスをする用意のある人はいないかとマップ上で探したら、３人見つかった。既に（施設入所者にではないが）実践している人もいる。もっと志望者を募れば出てくるのではないか。

そんな話をしていたら、「この人は家に帰りたがっている」という人も見つかった。何とかしてあげなければ…。逆に、入所した夫を、毎日訪問しているという女性もいた。

■１６名は全部老人クラブの会員だった。ならば…

世話焼きさんに聞くと、ここは老人クラブの活動が盛んであるらしい。ほとんどの人が入会している。つまり高齢になれば加入することになっているということだ。では、施設に入所した人はどうかと聞くと、やはり、形だけだが入会しているという。ならばクラブの例会やイベントにも参加させるべきである。送迎班を編成して、送迎をする。介助人も同時に組織化する。介護経験者がメンバーの中に、少なくとも７，８名はいるはずだ。

■「住み慣れた家や地域でその人らしく」は無理なのか？

私は他のマップづくりの場でも、同じようなことをしている。デイサービスの利用者と施設入所者を特定する線を引くと、デイ利用者と施設入所者がそれぞれ５本程度引ける。この地区は、デイは平均値としても、施設入所者が異常に多い。

その上で、この人たちにどんな関わりをしているかと問うと、参加者は「？」と首をかしげる。「この人たちはもう施設に行ったり、利用したりしていて、地域にはいない人です」と言うのだ。

しかし「いない」とはどういうことか。彼らも施設で生きている。デイ利用者は夕方には帰宅するし、週のうち大部分は地域にいるのだ。

だから、物理的にいないというよりは、彼らの意識の中で既に不在になってしまっているということなのだ。そこで私は厚労省の言っていることを参加者に伝える。国がめざしていることは、「どんなに重い要介護になっても、住み慣れた家や地域でその人らしく生きていけるように支援すること」なのだと。少なくとも本人はまだ地域で生きている気持でいる。段々とあきらめていくのだろうが。

■地域ではますます「棲み分け」が進行

そこで、ここで述べたように、まだ地域と繋がっていたいという本人の願いに沿って、対応していかねばならないということだ。

課題は既に述べた通りで、①施設訪問、②里帰りの受け入れ、③サロン等への受け入れ、④老人クラブの活動への参加受け入れ、⑤そのための移送サービスや、⑥介助人の配置、⑦できることなら自宅復帰。

しかし現実はますます暗くなっている。介護保険制度が始まって以来、地域での「棲み分け」が進行する一方である。要介護になったら介護保険制度を利用すればいい。そして施設に入所したり、サービスを利用すればいい。この流れを押しとどめようとする勢力が不在なのが最も気になるところだ。

2.「気になる人」さがし

「気になる人」とは、福祉課題を抱えた人のこと。ではその人はどういう課題を抱えているのか。以下の４項目を確認する。

①安全は守られているか？

－見守りはきちんとなされているか。危機対応は十分か。
日々見守る体制はできているか。何かあった時の連絡体制は？

②困り事はないか？

－本人の困り事を突き止めているか。
本人が意識しない、隠れた困り事もある。

③介護や介助はきちんと行われているか？

－プロの関与は十分か。住民による介護サポートは？
家族の支援までなされているか。

④「その人らしく」生きているか？

－本人がこだわっているものに関わっているか。
豊かさダイヤグラムは満開か？

■気になる人とは、迷惑な人だった！

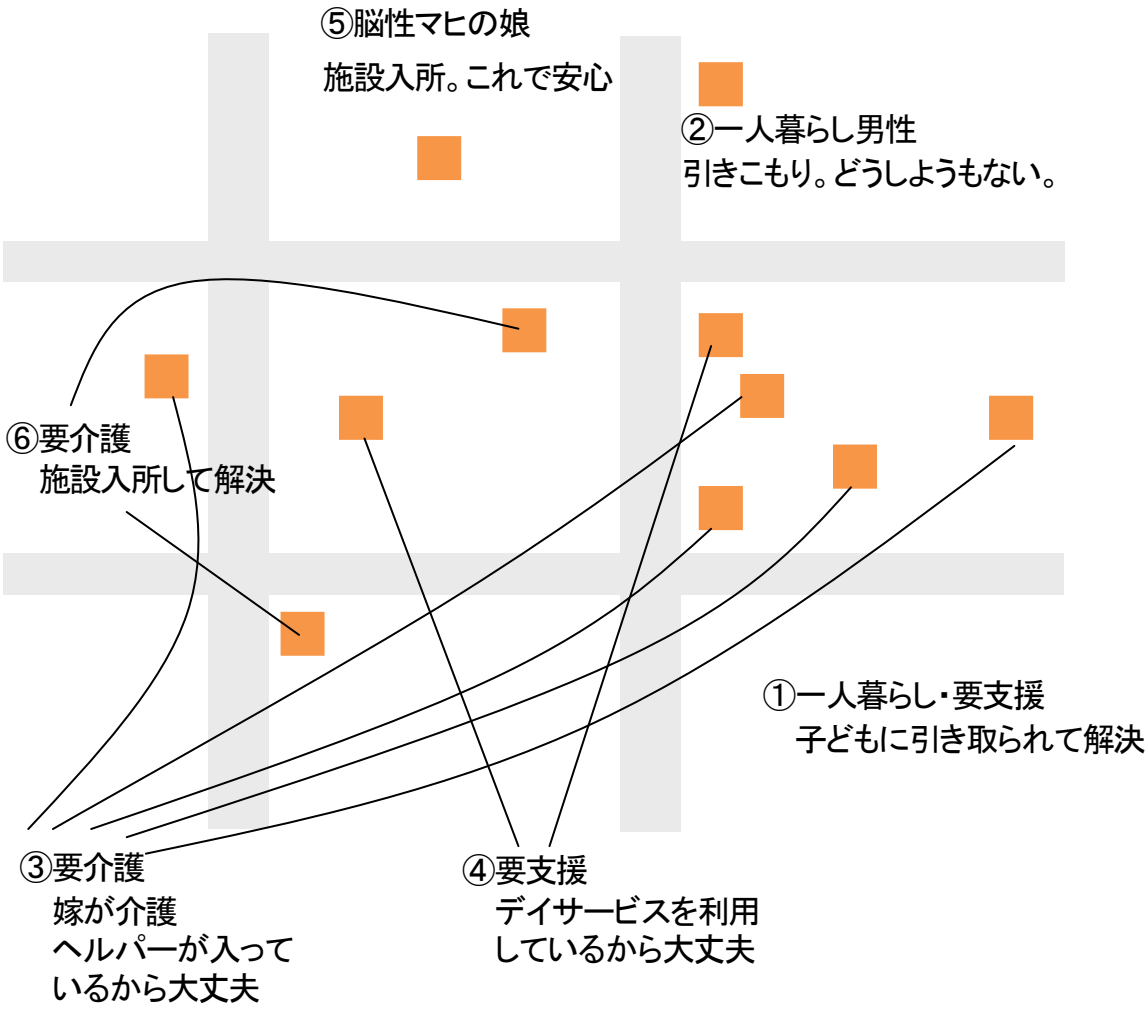
住民にとって「気になる人」とは誰のことだと思われるか。意外なことがわかった。私たち関係者にとって「気になる人」とは、一人暮らし高齢者とか要介護者、要するに援護を必要としている人のことだろう。

ところが住民はそうは考えていなかった。多くの人にとって「気になる人」とは、彼らから見て迷惑な存在だったのだ。暴言を吐く、ラジオを大音響で流す、ゴミ屋敷や猫屋敷。「今のところ私たちに迷惑をかける人はいません」と民生委員が締めくくった時、私は唖然としたものである。

■「気になる人」はいない？

下のマップは、ある社会福祉協議会のスタッフが作ったもので、「マップを作ってみたが、特に気になる人は見つからなかった」と言っていたが、このマップにあるような考え方でマップを作っていては、何度マップを作っても、気になる人は出てこないのではないか。

①から⑥までの各項目について、本当に気にならないのか、皆さんも考えてみていただきたい。



■卒業させない

■超高齢になれば地域活動は卒業？

先日、福岡県の福津市で、社会福祉協議会のスタッフと一緒に支え合いマップづくりをしていて、おもしろいことに気づいた。３カ所のマップをスタッフが手分けして同時に作ったのだが、取り組み課題を整理していて、地域には一つの大きな問題があることがわかった。

今は超高齢社会と、よく言われる。老々介護の時代だとも。超高齢になれば足腰が弱くなる。耳も遠くなる。妻や夫を介護しなければならなくなる。デイサービスを利用するようになる。老人ホームに入所する人も。そうなると、今まで参加していたサロンや老人クラブなどは卒業だ。畑で野菜を作って、できたものをおすそ分けするといった活動もおしまい。

それが当たり前だと私たちは見てしまう。「卒業」を容認してしまえば、課題というものがなくなる。

■重い要介護でも地域で自分らしく生きられる

では福祉とはもともと何だったのか。厚労省は言っている。どんなに重い要介護でも、住み慣れた家や地域でその人らしく生きられるように応援しようと。ならば、そういう人たちを簡単に卒業させてしまったら、福祉は成り立たなくなる。なんとしても卒業させないのが福祉だったのだ。

などと言うと、マップづくりに参加した人たちから、「そんな無茶な」といった戸惑いが生まれる。そういう状態になったらそろそろ卒業させてもいいではないかと。だからマップづくりを主導する者は、しっかり踏ん張らなければならない。「人間は最後の最後まで人間らしく生き切ることが大切なのであって、それを応援するのが本当の福祉なのですよ」と。

＜福津市でのマップ作りで出てきた「卒業」させない問題＞

本人の事情	卒業の対象	卒業させない策
超高齢で耳が遠くなった。「通訳」がいたが、要介護になった	結果として、サロンへの足が遠のいた	新しい「通訳」を掘り起こそう
１０９歳になった	老人クラブから「卒業」した	メンバーが本人宅を訪れて「押しかけクラブ」
膝の手術を控えている	女性サロンから引退。	メンバーが本人宅を訪れて「押しかけサロン」
同上	畑で野菜づくりができなくなった	皆で畑に連れ出そう
デイサービスを利用し始めた	日程が重なり老人クラブに参加できなくなった	ケアマネと日程調整で参加可能にしよう
元大学教授。元自治会長で、デイサービスを利用し始めた	地域活動から完全に引退	他にも文化人が多数いるので、教養講座の講師になってもらおう
９０代の男性。認知症の妻の介護に専念	サロンや老人クラブなど地域活動から引退	要介護の妻同伴の参加も勧めよう
老人ホームに入所	地域から完全に撤退	里帰りで自治会活動の参加を応援しよう。組費をまだ徴収していた
高齢で足腰が立たなくなった	カラオケサークルに行けなくなった	仲間が車で運んであげよう
長年引きこもっている		密かに犬の散歩をしていた。ならば犬を通したふれあいを広げよう

■住民に納得させる材料を見つける必要が

ただこうした主張をぶつけるのでなく、「なるほど、そういうことなら、やる価値はあるかも」と住民に納得させる材料を見つける必要がある。そのヒントはたし

かにあるのだ。

①耳が遠い人には通訳がついていた！

例えば、耳が遠くなったために、サロン等から足が遠のいたというケースはよくある。こうした悩みは他の人にはなかなか理解しにくい。だから放っておくうちに、いつの間にか来なくなる。それでも参加しているケースというのは、周辺に、この人の通訳をする仲間がいる場合である。

今回の場合も、やはりいた。ただしその通訳の人が要介護になってサロンに来なくなり、自然、耳が遠い本人も足が遠のいた。だから対策は、新しい通訳を見つけようということになる。そんなに難しいことではない。

②入所者からも組費を徴収していた

施設に入所した人を、自治会活動などにまた参加させようというのは、今の地域の事情からしたら考えられないことかもしれない。ところがこの地域の興味深い慣習が浮かび上がってきた。施設に入所した人からも組費を徴収していたのだ。

つまり「あなたはまだ自治会会員なのですよ」と本人に自覚させようとしているのだ。ならば当然、自治会のイベントには移送サービスをしてでも参加できるようにしなければならない。

③本人が来られないなら押しかければいい

超高齢になれば地域活動から離れるようになるのは当然だろうが、しかし方法はある。サロンには来られなくなったが、仲間が訪問して「押しかけサロン」をすれば、ちゃんと受け入れている。訪問型に切り替えればいいことなのだ。老人クラブも同様の対応ができるはずだ。

④体を使う活動はできなくても、体験を生かせばいい

長い間自治会長などで地域に貢献した人も、超高齢になればそれも難しくなる。しかしこれまでの実績を何かで生かせないものか。そういう人物で、しかも元大学教授だという人がいた。これだけの実績と能力を生かさない手はない。調べてみたら、そのご近所内にたくさんの人材がいることがわかった。ならばこの際、彼らに講師としてその知識と技術を生かしてもらえばいい。それなら超高齢でも、要介護でも可能だ。

⑤足腰が立たなくなったら車で移送すればいい

最も多いのが「足腰が立たなくなったから」であるが、ならば誰かが移送サービ

スをすればいい。本誌で北海道夕張市の移送サービスについて述べたことがある。公的な鉄道も民間輸送もほとんどが走らなくなった。住民は家に閉じ込められることになる。そんなときに住民は、まさに住民総出で移送サービスを始めた。誰もかれもが、移送の必要な人を運んでいる。つまり夕張市全体が要介護になったと思えばいい。その対策は、住民総「移送ボランティア」になることだった。

超高齢者が地域にたくさんいるようになれば、移送サービスはだれもがやるべきことになっていく。それが超高齢社会の地域のあり方なのだ。たった数名の超高齢者の移送ができないというのでは、福祉社会とはとても言えない。

表にある対象者の多くが「移送サービス」の必要な人ばかりではないか。これに対応する体制を作るのが、基本中の基本というべきである。

3.問題が出てきやすい「気になる対象」

一般的によく問題が出てくる、気になる対象を頭に入れておいて、住民に確認していけば、ご近所の問題に早く気づくことができる。こういう人でこういう状況にある人、地域のこういう問題に特に注意してみたらどうかという事例を表にした。

⑴	**一人暮らし高齢者**	① 男性（５０～６０代から） ② 超高齢男性 ③ 要介護（認知症） ④ 引きこもり ⑤ 女性	孤立死の恐れ。食事は？ まだ運転をしているのか？ 生活の全般に関与 どこかに接点はないか？ 移動手段の確保は？
⑵	**高齢者のみの世帯**	① 老々介護（夫が介護） ② 今は元気だが… ③ 夫の引きこもり	虐待。妻を隠していないか？ 今のうちに夫婦で地域デビューを 妻がグループへ連れ出そう
⑶	**老親と息子**	① 息子が老親を介護 ② 息子が親の年金で生活 ③ 親が昼間一人暮らし	虐待、ネグレクトの心配 親亡き後の生活・息子の自立 昼間の見守りは？
⑷	**要介護**	① 家族が介護 ② 施設入所 ③ デイサービス ④ 認知症の人	家族のストレス。介護者の連帯は？ 里帰りは？　地域活動へ参加は？ サロンや趣味活動への仲間入りは？ 隠さずに支援を求めているか。サロンに受け入れられているか？
⑸	**「迷惑な人」** （と見られている人）	① ゴミ屋敷 ② 猫屋敷 ③ 騒音	本人が見込んだ人を探せ
⑹	**障害児者**	① 老親と障害者（親亡き後） ② 障害児 ③ 精神障害者	子どもの自立 潜在能力の開発 治療。ふれあい。仕事。趣味。

4.こう考えたら「問題」は見えてこない

テーマごとに、一般的にはその事態をどう見るかを並べてある。この見方だと取り組み課題は出てこない。

	対象者	一般的な見方	問題が出てこない理由
①	一人暮らし高齢者	まだ元気で、特別に問題はない	安全の確保だけを目指すのなら、問題は出てこない。「もっと豊かな生活」を目指せば、課題はいくらでもある
②	引きこもりの人	だれとも交流したがらないし受入れないので、手の打ちようがない	問題はあるが、関わる手立てが見つからないという事例。本人は何か（趣味など）にこだわっていないか
③	一人暮らしの女性が息子に引き取られて行った	これで一安心	本人は行きたくなかったのではないか。孤立していないか。当事者の側から見ることができるかがカギ
④	在宅の要介護者	家族が介護しているし、ヘルパーも来ているので問題はない	家族介護に任せきりでいいのか。介護者の人生はどうなる？　それに要介護者も豊かな生活を求めている。
⑤	知的障害者	元気だし家族が面倒見ているから大丈夫。作業所に通っているから、ふれあいも問題ない。	親が見ているから今はよくても、親亡き後はどうするのか。 本人の能力開発もしなければ。
⑥	デイサービス利用者	特別に問題はない。	デイを利用すると地域のふれあいの輪からはずされる恐れも。そのため、ますますデイ頼りになる。
⑦	老人ホームに入所	これで家族も重荷から解放。	要介護でも住み慣れた家や地域で自分らしく生きたいという願いを叶えるのが本当の福祉だ。里帰りはしているか
⑧	高齢者のみの世帯	今のところ二人とも元気で、特別に問題はない。	いずれ老々介護になり、地域に支援を求めなければならなくなる。今から地域との交流をしておかねば。

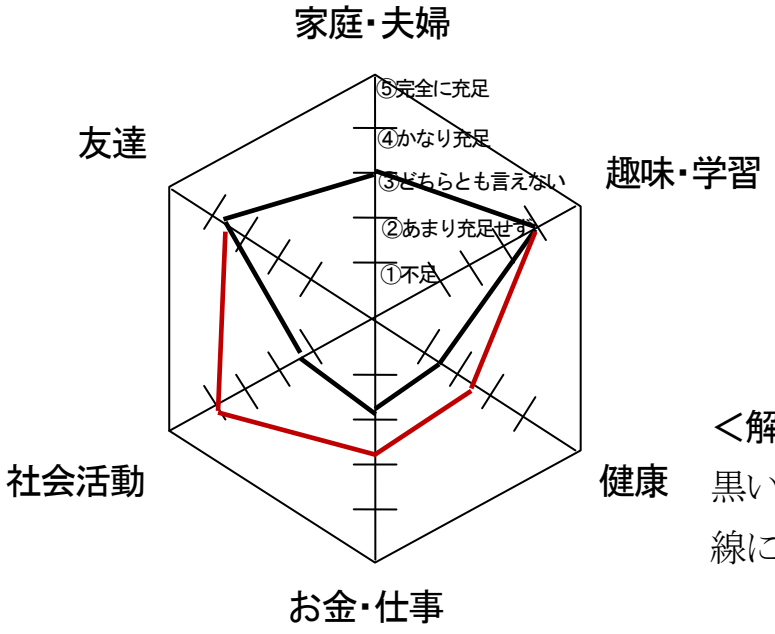
5.ダイヤグラムでその人らしさを測定

気になる人や事に関して、安全が守られているか、困り事はないかというだけでなく、「その人らしい生活」ができているかも点検する必要がある。それがどの程度できているかを測る物差しとして本研究所では豊かさダイヤグラムを開発した。

＜豊かさダイヤグラムの測り方＞

❶自分らしくの充足度を測る「豊かさダイヤグラム」とは？

項目はここにあるように６つ。①仕事・収入、②健康、③趣味・学習、④家族・夫婦、⑤友達・ふれあい、⑥社会活動。ボランティア。



＜解説＞認知症の女性。黒い線だったのを、赤い線に改善

❷項目別に充足度を５段階で評価し、６つの点を結べば豊かさ満開度が

認知症の８０代の一人暮らしの女性。「趣味」は畑で野菜作り。収穫した野菜でおしんこを作っている。畑で隣り合った仲間（３人）とおしゃべり（「友達」）。妹がすぐ近くに住んでいて毎日様子を見に来る。娘も時々やって来る。

＜ダイヤグラムで豊かさ満開にする法＞

❶どうすれば充足度がアップするか。作戦を考える。

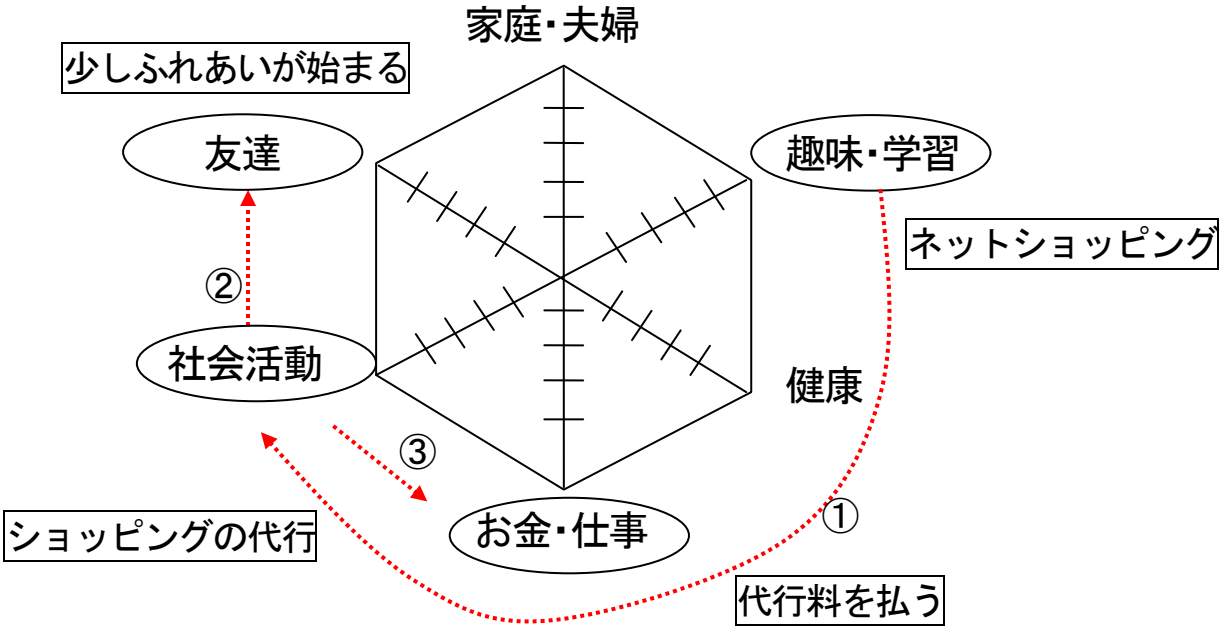
この女性の場合、収穫した野菜で仲間と料理作り。それなら火も使える。作った

おしんこを配れば「社会活動」。おしんこを市場で売ればお金にもなる。活動が活発になれば「健康」も改善。「趣味」も充実。

❷効率的な豊かさ満開策を考える。

この６つを個別に追究するのは大変だ。それよりも、基点になる項目を選び、それを生かして、ついでに他の項目も充足させてしまう方がいい。

次のダイヤグラム。会社でセクハラに遭って家に引きこもる女性。彼女は何かやっていないかと隣人に聞いたら、何もやっていないと言う。そこで、会社勤めをしていた時、パソコンを使っていたのではないかと聞いたら、その通りだと。では、そのパソコンで今も何かやっていないかとさらに聞いたら、ネットショッピングはしているという。ならばそれに取り付こう。押しかけていって、たとえば高齢世帯などの買い物を代行してもらおう。お礼にいくらか払う。そうこうしているうちに交流ができてくるのではないか。



❸①→②→③の流れが要援護者の場合によく使えるパターン。

要援護者は、人に助けてもらう一方になりがち。「社会活動」が不充足になりやすい。そこで本人の趣味を生かして、人の役に立てるように仕掛ければ、「ふれあい」が生まれ、場合によっては「収入」が見込める。

6.地域の「気になること」

人間のよりよい生活を妨げているものが、地域にはたくさんある。それが要援護者には増幅されて迫ってくる場合も少なくない。店や医療機関がないと、一般住民も不便だが、一人暮らしの高齢者や要介護者になると、その不便さはもっと深刻だ。

地域では、人だけの問題はむしろ少なくて、大抵は以下のような事柄と複雑に絡まり合っているとみていい。そのご近所ではこれらのどれが生活障害になっているか、それが人々や要援護者にどのように影響しているか。これが地域課題になる。

住民
要援護者

- ①家族　老親と独身息子の世帯が多く、将来介護の心配が
- ②集落作り　子供がほとんどいなくて、集落自体消滅の危機
- ③グループ　地域グループが要援護者を排除している
- ④ふれあい　個々のふれあいはあるが集落としての連帯が希薄
- ⑤自治　自治会の脱退者が多く、両者が反目している
- ⑥交通　歩道がない箇所で交通事故が頻発
- ⑦商工業　シャッター通りが増える一方。買い物に不便
- ⑧教育　集落に小学校がなく、遠くまでバスで通学
- ⑨文化芸術　公民館が集落外にあり、要援護者は通えない
- ⑩防災　土地が低く、津波が来たら逃げられない
- ⑪宗教　特定宗教の信者と住民とが溶け合わない
- ⑫ライフスタイル　親戚関係の絆や縛りが強すぎる
- ⑬保健福祉　医療機関が遠くて、みんなタクシーで通っている
- ⑭公共機関　役所が近くになく、住民は不便に思っている
- ⑮風土　坂が多くて、高齢者は公会堂にも行きづらい

7.認知症で一人暮らし一気になりますか？

ある地区でマップ作りをしたら出てきたケース。夫が９２歳。妻はずっと前に施設に入所していたが、この夫も関係者は施設に入所させてしまった。しかも、妻とは異なる施設にだ。夫自身はどう考えていたかと聞いたら、「自分はまだ、地域で自立した生活ができる」と言い張ったが、半ば無理やり入所させてしまったという。その後どうしているかと聞くと、案の定、時々里帰りして、隣人とそば作りをしたりしているのだと。では、妻はどうしているかと聞くと、「家に帰りたい」と泣いているという。

■周りから見たら「危ない」、本人は「大丈夫」。どちらを取るか

入所させた民生委員等の関係者に言わせると、本人は大丈夫だと言っても、客観的に見れば、とても自立生活は無理だと。私はこういう姿勢を「担い手主導」と言っている。担い手が勝手に要援護者の状態を判断し、「措置」してしまった。民生委員等は、ごく当たり前の措置だと、疑問にさえ感じていない。実際には本人は時々里帰りして、知人とそば作りに興じたりしている。「自立した生活者」の片鱗がうかがえるではないか。

こうなると、福祉というのは何なのだろうと思う。その前に、自立生活とはなんだろう。自立生活は無理、という表現にうかがえるのは、誰にも心配をかけずに、独り立ちできる人とも受け取れる。それでは、要介護の人が一人で生きること自体、それだけで無茶ということになる。こういう人が地域で生きていけば、当然、周りの人たちに心配をかけるし、いろいろ生活上の支援をしてもらわねばならない。それは「福祉」というものが存在しない社会のことを言っている。私たちがめざしている福祉社会とは、そういう一人立ちできない要援護者も、周囲の見守りや生活の援助をしてもらいながら、生きていける社会なのだ。そんな支援が期待できない状況では、地域生活をさせるわけにはいかないというのは本末転倒で、それでかろうじてでも自立生活ができるようにするのが、民生委員を含めた関係者の役割なのだ。

■危ないのを覚悟で地域で生き抜く、危ないのを承知で支える

自立生活というのは、どんなに不安定でも、その人なりに、自分の意思と力で、

地域で独立した生活をしていこうと努力することなのかもしれない。だから、周りから見たら危なっかしくて仕方がない、それでもできる限り独力で生きていこうと頑張る。

自立生活をこう表現したらいいかもしれない―「危なっかしい生活」と。危なっかしいからすぐに施設に入所させてしまおうと考えるのでなく、危なくすると生命の危険にさらされるかもしれないが、それも覚悟で地域で生き抜くという意志を持った者を、支援が失敗する可能性があるかもしれないが、それでも支援しようとする、そういう世界なのだ。

そういう意味では、今の福祉は「危なっかしい生活」の支援から、ますます遠ざかって行っているように見える。何しろ福祉界が揃って推進しているのが「見守り」である。安全が確保されればいいという世界なのだ。危ない人を摘発して、より安全な場所に避難させる―デイサービスとか老人ホームとかに。

■「自分らしい生活」をするためにこその自立生活

危ないことを承知の上で自立生活をすることに、何の得があるのか。厚労省は言っている。福祉の目的は、どんなに重い要介護でも、住み慣れた家や地域で、自分らしく生きていくのを支援すること。これなのだ。超高級な老人ホームに入所した女性が、ケアマネに、もう一度自宅に帰りたいと言ってきた。その理由はこうだ。「施設は私が自分らしく生きているのに向いていない」。こういう凄いことを言う人も出てきた。やはり豊かな社会になったのだろう。

自宅に居て、自分の生きたいように生きることができる。朝起きて、戸を開け、掃除をし、ご飯の支度をし、趣味に興じ、友と語り合い、時には旅行に行く。すべては自分自身の意思で、である。誰かの指示ではない。こういう生活がいかに素晴らしいものかが分かってくるのだ。

そして、危なっかしい部分は、周りの人たちの助けを得る。そのためにこそ助け合いの地域を作らねばならないのだ。危なっかしい人をことごとく施設に入れてしまっては、助け合いの地域は育ちようがない。

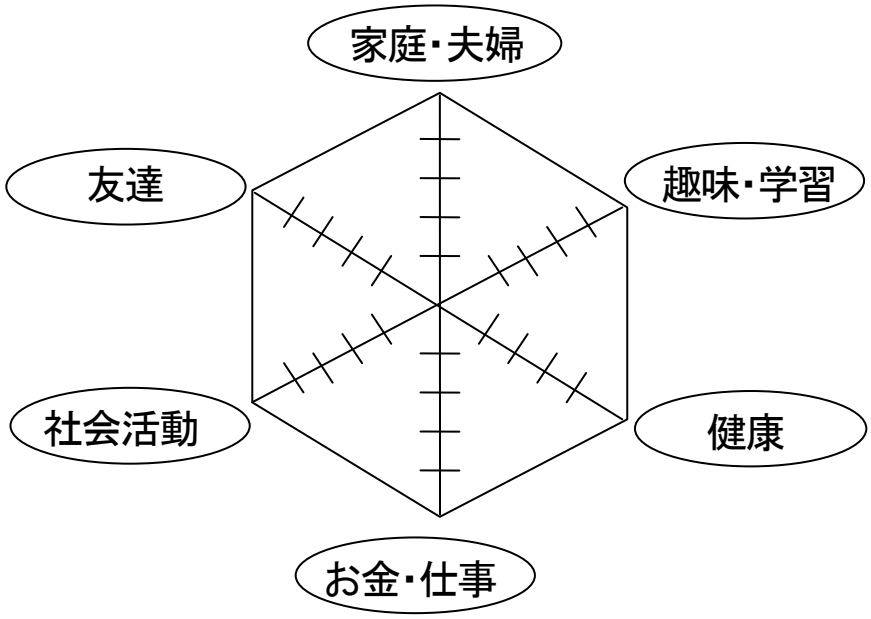
8.究極の目標ー「ご近所で共に豊かに」

⑴誰もが豊かに生きられる「ご近所」

東京都から、ある調査結果の分析を頼まれたことがある。1,000 人の高齢者へのアンケート調査だったが、私の担当は、自由回答の分析だった。たくさんの意見、要望を並べてみて、そこから敢えて何らかの結論を導き出そうとした時、見えてきたものは何か。

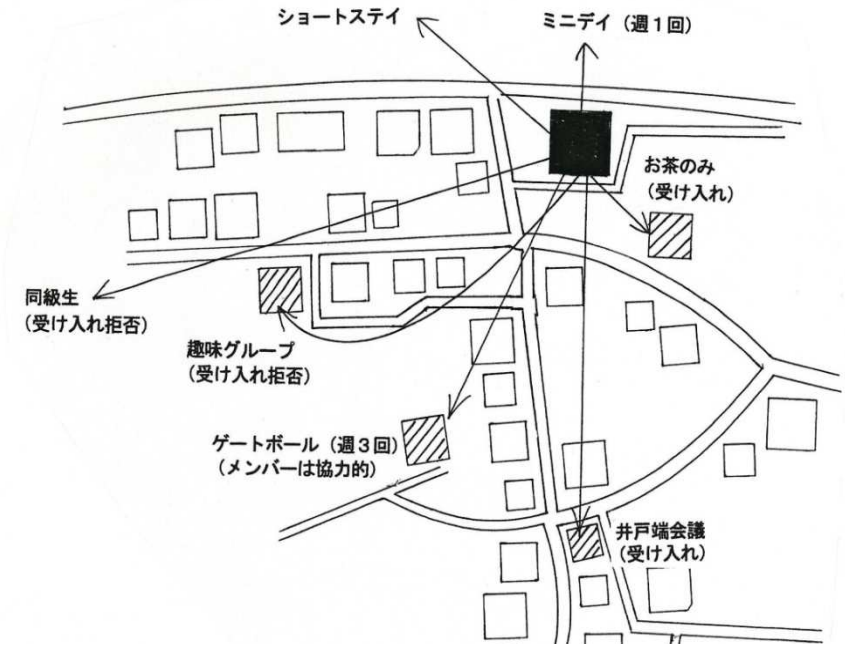
前述の通り、私共は「豊かさダイヤグラム」というものを開発し、活用している。人間が豊かに生きるための６つの要件―仕事、健康、趣味、家族、ふれあい、社会活動―をダイヤグラムにしたものだ。高齢者たちが共通して願っていたのは、これら６つの要素を豊かにする活動が、足元のご近所でできるようにしてほしいというものであった。歩いて数分で働く場があり、趣味活動ができ、健康づくりもでき、ふれあいもボランティアもできる。

今はこれらの一つ一つを充足させるために、市の中心部などへ、車やバスに乗って行かねばならない。それを、自宅の近くでできるようにしてほしいというのだ。



⑵要介護者も自宅に居て豊かになれる

こういう事態が実現すれば、どういう「いいこと」が始まるだろうか。要介護者も、障害者も、足元で豊かになれるということなのだ。今は既に大介護時代に突入している。特に地方に行くと、多くの人が要援護者という、大変な状況が生まれている。しかし今述べたようなご近所ができれば、死ぬまで豊かな生活が、要介護でもできる。厚労省が言っている福祉の目標とは、そういうことだったはずだ。つまり、今ここで提案しているような「ご近所」をつくるのは、これからの時代を先取りするものなのだ。



マップを見ていただきたい。認知症の女性が、わずか３０数世帯のご近所のあちこちに出かけている。そして「私も入れて！」とやっている。このうちゲートボールとサロンと井戸端会議の連中は入れてあげているが、趣味グループと元同級生が排除していた。もしこの全部がいれてあげていたら、彼女はこのご近所で豊かに生きられることになる。やり方次第ではそう難しいことではない。

しかしそれは要介護者にとってであって、元気な人は、前述のとおり、車を乗り継いで、スポーツセンターや公民館、カルチャーセンター、シルバー人材センターなどに行って、それで済んでしまう。その方がよほど、面倒な人間関係に巻き込まれなくていいと思うかもしれない。

しかし、例えばカルチャーセンターに行って、彼らはそれ以外のふれあいや助け合いをしているかと言えば、やっていない。趣味活動が終わったら、皆、さっさと

帰っていく、と主宰者は嘆いていた。ただ趣味を習うためだけに来ていたのだ。それでいいではないかと言われれば、それも一理ある。

⑶「共に豊かに」なるために助け合う

もう一度、ご近所で豊かさ活動のすべてができるという案を考えてみよう。住民は６つの豊かさへの要件を総合的に充足させるべく、ご近所内で何度も出会う。つまり「共に豊かに」なるために、同じご近所内の各所で、時には切磋琢磨し、時にはアドバイスをし合う。

これまでのように、市のカルチャーセンターでたまたま顔を合わせても、そこでふれあいや助け合いもしようとは思わない。目的が、ただ単にカルチャーを楽しむことなのだから。しかしご近所で共に豊かに生きようとすれば、趣味活動で出会った相手と、せっかくならふれあいも楽しもう、困り事があれば助け合おうと思うのではないか。そうすることで、効率よく豊かになれるのだから。

助け合いという営みは、それ自体が単純に目的化され、何のために助け合うのかが問われることはない。しかし本当は、ともに豊かになっていくために、人は助け合うのだ。

⑶ご近所単位の助け合いが効果的な理由

「ご近所で共に豊かに」という方式で、ご近所単位で助け合いをすることの利点は、意外に多い。

①小さな町内で日常的にふれあう。そこから助け合いが始まる。

例えば、人々は今は千数百世帯の町民の一人として、個々バラバラにふれあっている。だから町内会として、助け合おうという気運が起きにくい。各自が自分の小さな町内で日常的にふれあう方が、助け合いはしやすい。

②要援護者もニーズを発信しやすくなる

しかもご近所なら、その輪の中に要援護者も加わってくる。その人たちから、さ

まざまなニーズが発信される。

今までと違い、足元に参加したいグループが近づいてくるから、要援護者もそれに参加しやすくなるのだ。そして、同じグループの仲間に悩みを吐露し、それに誰かが対応するはずである。つまりこの仕組みで、福祉ニーズと資源がグッと近づき、接触する。接点にいる人の誰かが対応する。こうして助け合いが始まるのだ。

③要援護者の自助力が高まれば、自分で資源を確保できる

ご近所では当事者が主導権を取るのが普通になっているが、助けられ上手な人はまだ多くない。当事者の自助力をもっと強力に磨いてもらえば、ご近所という小さな世界で、しかもたくさんの人が町全体からご近所に帰って来るのだから、要援護者の腕次第でいくらでも資源は確保できる。先に紹介した認知症の女性がそうだ。

④世話焼きさんも活動しやすくなる

世話焼きさんは、５０世帯の町内でニーズを探している。見つけたら即刻関わる気でいる。ところが今はその活動対象となる要援護者が、デイサービスなどを受けるために町全体に出てしまっている。または行ける場所がなく、家に閉じこもりがちになっている。しかし要援護者の足元に生きがいの対象（グループ）がたくさんできれば、そこに参加でき、そこで世話焼きさんと出会う可能性が高くなる。世話焼きさんからすれば、活動の対象が足元に急激に増えるので、はりきって関ってくれるだろう。

結局のところ、要援護者の困りごとに関わるのは、世話焼きさんなのだ。世話焼きさんは、相手の困り事を敏感に察知し、素早くかかわる。だから世話焼きさんが活動しやすい環境、ニーズを把握しやすい環境を整えてあげれば、誰に頼まれるでもなく、活動してくれる。地域にどんな福祉ニーズがあるかなどと調査する必要はあまりない。世話焼きさんのアンテナを動きやすくしてあげれば、ニーズを見つけ、対応してくれる。

⑤要援護者が最も望んでいる「その人らしく」にも対応

福祉ニーズといっても、例えば見守りなどは、じつは当事者からすればそれほど重要ではない。見守りそれ自体に大した福祉効果はない。逆に、要援護者本人が最

も望んでいるのは、「自分らしく生きたい」。自己実現欲求である。要介護になっても畑仕事をやりたい。このニーズが無視されるのが今の社会である。

だが福祉活動のみならず、住民の様々な趣味活動もご近所に戻ってくれば、このニーズが充足される。あとはメンバーが要援護者を受け入れるかどうか、である。それができれば、最も望まれているニーズが充足されることになる。

⑷豊かな生活ができるご近所をどうつくるか

理想はそうだとして、ではこのようなご近所をどうやって実現させるのか。いくつかの方法がある。

①今まで町内圏域でやっていたこと－趣味やふれあい、助け合い（サービス）、健康づくりなどを、これからはご近所単位にする。

具体的には、参加者のリーダー格の人が、各自ご近所に戻って、いわば二次会を開く。カルチャーセンターをご近所毎に作るのでなく、同じようにして、センターで活躍している人が、ご近所に戻って二次会的な教室を開くのだ。自宅で細々とやっている形でいい。

②もともとご近所にあった、似たような営みを掘り起こし、それを若干充実させる。

サロンなら、すでに井戸端会議が各所で開かれている。それを探し出し、不足している部分があれば支援するなど、少しだけ「色をつける」程度でいい。

③新たにそれぞれの営みのご近所版をつくる。

ある地域で、町内圏域でラジオ体操をやっていたが、冬は休止しようとなった。しかし体操は、細々とでもいいから続ける必要がある。そこでリーダー格の人や小リーダーなどが、それぞれのご近所で立ち上げたらどうかと言ったら、すでにリーダーの１人は足元で仲間を集めてやっていた。その隣でも同じことが行われていた。

④老人会や子ども会などは、ご近所単位のクラブをつくる。

今は町内ごとに作られているが、これをさらに細かく分ける。

⑤町内のイベントもご近所単位に実施する。

敬老会や成人式など、町の主だったイベントもご近所単位に実施するようにする。こうすれば、要介護の人も敬老会に参加できる。今は市の全域から高齢者を集めて敬老会を開くので、要介護者などは参加できないし、実際に参加することを、主催者は想定していない。

⑥ボランティアも、ご近所版をつくる。

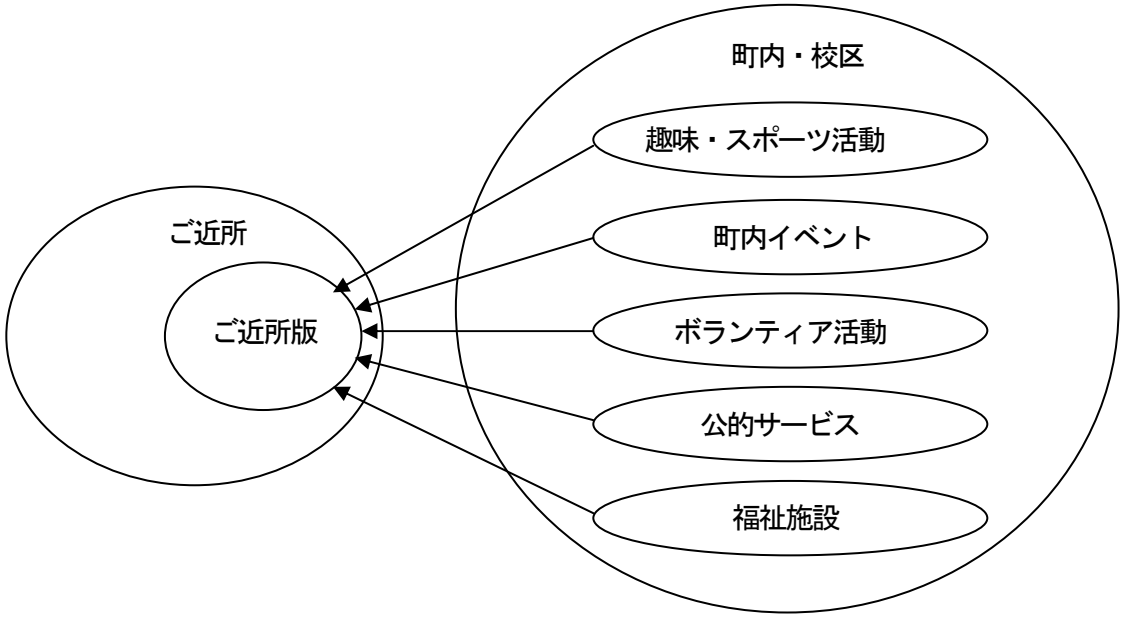
市に一つあったものをご近所ごとに分解する。各自が居住するご近所で立ち上げる。

⑦公的サービスも、ご近所毎にサービス拠点を設ける。

いちいち市の福祉センターに行かなくてもいいようにする。介護予防教室のようなものも、ご近所ごとに開く。講師やスタッフは各ご近所から調達する。

⑧福祉施設もできればご近所毎につくる。

それが無理ならば、施設を分解して、その一つ一つをご近所につくる。対象者の自宅をブランチにしてもいい。スタッフは各ご近所の中から発掘する。



⑸要介護者も豊かさの仲間に加えてこそ

わざわざご近所単位に変えるのは、まずもって要援護者もそれらの組織や活動に参加できるようにするためである。介護保険が始まって以来だと思うが、住民は要援護者を仲間に入れることを敬遠するようになった。要援護になったらサービスのお世話になればいい、私たちのグループに来て迷惑をかけないでほしいと。地域では、元気な人と弱った人が棲み分けをするようになった。

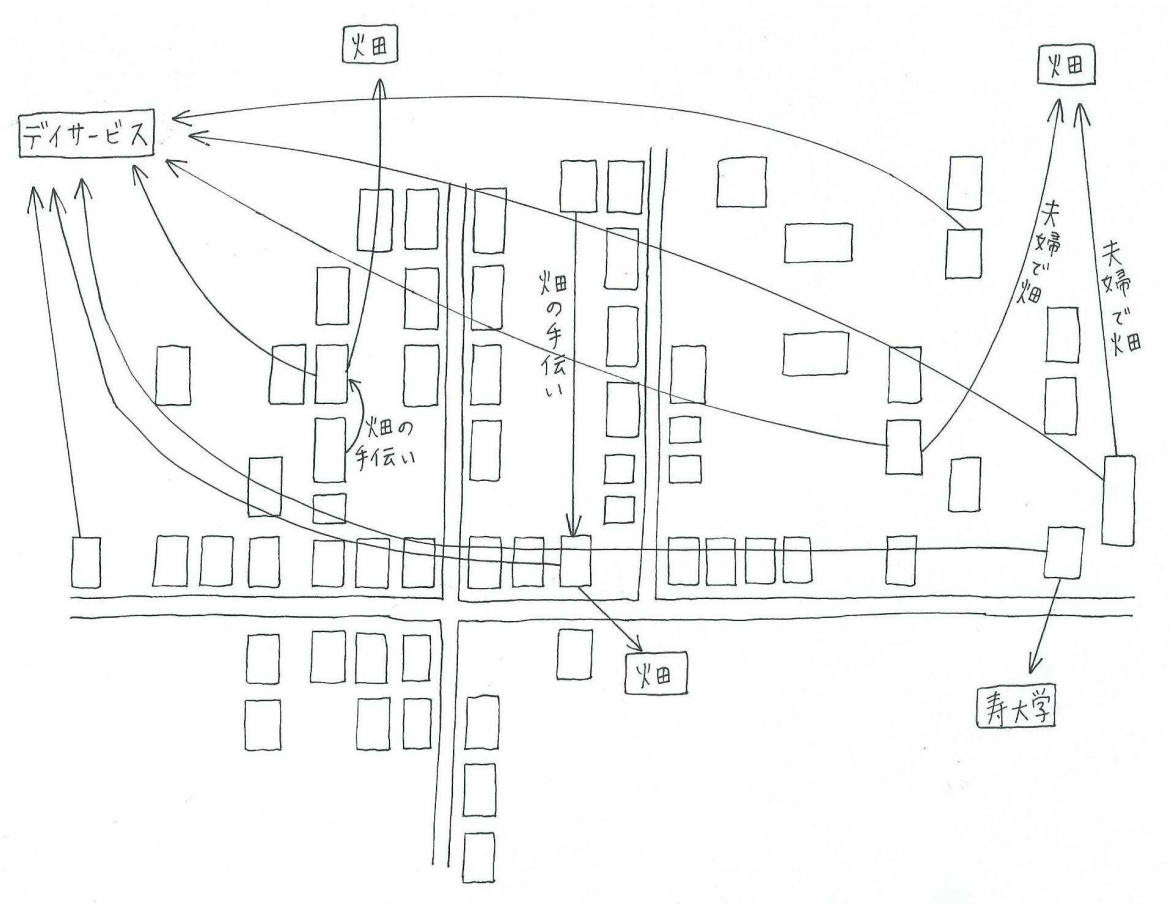
今、国を挙げてめざしているのが「共生社会」作りであるが、現実はそれと反対の方に向かっている。共生社会を今、実践するとしたら、まずは要援護者を仲間に加えることである。たしかに認知症の人が１人加わると、メンバーが困惑するようなことが起き、その人のおかげで何事もスムーズに進まない。「こんな人を入れるからだ」という愚痴が出てくる。それでも我慢して、その人と折り合っていく。それを助け合いというのではないか。

と言っても、要援護者を排除したいという気風が、すぐになくなるとは思われない。具体的な方策を考えなければならない。

①デイサービスセンターや施設が利用者のグループ参加を働きかける

要介護者の少なからずが、デイサービスを利用したり、施設に入所している。すると、今までやっていた趣味活動をあきらめて、グループから脱退してしまうが、そうではなく、彼らが地域グループに参加し続けることができるように、デイサービスセンターや施設が、移送や介助を引き受けるなどして、グループを説得していく。

福祉の理想がレベルアップした今、里帰りは地域全体の課題になっていい。しかしそれを家族だけに負わせるのは酷というものだ。ご近所の人たちで迎えてあげる必要がある。



上のマップは、デイサービスを利用している人の、自宅にいるときの活動である。２人が畑を楽しんでいる。それを支援している人が２人いた。こういうやり方をデイサービスセンターが働きかけるといい。それに、夫が妻（デイサービスを利用している）の畑を応援しているケースも２件ある。

②グループも要介護者を退会させずに、活動を続けられるようにする。

要介護でもできる方法を考えてあげる。移送サービス（相乗り）をする。介助人を付けるなど。

③ご近所に、要介護者を仲間入りさせるための特別な人材も必要だ。

私は「入れさせ屋さん」と呼んでいるが、そういう口利きの上手な人がいる。「私も一緒に入るから、この方を入れてあげてね」という方法や、「介助人付き」で入れてもらうという方法をとっている人もいる。また、リーダー級の人が半ば強引に

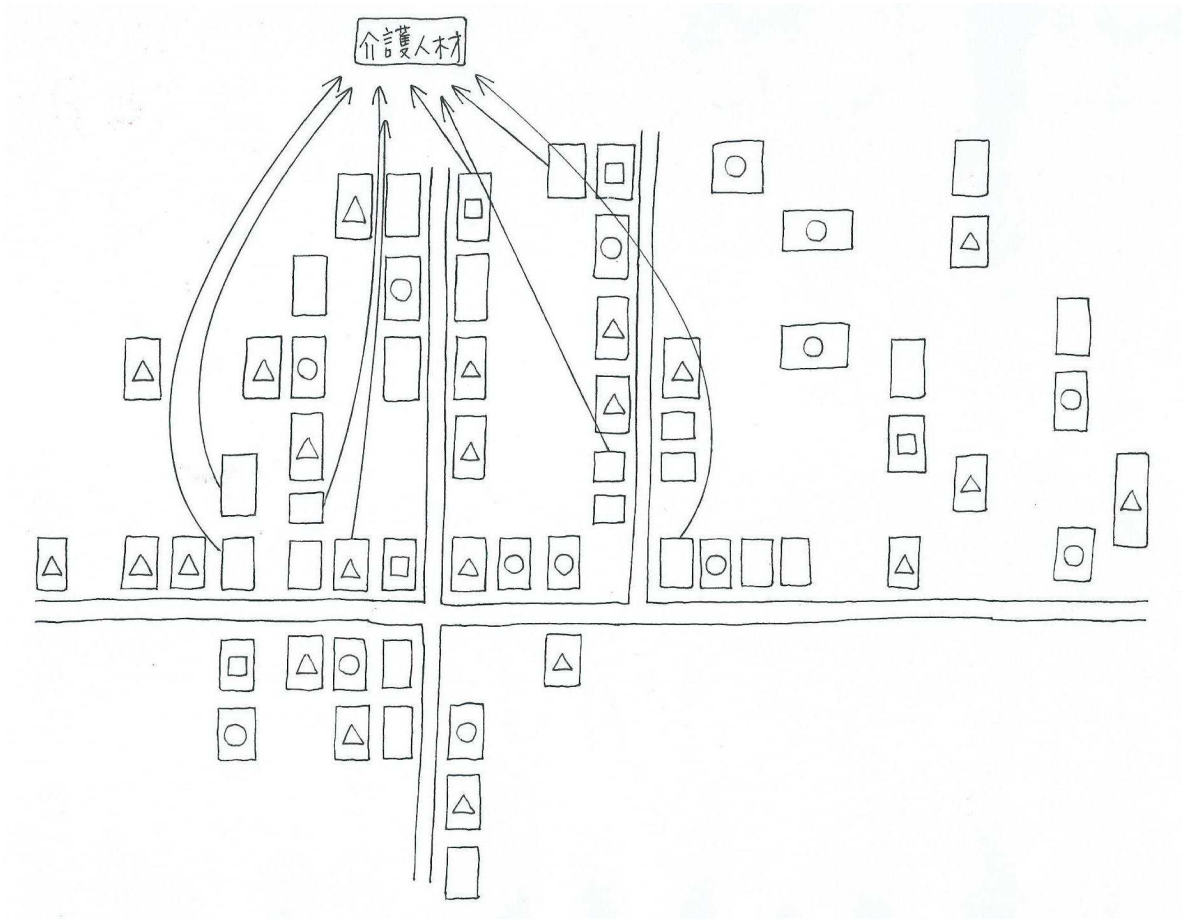
入れてしまったり、認知症などの本人が堂々と（こちらも半ば強引に）入っていくことでうまくいったケースもある。

④老々は夫婦共に元気なうちに地域グループに２人一緒に参加するよう働きかける

老々世帯が多い町内会もあるが、今のところ２人とも元気だというので、何もしていない。しかしその後、妻が要介護になり、夫が介護することになると、妻とともに閉じこもってしまうため、地域の人が入れなくなる。状況が悪化すれば、介護殺人も起こり得る。そこで、夫婦共に元気なうちに、２人一緒に地域グループに参加するように働きかける必要がある。

⑤要援護者が豊かさづくりの輪に入るには、ご近所にいて、日常的に要援護者を支える人材も必要だ。

ご近所（町内会）ごとに数名の介護人材がいるはずだ。元看護師や保健師、ヘルパー、介護福祉士など。そして、家庭介護経験者も同じぐらいいる。



このマップは、介護のプロ（ＯＢも含む）に印（矢印）をつけたものだ。また、舅などを介護した経験のある人も同じぐらいの数がいる。ちなみに〇が一人暮らし、△が老々世帯、□はその他の要援護者。地方に行くとこのように、要援護者がたくさんいる。

＜第７章＞

解決策さがし

1.これはまだ「解決」ではない

関係者に問題を提示し解決策を考えてもらうと、以下のような案が出てくる。

①状況をよく把握する

－「把握」した上で、どんな解決策を考えるかが大切

②情報を共有する

－共有した上で、どんな解決策を考えるか

③当面、様子を見る

－まだ行動に移しているわけではない

④見守る

－ただ見ているだけでは、解決行動とは言えない

⑤相談に乗る

－相談に乗った上で、どんなアドバイスや支援策を講じるかが大切

⑥サロンに招待する

－サロンという環境に置いてあげただけ。そこからどんな変化が？

⑦関係機関やサービスにつなげる

－繋げれば一件落着とは言えない。当面の応急措置にすぎないかも

この６つは、まだ問題は解決されていない。この後どうするのかが問題解決の本番なのだ。「状況を把握」した後どうするのか、「見守って」その後どうするのか、「相談に乗った」後どうしてあげるのか。サロンに行けば何でも解決するのか。

サービスにつなげれば一件落着なのか。サービスというものを今の関係者も住民も過信している。施設入所にしても、ショートステイにしても、デイサービスにしても、これが果たして恒久措置なのか。本人の立場から真剣に考える必要がある。

2.解決策さがしの基本的なあり方

解決策を考える段階になると、マップから離れて、既成のサービスや活動を適用しようとする。これでは何のためにマップを作るのかが分からなくなる。ここからがじつはマップづくりの正念場なのだ。

①本人はどうしたい、どうしている?　周りの人はどうしている?

問題に対して当事者はどうしたいのか、実際にどのような解決行動をとっているのか。周りの人たちはどうしてあげたいのか、どういう行動をとっているのかなどを、マップ上で丁寧に聞いていく。

②解決につながりそうな人や行動を探す

当事者の問題への解決努力とは別に、その問題解決につながりそうな地域の資源を探してみるのもいい。

③解決策さがしはマップ作りの場で行う

解決のヒントはマップ作りの場に転がっている。そこでヒントを見つけ、それを生かした解決策を住民に提案し、反応を見ながら、現実的な解決策を模索する。

④解決策の引き出しをたくさん用意しておく

問題ごとにいくつかの解決策の案を用意しておいて、それをぶつけていけば、どれかは当たるも可能性が高い。

3.解決策を住民流で練り直す

解決策が住民流に沿ったものであるか、以下のような角度からチェックし、住民流になっていなければ、練り直す必要がある。

❶本人の自助力を強化させているか

自助力とは、本人と家族だけの力で何とかすることではなく、逆に周囲の人を巧みに活用する腕があるかということで、そういう資質を培っていかねばならない。

❷同じ問題を持つ人同士の助け合いを仕掛けているか

一人暮らし女性の家が数軒並んでいると、まず助け合いをしている。それを生かす。

❸対象者をまとめて対応していないか

住民は大抵は一対一の関係で支援している。それが住民の流儀だ。

❹本人を担い手に据えようとしているか

要援護者だって、ある部面では担い手になれるものだ。

❺当事者との相性を大事にしているか。当事者が見込んだ人か

当事者は誰がいいと言っているのか、誰と相性が合うのかを点検する必要がある。

❻当人と担い手の自然な接点を利用しているか

両者が自然に出会う所で活動を仕掛ければ、無理がない。

❼双方の問題が同時に解決するよう仕掛けているか

Ａさんの苦手な部分をＢさんが持っている。一方Ｂさんの苦手な部分をＡさんが持っているという関係が見つかれば、つなげるのにベストな関係といえる。

❽担い手が持っている最強の力を引き出しているか

企業人ならば本業の場で使っている腕を生かす。趣味活動をしている人なら、その趣味の腕を使えるようにするのだ。

❾問題解決力のある人材であるか

自治会長とか民生委員、福祉委員等の人材が地域にいるが、それ以外にも天性の世話焼きの資質を持った人がいて、その人たちが実質的に問題を解決している。

❿活用する組織、人材は本当に機能しているか

「その人たちが本来担うべきだ」と言っても、その気や能力がなければどうしようもない。肩書に振り回されないこと。

⓫既成のシステム、組織、人材と安易につなげていないか

このやり方は簡単だから誰でも使いたがる。しかし当事者目線で見る限り、そういうやり方がうまくいくとは考えにくい。

⓬ご近所内の問題にご近所内の資源を使っているか

外部資源を簡単に導入しないということである。ご近所の連帯を育むためには、まずは(外部の人でなく)ご近所の人に頼ることが大切なのだ。問題が生じるたび、ご近所外の資源を気楽に使っていては、ご近所内の連帯はまったく育たない。

4.担い手主導・推進者主導は改める

今の福祉では、問題が出てきたら、解決につながりそうな策を既成のシステムなり制度、組織、活動の中から探し出すという方法をとっている。担い手目線、推進者目線での問題解決の方法といえる。担い手や推進する側の都合で解決策を考える。当事者や住民がそれをどのように受け止め、評価するかは考慮されていない。

以下に、よく出てくる「取り組み課題」を１０項目並べてみたが、皆さんはどう思われるか。おそらくほとんどの項目で「妥当な考え方」と結論されるだろうが、じつはこの１０項目のすべてが「担い手目線」の取り組み課題なのだ。こういう取り組み課題を抽出するのなら、そもそもマップ作りの必要はない。

１ 毎日コンビニ弁当や外食頼りの男性がいるので、会食会を立ち上げたらどうか。
２ 自治会に加入していない人がいるので、自治会長等が訪問して入会を勧める。
３ この地区に福祉委員がいることを知らない人がいるので、周知を徹底する。
４ 老々世帯で心配な家もあるので、民生委員に訪問してもらう。
５ ふれあいが欠けているようなので、自治会でサロンを立ち上げたらどうか。
６ 若者世帯がいるのに高齢者と交流がない。〇〇会館で交流イベントを開こう。
７ 一人暮らし高齢者が多いので、班長や福祉協力員などで見守り隊を編成する。
８ 一人暮らし等で老人クラブに加入していない人もいるので、加入促進を図る。
９ 認知症で一人暮らしの女性が気になる。民生委員がデイサービスを勧める。
１０ 区長を中心に班長、福祉委員、民生委員などで小地域福祉の推進体制を作る。

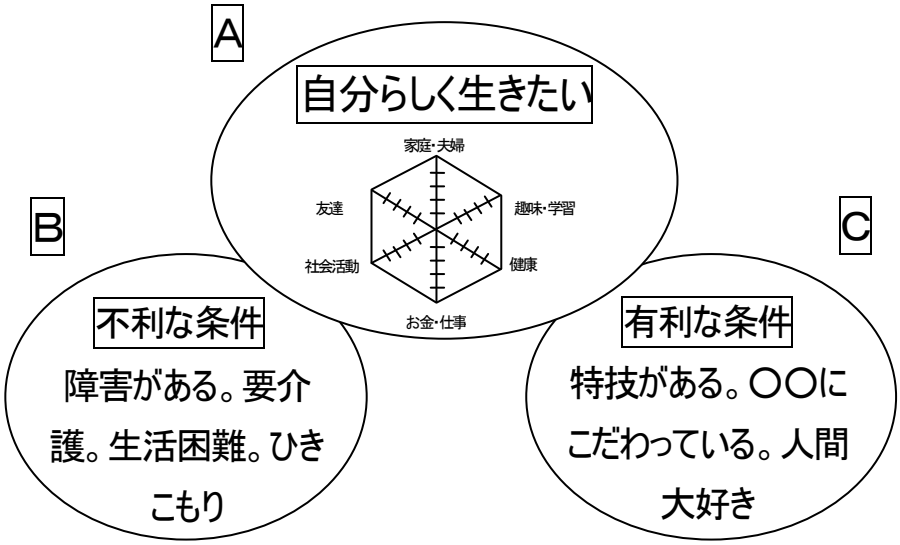
5.「その人らしく」応援型問題解決法

⑴福祉の目的は「その人らしく」を応援することだった

福祉の目的は「どんなに要援護になっても、住み慣れた家や地域で、安全かつその人らしく生きて行けるように地域全体で支えること」だと国も言っている。

⑵「その人らしくの実現」をめざす解決法の基本図

ここに「その人らしく」を主目標にした問題解決法の基本図を示そう。今までは B を解決するのが福祉だと考えてきた。本解決法は、取り組みの主たる対象を B から A に移すということである。本人の願いに即した問題解決法でもある。



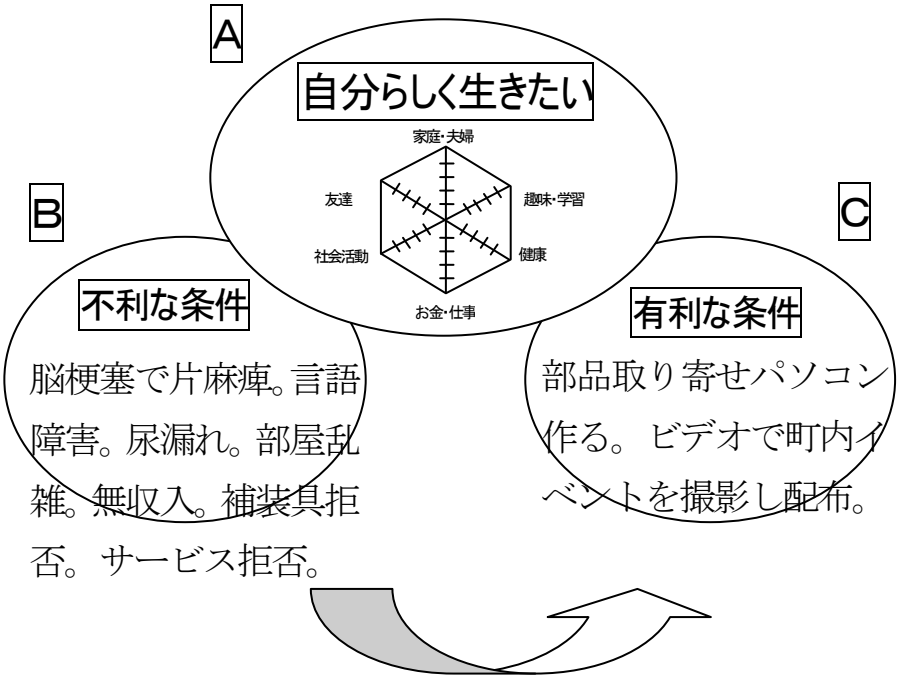
まず A。これが、当事者本人がめざしている「その人らしい生活」の実現という目標。本研究所ではそのための「豊かさのダイヤグラム」を提示している。この６つの要件が充足され、豊かさ満開になれば、目的実現だ。

次いで B。その目的を果たすための「不利な条件」。福祉関係者が主に関心を持ち、対応している対象で、要介護、障害がある、生活が困難といったこと。

最後に C は、目的実現のための本人の有利な条件。特技がある、こだわっているものがある、人が好き、協力者がいる等。

⑶「その人らしく」支援型福祉による問題解決行動の実際

一人暮らしの高齢男性。様々なハンディを抱えている。この場合のポイントはハンディに替わるたくさんの能力を持っていること。これを生かせばいい。



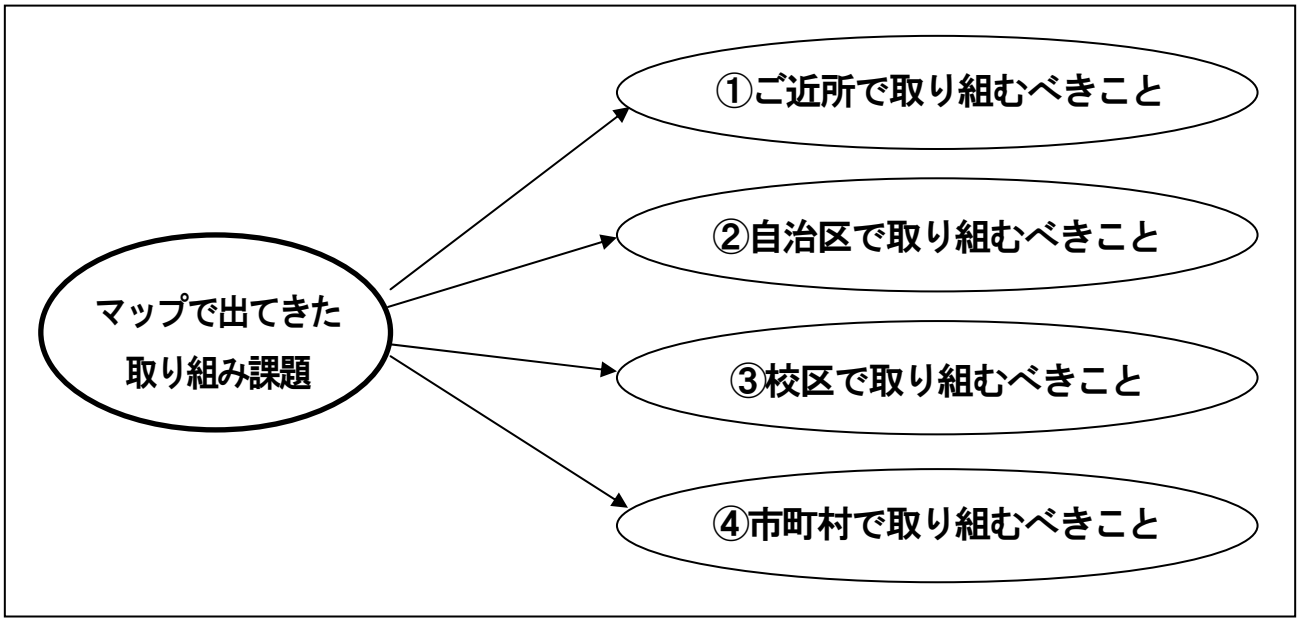
補装具拒否は本人曰く「使い勝手が悪いから」。サービス拒否は「自立意欲を失うのがこわいから」。自立志向の表れで、むしろ「有利な条件」だった。それにパソコンを組み立てる技術があるし、創意工夫が得意。ボランティア精神もある。これらを生かせないか。

⇩

①パソコン組み立て講座を開く(その支援)。
　自宅で開けば「部屋はきれいにしよう」。
②ビデオ講座も開ける。両講座で収入も。
③創意工夫の腕を生かし、片麻痺でも着脱できる
　補装具を関係者と開発。生活の不便も解消。
④町内会などがビデオ作製を有償で依頼。
　パソコンの修理・請負も含めて事業に。

＜第８章＞
課題を
圏域ごとに振り分け

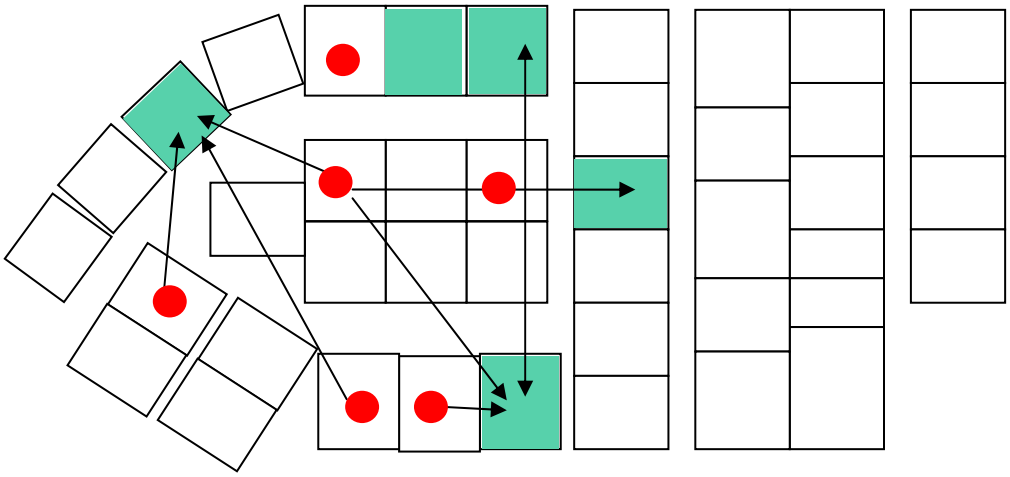
最後に「取り組み課題」はどう整理したらいいのかをまとめることにする。一言で言えば、圏域ごとにそれらを割り振るのである。



次頁のマップでは、介護者を隣人達が支えている。買い物を手伝ってあげたり、庭の草取りをしてあげたりなど、介護者の周辺的なしごとを代わりにやっている。

介護中の家庭に隣人がどのように関わっているのかを線で引いてみた。隣人が気軽に関わり、介護者もそれを受け入れていることがわかる。支援している隣人の多くが家庭介護経験者であることもわかった。ならば家庭介護経験者で介護サポート・チームをつくり、介護者を様々な面から支えられる体制を作ったらどうか。

この取り組み課題を実行するために、各圏域でどんな役割を果たしたらいいのか。これを「振り分け」と言うことにする。



…介護中の家庭（線は関わる人）。介護経験者●がサポートしている。

ご近所	①サポート・チーム作り ②ご近所福祉推進チームに移行
自治区	①傘下の各ご近所に同様の「サポート・チーム」作りを推進 ②傘下の各ご近所の連絡会、勉強会を主催
校区	①「サポート・チーム」作りを傘下の各自治会に働きかけ ②自治区の推進担当者で「サポート・チーム」支援の連絡会 ③「介護をひらく」－介護の営みをオープンに。 　住民が介護家庭へも関与する気風作り
市町村	①「サポート・チーム」作りと活動のマニュアル作り ②関係機関による「サポート・チーム」支援連絡会を編成 ③「介護をひらく」運動のマニュアル作りと運動展開。各校区に指導 ④傘下の校区に「サポート・チーム」作り支援の指導

＜第９章＞
「一般化」

⑴他の同じ問題を抱えた人への対処も一緒に考える

マップづくりの作業としては、要援護者が見つかり、その人が抱える問題が見えてきたら、あとはその問題を解決するためのヒントをマップの中から探し出して、「では、こうしたら？」と提示すれば終わりとなる。

しかし❶（そのご近所では）これからも同じような問題が生じる可能性がある。❷すでに抱えている人もいるだろう。❸他のご近所で抱えている人もいるはずだ。

そこで、１回のマップ作りで出てきた取り組み課題を生かして、❶❷❸のケースについても対処法を考えていけば、効率的だ。それを「一般化」と呼んでいる。

①買い物が不便という悩みにどう対処するか？

北陸地方の過疎地で支え合いマップづくりをした。そこで出てきた住民の困り事の１つが、買い物や通院に不便だということであった。試しにマップ作りの場に来た人たちに、では住民はこの問題に個々でどのように対処しているのか聞いてみた。

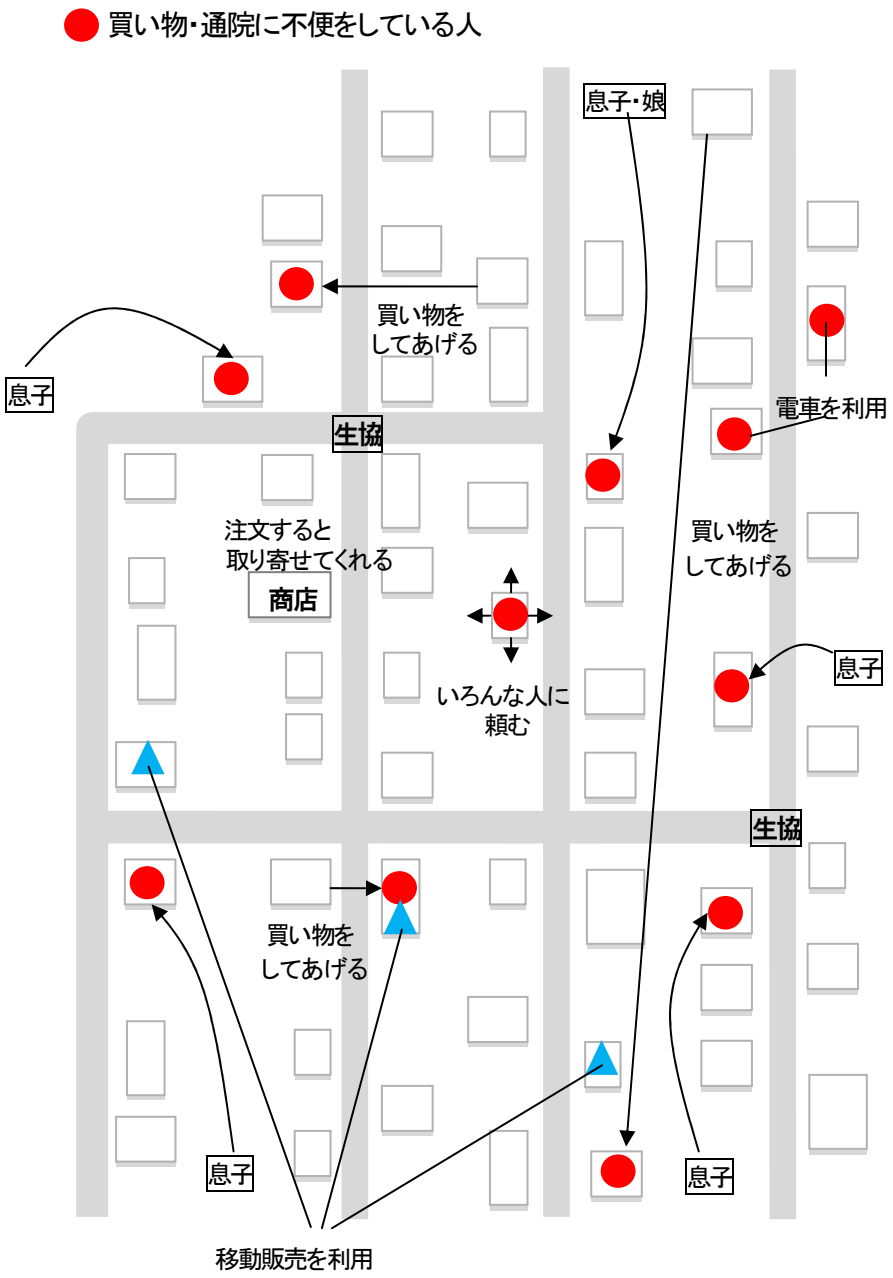
その結果がここに紹介したマップである。買い物や通院に不便をしている人に印をつけてもらったら、５０世帯程度のこのご近所に１５人いることが分かった。

次いでこの一人ひとりについて、どのように対処しているのかを調べてみた。驚くべきことに、マップづくりに参加した人（５人程度で、全員男性）は、この問いにほぼ完全に答えることができたのである。以下に並べてみよう。

①息子や娘が時々やってきて、そのとき買い物に行ってくれる。
②生協が、頼んだ品物を持ってきてくれる。生協と書いた所に車が止まる。
③ご近所に１つある店が、注文した物を取り寄せてくれる。
④移動販売を利用。
⑤電車で都市部に買いに行く。そのために自宅から１５分ぐらい歩いて駅まで行く。
⑥親しい隣人がついでに買ってきてくれる。
⑦その都度、近くの誰かに声をかけてお願いする。頼み上手さんだ。

住民（当事者）一人ひとりが開発した問題解決策が、少なくとも７つは発掘できた。あとは、これを上手に生かせばいいのだ。

今後、新たにこの問題を抱えた人が出てきた場合、本人の好むやり方や周囲との人間関係などを勘案して、ベストの対策方法を考える。



例えば本人に、この要望に応じてくれる親しい隣人がいない場合、近くに他の人の買い物をついでにしてあげている人がいたら、その人に「〇〇さんの分もついでに買ってきてあげられませんか？」と聞いてあげる。「いいですよ」と言ってくれれば、その人に頼む。余力を調べるのだ。

こういうニーズと資源を上手に結び付けるコーディネーターがいたら効率的だ。しかもニーズの種類ごとに得意な人が担当する。買い物支援コーディネーターとか。

この人材は、常にご近所内の当事者がだれにどのようなお願いをしているかの情報を持っていて、その結果、「〇〇さんは、あと数名の買い物支援をやってあげら

れる力を持っている」といった余力情報も蓄積しておく。

⑵自治区、校区、市町村域を生かして全域に普及

前掲の７つの方法は、他のご近所でも使える可能性がある。全地区で使えるようにするために、自治区が傘下の特定ご近所で考え出された解決策を、傘下の他のご近所にも伝える。次いで校区が傘下の特定自治区で使われているこの方法を、傘下の他の自治区にも伝える。さらに市町村域が、傘下の特定校区で広がっている手法を、他の校区にも伝えるという方法で、市町村の全域に伝わる。

ちょうど、「介護サポート・チーム」づくりについて、各圏域に振り分けるというのが、これに該当する。振り分けを別の言い方をしたに過ぎない。

⑶ご近所でできないものを自治区で受け止め

もう一つ、一般化に似ている発想がある。ご近所の問題は基本的にはご近所で解決するように努力する。しかしご近所では解決が難しい問題については、上層圏域である自治区で対応する。自治区でも難しい場合は校区で対応する。そして校区でも難しい場合は市町村域で対応する。

自治区で対応する場合、特定のご近所のためというよりも、どのご近所でも使える策である場合が多いのではないか。そのような策を用意して活用するのも一種の一般化と言っていいかもしれない。

ただ、この一般化を安易に使うと、ご近所主導で助け合いを進めようという意欲が損なわれる恐れもある。それぞれのご近所ごとに対応した方がいいというのは、その方がご近所の実情に合った解決策になるからでもある。どのご近所でも使える方法をただ当てはめようとすれば、不具合が生じる可能性がある。また、ご近所の助け合い力を強めるためには、なるべくご近所の問題は自分たちで考えようという意欲が必要だが、自治区で解決してくれるようになると、ご近所が努力をしなくなる。この「一般化」手法を採用する場合は、そのような恐れもあることを頭に入れておく必要がある。

＜第１０章＞
マップ作りのまとめ

⑴まとめの留意点

①「まとめ」はマップ作りの場で

マップ作りが終了した時点で、その場で、ある程度のまとめをする。後日になると、大事なことも忘れてしまっている。

②マップで発見した住民の興味深い活動も

取り組み課題をまとめる前に、マップで発見した興味深い活動も整理しておく。住民は既に一定の活動をしているのだから、それを整理するのが先決。

③取り組み課題は問題と解決策の２面から

「取り組み課題」とは「問題」のことだけだと誤解している人が多い。そうでなく、「問題」と「解決策」の２つのことである。

④課題抽出は「気になる人」と「気になること」の２点から

この中の「人」にばかり関心が向いているが、むしろ大事なのは「こと」の方とも言える。地域課題にもっと目を向ける必要がある。

⑤ご近所、自治区、校区、市町村域の役割分担にまで

ただ課題を出すだけでなく、４層のどこがどういう役割を果たすべきかまで整理する必要がある。

2.マップで発見した興味深い活動

支え合いマップづくりはただ課題を抽出するためだけではない。住民は既にある程度の助け合いを実行している。その中には、あっと驚くような活動、なるほどと感心させられる活動、こんな人がこんなことをといった意外な活動などもある。住民だけでなく、福祉関係者の興味深い活動を発見する場合もある。

そこで、マップづくりを終えた後、この角度からも、気づいたことを記録したらどうか。

①住民（主に担い手）の興味深い活動とその内容、意義

②当事者の興味深い活動とその内容、意義

③保健福祉機関（ワーカー）の興味深い活動とその内容、意義

④その他、住民や関係者の活動で興味をそそられたこと

3.マップで出てきた取り組み課題

その地域を、より良き福祉のまちにするための取り組み課題を整理してみよう。「気になる人」と「気になること」の２種類ある。「人」にばかり関心が向くが、「こと」の方にももっと目を向けよう。「取り組み課題」とは問題と解決策の２つ。

⑴「気になる人」の取り組み課題（問題と解決策）

＜①見守り、②困り事への対応、③介護・ケア、④豊かな生活支援など＞

⑴_____さんへの対応

①気になる状況（課題）

②対応策

❶向こう三軒両隣・班・ご近所で対応すべきこと

❷自治区で対応すべきこと

❸校区で対応すべきこと

❹市町村域で対応すべきこと

⑵「気になること」の取り組み課題（問題と解決策）

以下の３点について、気になる理由と解決策をまとめる。ここでもご近所、自治区、校区、市町村域の４層に分けて解決策をまとめる。

❶「気になる要援護者」の共通課題と解決策

＜①見守り、②困り事への対応、③介護・ケア、④豊かな生活支援＞

❷住民の生活課題と解決策

＜①買い物・通院が不便、②交通事故の危険、③若者不足で行事ができない等＞

❸「福祉のご近所づくり」への課題と解決策

＜①住民の交流がない、②世話焼きさん等の人材不足、③障害や病気を隠す風潮、④当事者の自助力不足、⑤住民と関係機関・民生委員等の連携不足等＞

⑴＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿の問題

①気になる状況（具体的に）

②対応策

❶向こう三軒両隣・班・ご近所で対応すべきこと

❷自治区で対応すべきこと

❸校区で対応すべきこと

❹市町村域で対応すべきこと

＜第１１章＞
ご近所で協働

マップ作りができ、取り組み課題が出たら、あとは実践あるのみだ。ところが、せっかく熱心にマップ作りをしても、出てきた課題に実際に取り組むところが、なかなか進んでいない。

たしかに課題は出てくるのだが、それを実践に移す力が欠けている。社会福祉協議会等は、地域にたくさんあるご近所の一つ一つに関わってはいられない。では民生委員や町内会が実践をバックアップするかとなると、これも心許ない。

それならば、実行体制を作り出す必要がある。ここで求められるのが、いま注目されている「協働」である。この協働という手法を使って、なんとか強力な実践体制を作っていかねばならない。

⑴ご近所力強化には独特の難しさが

ご近所では、私たちが想像している以上に助け合いが行われてはいるが、現状ではやはり不十分であることは否定できない。今や大介護の時代と言われている。要援護者がご近所に（極端に言えば）溢れている。今は極論だが、そう遠くない未来には、これが当たり前の表現になるはずだ。

だから、今のうちからご近所の福祉力を最大限に強めておかねばならない。この圏域のどこかから強力な資源力を掘り起こさねばならない。

ご近所力を強めるという行為には、独特の難しさがある。福祉力を強めるとしたら、地域の各所からプロも含めた専門家や有力なボランティアを動員すればいいのだが、ご近所は私たちが生活をする場である。その場で、あまり「福祉」をむき出しにするものではない。

あなたの足元で様々なボランティア活動が行われたり、あなたも食事会に招かれたり、福祉のことで動員されることもあるだろう。そういうことは第一層の福祉センターでやってもらうのはいいとしても、私の日々の生活の場では、少し遠慮してほしいと思うのではないか。だから、今もご近所では「水面下で動く」という暗黙のルールが守られているのだ。と同時に、一方ではご近所の福祉力を強化しなけれ

ばならない。この二つの願いをどのようにして両立させるかが課題になるのだ。
　このことを頭の隅に置きつつ、ではどうやってご近所力を強めたらいいのか。

⑵ご近所内の個々人が持っている力を徹底的に活用する

　ここまでは「ご近所の福祉力を強める」という言い方をしてきたが、より具体的に言えば、「ご近所の助け合い力を強める」ということなのだ。そのご近所が持っている個々の力を結集して、それらをすべて助け合いの強化に振り向ける。
　そのためには、当事者もこれに参加しなければならない。当事者力、言い換えれば自助力が基本にある。その上で、ご近所の一人ひとりが持っている力をすべて掘り起こし、徹底的に活用する。そのための助け合いの仕掛け方には、工夫が必要だ。
　そのご近所に関わっている、さまざまな人材も掘り起こす。趣味グループやボランティアグループ、当事者グループなど、ご近所の要援護者に何らかの関わりをしている人も探し出す。このご近所に在住だが、普段は上層のボランティアグループなどで活躍している人にも戻ってもらう（ご近所で活躍してもらう）。
　元看護師やヘルパーなど、ご近所在住の保健福祉関係者もそうだし、ご近所の要援護者に関わっているケアマネやヘルパーなどのプロも、これに加わらねばならない。ご近所内外に存在し、ご近所の人たちがお世話になっている施設やデイサービスセンターなども、参加しなければならない。

⑶全てのニーズと資源情報を助け合い推進会議に結集

　それらの人たちが、支え合いマップの、要援護者やその人に関わる人たちの関わり合いの線を見ながら、皆で対応策を考えるのだ。「助け合い推進会議」と言ってみた。現場ではそんな仰々しい名前は使えないだろうから、もっとざっくばらんな名前にするといいだろう。いかにも「会議」らしい形にする必要もない。２，３人集まって、ちょっとした井戸端会議になる場合もあるだろう。

⑷ご近所での協働のメリット

　今の関係者の関心事の一つが「協働」である。たしかに、ご近所福祉に限らず、今の地域福祉が力足らずなのにはいろいろな理由があるだろうが、協働が欠けているというのが、極めて大きい。関係者は、普段はそれほど協働の不足を意識してい

ない。協働しなくても、日常の業務に差しさわりはない。協働が欠けていて困るのは当事者だからだ。

協働が必要なのは、当事者への福祉力が欠けているからであって、だから協働をする際には、すべての地域の力を当事者に向けて結集することが必要なのだ。このあり方をご近所福祉にも適用したらどうか。ご近所協働である。

ご近所での協働には、いろいろな面でメリットがある。

①対象がわずか５０世帯の地域と限られている。

②対象者も少ないし、

③資源もそれほど多くない。彼らが少ない対象者に総力を結集するのは、割合容易なのだ。しかも、

④ご近所で当事者に誰がどのように関わっているかが、マップで見えている。それを基本財産として、それに若干の資源が加わればいいという場合が多いはずだ。

⑤もともとご近所とは、地域の各圏域の中で、唯一「顔が見える」圏域である。だから助け合いがしやすい。

⑥そして一定の助け合いが既に実行されている。

協働する場合にもメリットがある。

⑦メンバーの多くがご近所に在住であるし、

⑧関係者もそのご近所の当事者に関わっているから、ご近所のことはよくわかる。

⑨彼らが協働すれば、お互いの情報を出し合うことで、さらに大きな力が出せる。

⑩問題もそれほど大きくないから、取り組みやすいし、

⑪その成否もすぐに出る。

⑸ご近所協働の留意点

①まず支え合いマップ作りから

協働の出発点は支え合いマップづくりである。これにプロも含めて、なるべくたくさんの人が加わる必要がある。マップで、ご近所内の要援護者やその人に関わっている人、さらには世話焼きさんやご近所に在住のプロ（ＯＢ）、自助力を持った当事者などが一挙に見つかるのだから、ここに同席しないと、その後の関わりに支障をきたす。

マップで地域が見えてくるのは、いろいろな目で見たものを総合するからだ。だから、それぞれの資源力を持った人が、その人の目で見れば、また違った見え方がしてくるかもしれない。また自分のやるべきことが、新たに見えてくる。今の状態

でもいいと思っていたが、別の動き方もしなければならないと思うかもしれない。

②すべての人の協働であること

一般に協働というと、関係者だけのつながりと理解してしまう人が多いだろうが、地域での協働は、文字通りすべての人たちの協働なのだ。当事者もそうだし、その家族も、ご近所さんも、世話焼きさんも、ご近所内の各種グループも、すべてが協働に巻き込まれているのだ。その中の誰と誰が協働したらいいのかは、相性や天性の資質、当事者との関係、などが関係してくる。

③ご近所さんを主役に引き立てる

協働にはいろいろな福祉関係者も参加するが、やはり主役はご近所の世話焼きさんや当事者である。常に彼らを主役に引き立て、彼らが主体的にご近所福祉に関わっていくように応援しなければならない。

元々世話焼きさんがその資質を持っていれば問題はないが、そうでない場合は、民生委員や町内会長、社会福祉協議会のスタッフなどが、ご近所さん抜きで進めてしまう恐れもある。

④あらゆる問題は相互に関連し合っている

私たちはともすると、個々の問題を個別に考えていく癖がある。しかし、これはあまりに単純すぎる。現実には、ご近所のあらゆる問題は相互に関連し合っているはずである。だからこそ、解決のためには助け合いが必要なのであり、すべての人がその助け合いの中に巻き込まれているのだ。

だから、個々の問題を個別問題として処理するのでなく、むしろ出てきたすべての問題を、すべて繋がっているという前提で見ていく必要がある。これを単独の人が行うのは難しいが、そこにいろいろな立場の人、いろいろな資源力を持った人がいれば、「つながり」が見えてくる可能性も高い。各自が自分の立場で問題を見ていけば「つながり」は見えやすいはずである。

⑤一つの共通テーマが立てられる場合も

出てきた課題が相互に関連し合っているということは、場合によっては（すべてではないが）それに一つの共通項が見いだせると言っていいかもしれない。つまり、相互関連図ができて、その全体を、特定のテーマで括ることができるということだ。実際にあとで紹介する事例にはすべて特定のテーマが冠されている。それはそのご

近所の最も重要で、今取り組まねばならないことである。

⑥安易に外部資源を持ち込まない

こういう手法を取るとなると、要援護者に安易に公的なサービスとか、ボランティア活動を差し向けるのは、やはりおかしい。狙いは、できる限りご近所さんの助け合いによって解決していこうというのだから。サービスを入れると、そこで助け合いは止まってしまう。

サービスでなくても、特定の人材を外部から導入することで、関わる機会を失うご近所さんが出てくる可能性もある。その結果、それまで均衡がとれていたご近所の助け合い関係の中で、その人が浮いてしまう恐れもある。

可能な限り、ご近所内から該当する資源を探すべきだ。場合によっては、他の「気になる人」が資源になるかもしれない。だから、人を担い手と受け手に分けてはならない。担い手を受け手にしたり、その逆の手を使うという場合が意外に出てくるのではないか。

⑦プロは問題をご近所から持ち出さない

一方で、ヘルパーなどが入った家には、枠外のニーズが溜まっているはずだ。大抵の場合、ヘルパーはそれをご近所に開示せず、職場に持ち去ってしまう。それだけでなく、ご近所の問題に取り付いた関係者は、それを福祉センターなどに持ち去ってしまう。ご近所さんは、それに関わりようがない。そこでまた関係が切れてしまう。

本当なら、その問題も、センターに持ち去る前に、ご近所の助け合いの輪の中で解決できないものかと考えるべきである。ご近所で生じたあらゆる問題について、同じことが言える。例えば、関係者が持ち去ってしまった問題に何らかの形で「資源」として関わることができる要援護者がいるかもしれないのだ。

⑧住民の流儀から外れてはならない

これは言うまでもないことだが、取り組み課題をまとめる場合に、人々を、相性や天性の資質などを無視して、強引に結びつけることはできない。福祉機関がよくやるように、数名を集めて面倒を見るといったやり方も、ご近所のルールから外れている。あくまで一対一の関係がご近所のルールなのだ。

ご近所さんは、福祉をするにしても、「社会的な営み」とは思ってはいない。あくまで私的な営みと思っている。だから民生委員が来たからといって、無条件で受

け入れるわけではない。私的な関係では、人々は相性でつながっている。相性が合わねば、民生委員たりとも受け入れない。

それが分かっているつもりの人でも、いざ推進会議が始まると、ご近所の住民を自分たちの意思で動かせると思ってしまう。そこを変えることができるか。

⑨プライバシーに神経質にならない

特にプロは、推進会議に出て、自分が当事者に関連した情報を開示することができるのか、逡巡するはずだ。

まず基本的には、ご近所という所は、他の圏域と違って、内部で助け合いをしなければならない圏域である。

そのためには、まずお互いに相手のことを知らねばならない。住民同士がプライバシーを主張し合ったらアウトである。ここでプライバシーを主張する人がいても、「それでは助け合いはできませんよ」と毅然とした態度をとる必要があるのだ。関係者も、自分がそういう圏域に来ているということを強く意識する必要がある。

といっても、関係者にはやはり守秘義務の問題がある。自分たちが関わっているケースについて、「会議」に参加する住民に必要な情報をオープンにしなければならない場合もあるだろう。その際は、「会議」に加わるご近所さんに一定の縛りをかける必要がある。その場合に、福祉推進員という肩書を与えて、民生委員に準じた扱いをするという方法もある。

⑩「会議」運営も実際には臨機応変に

推進会議を開こうとしても、めざす相手が集まらない場合が多いだろう。まず１人２人が集まった段階で、見切り発車をしていい。集まった人たちで出てきた情報を基に動き出せばいいのだ。大事なことは、取り組み課題を抽出し、それに実際に取り組むことである。

その実行力が欠けていると、課題ばかりが増えていって、放置すると変質してしまう。そうなるともう、取り組む気持ちが失せてくる。だから１つでも課題が出たら、すぐに動き出す。それが鉄則である。

⑪「やる気のある人たちで推進会議」が望ましい

必要な人材だけど、本人がやる気がないという場合、会議の士気にかかわる。会議は常に、やる気のある人たちで活気にあふれているという状態をつくる。

⑫ミッドフィルダー（司令塔）が１人は欲しい

やる気のある人も欲しいが、それ以上に、さまざまな推進会議のメンバーをまとめて、しかも強力なご近所力を引き出せる司令塔のような人材が１人は欲しい。第３層あたりで活躍している超大型世話焼きさんがいればベストだ。この人はニーズを見つけるのも得意だが、それ以上に人を動かす力がある。この力が必要なのだ。

＜事例１＞要援護者の多いご近所で助け合いを

■問題は多いが、資源は少ない

この事例は、いろいろな福祉問題を抱えた人が多数入居しているアパートである。ご覧のように、一人暮らし高齢者が、２２世帯の中の９世帯（半数近い）。しかも障害者や要介護者、病弱者もいる。不登校の子どももいる。

福祉資源としては、看護師が数名と、小型世話焼きさんが２人いるだけで、アパート全体としてのまとまりもなく、住人が寄り集まることもしない。助け合いのアパートにするには、ハンディキャップが多い。

■まず空き室でのサロン開催。そこから突破口を

さて、こういう状況で、どういう取り組み課題を考えたらいいのか。言えることは、この中の住人だけでは、助け合いによって彼らの抱えた問題を解決するのは、かなり難しいということである。とすれば、外部からの福祉資源の導入を本格的に進めねばならないし、少ない内部資源をフル活用するための仕掛けも必要だ。

ここでやることは何か。

❶このアパートにふれあいが欠けていることがわかった。自宅を開放してサロンを開いている家もない。そういうことを仕掛ける大型世話焼きさんもいない。そこでまず、アパート内の空き室の一つを利用して、ふれあいサロンを開いてみる。世話焼きさんが２人いるので、この２人を通して、まずは参加してもいいという人を、一人ひとり探す。急がずに、じっくりと根気よく開いていく。

❷そのサロンにやって来た人から、福祉ニーズが出てくるから、そこから取り組んでいく。その場合も、外部の関係者が前面に出ることはしない。あくまで２人の世話焼きさんを通して関わりを始める。

❸どんな問題がやって来るか。一つは、要介護の夫を介護している女性（世話焼きさんの１人）の愚痴を聞く中で、側面支援できることを掘り起こす。ニーズが見え

たら、アパート内の人を通して関わっていく。以下も同様な方法を取る。
❹ヘルパーが入った家については、ヘルパーから枠外のニーズを聞き出して、住人でできることがあるかを探る。難題は上層に上げていく。
❺ヘルパーが入った家や、重度の要介護者を介護している人などがあるが、一方で看護師が複数いるので、両者を結び付けることはできないか。介護技術の提供や介護支援で、介護者が受け入れる範囲で関わっていく。
❻サロンを開く中で、例えば不登校の子どもや、祖母に預けられた障害児への関わ

子が不登校	● 80 代女性 ヘルパー 来ている	● 50 代女性 身体障害			母子共に 看護師	●	● 病弱な男性
● 70 代女性 看護師の娘が 重度障害の 孫預けに来る		小型世話焼き	空室	●	小型世話焼き 夫：囲碁 妻：編み物 妻が要介護の 夫を介護	●	
	空室		空室			● …一人暮らし	

りという役割も出てくる。必要に応じて食事の提供もありうる。これらはすべてサロンを開く空き室を舞台として進めていく。
❼重度の要介護者が囲碁に強いというので、この腕を生かして、サロンを会場に、あるいは本人宅を会場に、囲碁教室を開くこともできる。妻ができるという編み物を生かして、編み物教室をこのサロン会場で開いてもいい。

■内部の関係図が明らかになるにつれて助け合いの仕掛けを

今の段階では、住民相互の関わり合いがまだ見えていない。この中の誰と誰が仲がよいのか、おつき合いをしているのかが分かっていない。

今後サロンを開く中で、内部の関係図が明らかになれば、いろいろな助け合いの仕掛けができるのではないか。まずはこれらのことを試してみて、住民の反応を見ながら、次の一手を打っていくことになるだろう。

このご近所で推進会議を開くとしたら、メンバーはどういう人か。

助け合い推進会議の主要メンバー

①小型世話焼きさん（２人）
→助け合いの中心になってもらう。

②ご近所の要介護者に関わるヘルパー
→まず枠外のニーズへの関わりをご近所の誰に頼むか。

③担当の民生委員
→人材がいないため、司令塔の役を。

④ご近所に在住の看護師
→ご近所内に３人もいる。ご近所に関わっていい人は？

⑤ご近所のケースに関わるケアマネ
→いま誰と誰に関わっているか。住民に協力を求めたいケースは。

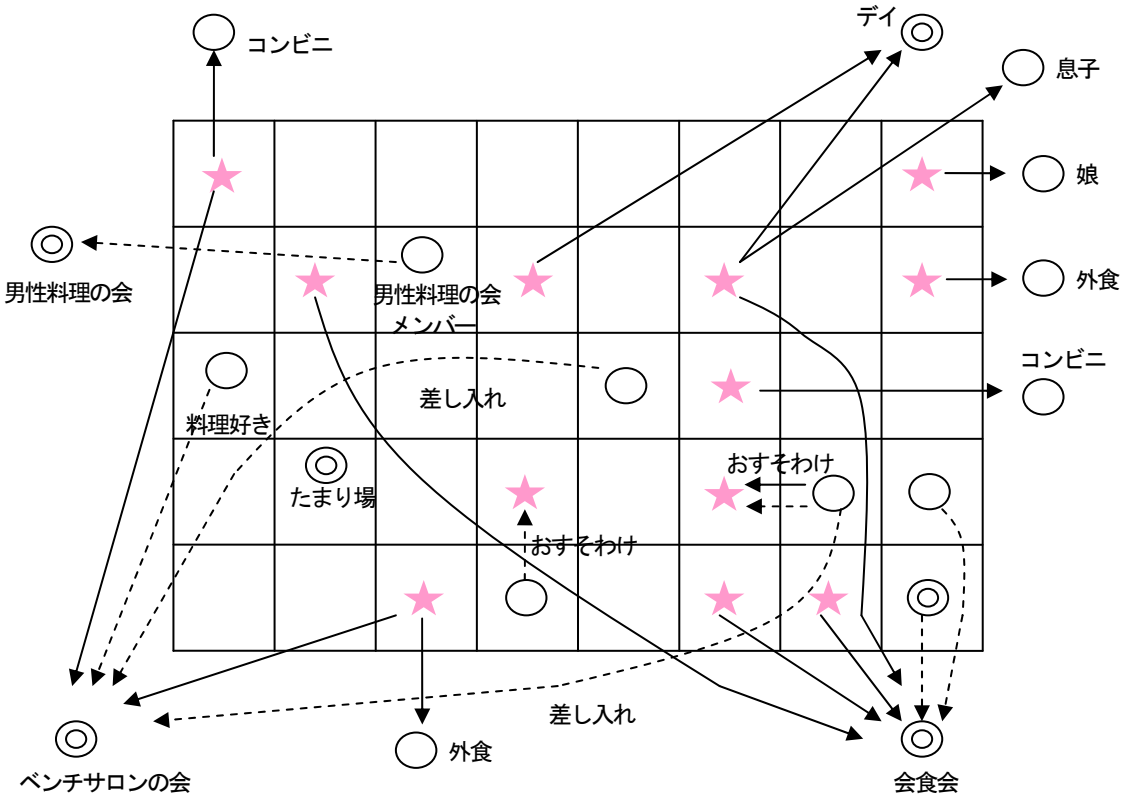
⑥障害児が通っている作業所
→ご近所で関わっていいことは何かを提示してもらう。

⑦不登校児が通う学校の教師
→ご近所でできることはないのか、提示してもらう。

⑧行政当局
→空き室に他地区の世話焼きさんを「出向」させられないか。

＜事例２＞ご近所の「食」関連の資源とニーズを結ぶ

下のマップは４０世帯の小規模の団地。一人暮らし男性を中心に食事の問題があることがわかった。そこで、この団地内に食事に関する助け合いがどれだけ行われているかを調べてみたら、食事に関して団地内でこれだけの助け合いが個々で実践されていた。おまけに別の場所で会食会を開いている人がいて、それに何人かが協力している。どうせならこの団地で開けばいい。担い手はたくさんいるのだから。



そこで以下のような表を作ってみた。左に並べたのは、この団地での食事資源である。これらの資源が、①今のところ誰を対象にしているか、次いで②他の人を受け入れる余力があるか、またその場合の条件は何か、そして③最後にこれから対象となる人は誰と誰か。

ただ、この場合は「対象者」と限定しているが、場合によっては対象者が資源にもなりうる。一人暮らし高齢者が食事のサービスを受けながら、自分も作る側に回るとか。

食関連の資源一覧	現在の対象者	余力・受け入れ条件	対象候補
①コンビニ			
②デイ			
③息子 ④娘 ⑤外食 ⑥おすそわけ＜１＞ ⑦おすそわけ＜２＞ ⑧会食会と協力メンバー ⑨ベンチサロン （差し入れの人） ⑩たまり場 ⑪男性料理の会の一人 ⑫一人暮らし高齢者			

ではこの表の「資源」について一つ一つ解説していこう。
①もしかして一人暮らし高齢者の客について、ある種の特別サービスをしていないか。昔あったように、一人暮らしの客に、店内で他の人と一緒に食べる場を提供するとか。または一人暮らしの人の特別コーナーを設けて、一人暮らし用の商品をまとめて並べるとか。こういう可能性をもってコンビニに働きかけることもできる。
②デイサービスを利用する時に食事をするというものだろうが、センターが利用者以外への便宜を図ることができないか、働きかけてみるのもいい。
③④娘や息子の家に食べに行くという男性もいる。その家が、父親の友人も一緒に受け入れてくれることはないのか。その可能性を探る。
⑤外食でコンビニ以外にどういうものがあるのか。
⑥⑦おすそ分けをしている人が２人いる。この人が、他の人にもおすそ分けをする気があるのかを調べる。
⑧会食会をこの団地内で開けば、もっと参加できる。その場合どの家で開くか、その場合の容量はどのくらいか。ボランティアとして参加できるのは誰と誰か。
⑨ベンチのサロンを開いている人に差し入れが行われている。ここに参加できる人は誰か、提供する側の余力は何人程度か、他に差し入れをしてくれそうな人はだれか。
⑩たまり場になっている家に何人来ているか、他に余力は何人か、その場合の対象者は誰か。
⑪男性料理の会のメンバーがいる。この人は何ができるか。男性の食事会などが自室でできないか。
⑫一人暮らし高齢者がたくさんいるが、一緒に作って一緒に食べようという人がいていい。それは誰か、誰なら受け入れるか。この場合は彼らが対象者にも担い手にもなり得る。

この図を生かして、さまざまな可能性にチャレンジしていくのである。デイサービスやコンビニ、個人宅、一人暮らし高齢者宅、差し入れやおすそ分けをしている人、たまり場になっている人など、個々にさらなる活動を働きかけていくのである。ただのおすそ分けから、何人かを自室に招いて食事会を開けないか、など。

食事は１日に３度しなければならない。だから一人ひとりが、これらの資源の複数を上手に使い分けていく必要があるが、本人もただの「対象者」で収まるのでなく、自分も作る側や招待する側に回ることもありうる。これらの資源をうまく活用して、多彩な食事が行われる団地にしていくのである。

このケースでは、推進会議のメンバーはどういう人たちになるだろうか。そしてその人の主たる役割は？

助け合い推進会議の主要メンバー

①会食会の主催者
→彼女の協力者数名も。この団地で開けないか。その場合の場所は？

②父親に食事を提供している息子や娘
→父親の友人も一緒に受け入れてくれる人がいないか。

③コンビニの店長
→一人暮らしの顧客に便宜を図る気があるか。

④差し入れやおすそ分けをしている人
→他の人も対象にする余力があるか。

⑤デイサービスセンター
→利用者以外の人に食事を提供することができるか。

⑥ベンチサロンの会のメンバー
→仲間を増やせるか、何人まで可能か。

⑦自室開放のたまり場の当主
→対象者を増やせるか。

⑧男性料理の会メンバー
→この団地での食事サービスに、他のメンバーも協力できるか。